Vol. 72 通巻835号　平成3年10月25日発行　毎月1回25日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

建築と社会

ARCHITECTURE AND SOCIETY

1991

10

特集

自治体住宅政策への提言

大林組創業100年記念

日本建築協会



Day by Day ── きっといい明日

大阪ガス

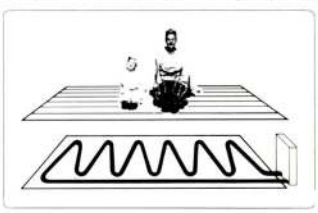
◎新居に床がある限り、床暖房はカンタンです。

近い将来、新居を計画してる方と、
遠い将来だけど、予定はしてるぞって方に、お伝えします。
これからのおうち暖房は、ガス温水床暖房がいいですよ。
ぜひ、よーく知って欲しいのですよ。
みんなが思ってる以上に、身近なモノなのですよ。



そのぬくもりは、日なたぼっこみたいなんです。

床の下にお湯をめぐらせてあたためる温水床暖房は、頭寒足熱の健康的な暖房です。しかも、皮ふ内の温点に直接作用する遠赤外線効果で、からだの芯までポカポカに。寒い冬の日も、日だまりみたいなお部屋で過ごせるんですね。



その燃費は、ホントは安あがりなんです。

とはいうものの、ガス代が気になるわって声に、ズバリお答えします。1時間でわずか約17円、1カ月でも約3,050円。お部屋を効率よくあたためる温水床暖房ならではの、うれしい燃費です。これなら冬中使い続けられますね。

※1時間当たり　1日6時間連続運転した場合ひと月当たり　1時間当たりのガス代：6時間×30日6畳洋室　外気温5℃　湿度60%　室温18℃　ガス119.42円　㈱大阪ガス実測値

その工事は、おおげさに考えなくて大丈夫。

家を建てる前に計画しておけば、とってもスムーズに設置できますよ。洋室から和室まで、床材も豊富に揃ってます。設置にかかる費用もそんなにおおげさな値段ではありません。ホントです。まずは大阪ガスに、声をかけてください。

ガス温水床暖房

（よーし、わが家も考えてみようと思ったら、）

【ガス温水 床暖房に関する資料請求・お問合せは、お近くの大阪ガス各支社まで】

大阪支社　大阪市西区千代崎3-2-95 ☎ 06(586)3200
南部支社　堺市住吉橋町2-2-19 ☎0722(38)1131
北部支社　高槻市藤の里町39-6 ☎0726(71)0361
東部支社　東大阪市稲葉2-3-17 ☎0729(62)1131
兵庫支社　神戸市中央区東川崎町1-8-2 ☎078(360)3100
京都支社　京都市下京区中堂寺粟田町1 ☎075(312)3961
奈良支社　奈良市学園北2-4-1 ☎0742(44)1111
和歌山支社　和歌山市本町1-5 ☎0734(31)2481
兵庫西支社　姫路市神屋町4-8 ☎0792(85)2221
豊岡支社　豊岡市三坂町6-57 ☎0796(23)2221
湖南支社　草津市追分町字荒堀680-1 ☎0775(62)5311
彦根支社　彦根市大東町12-11 ☎0749(22)3131

九州話題建築見学会(2日間)—今、博多・熊本が面白い—

今、九州が面白い。特に最近の変貌著しい博多、そして熊本のアートポリス構想が注目されています。その中から話題建築を選び、2日間の見学会を企画しました。各建物について、個人的見学では得られない企画設計者等の説明をお願いしていますので、ぜひこの機会にご見学ください。

日　時　1991年11月29日㈮12：00～17：00
30日㈯8：00～18：00

見学先

29日　ネクサスワールド、説明 福岡地所
(福岡市東区香椎浜4-11-27、コーディネーター：磯崎新、1991年3月1期竣工)
西部ガスミュージアム、説明 葉デザイン事務所
(福岡市早良区百道3、設計：葉デザイン事務所、1989年1月竣工)

30日　くまもとアートポリス、説明 熊本県くまもとアートポリス事務局
県営保田窪第一団地、説明 熊本県住宅部
(熊本市帯山1-28、設計：山本理顕設計工場、1991年8月竣工)
熊本北警察署、説明 太宏設計事務所
(熊本市草葉町5-13、設計：篠原一男アトリエ＋太宏設計事務所、1990年11月竣工)
熊本市営新地団地A、説明 熊本市住宅部
(熊本市清水町新地1917-58、設計：早川邦彦建築研究室、1991年5月竣工)
八代市立博物館、説明 伊東豊雄建築設計事務所
(八代市西松江城町12-35、設計：伊東豊雄建築設計事務所、1991年3月竣工)

集　合　29日　12：00ネクサスワールド前
15：30西部ガスミュージアム前
30日　8：00JR博多駅前
＊詳細は参加証にてご確認ください。

交　通　29日　自由移動（各自、電車等を利用して現地に集合）
30日　貸切バス（博多駅前→熊本市→八代市→博多駅前）

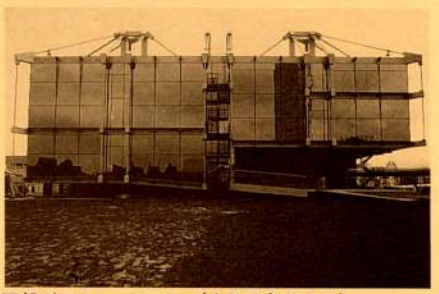
定　員　40人

参加費　会員15,000円、一般20,000円
＊含、見学会費、博物館入館料、30日貸切バス代、30日昼食弁当代、資料代
＊30日貸切バス代以外の交通費、宿泊・夕朝食費等は、各自別途負担願います。

申　込　11月15日㈮までに㈱日本建築協会事業課へお申込みください。
①催し名(九州話題建築見学会)、②氏名、③勤務先、④参加証郵送先、⑤電話番号、⑥会員・一般の別、をお知らせ願います。
㈱日本建築協会事業課
〒530 大阪市北区梅田1－1－3－2100
TEL06-348-0633　FAX06-348-0634
＊申込多数の場合は抽選で参加者を決定します。
＊参加証と参加費振込先を11月18日㈪に発送します。
＊11月26日㈫までに（振込の場合は必着）参加費をお納め願います。


(全体完成模型)

◁ネクサスワールド
香椎浜は、シーサイドももちと共に、将来の福岡市副都心と目されている。福岡地所がプロデュース、磯崎新がコーディネート。1期として日・米・欧の気鋭の建築家6人、オスカー・トゥスケ、クリスチャン・ド・ポルザンパルク、石山修武、マーク・マック、レム・クールハース、スティーブン・ホールが競作している。各集合住宅建物が強烈な個性を発揮しながら全体景観として不思議にまとまりのある街区を形成している。


西部ガスミュージアム（自然現象美術館）
シーサイドももちの中心施設の一つ。地元に事務所を構える葉祥栄氏が、ガラスとスチールによる最新技術を駆使した美しい吊構造建築。
一付近には、福岡タワー、福岡ウォーターフロントプロムナード・マリゾン、福岡市博物館、戸建・集合住宅群等があり、自由見学をお勧めします。


熊本県営保田窪第一団地
山本理顕氏が、集合住宅における住まい方に対して斬新な提案をしている話題作。住戸配置、デザイン、広場等により、豊かなアメニティの演出をテーマとしている。


熊本北警察署
篠原一男氏が、警察署という堅苦しいイメージを一新した作品で、大胆な構造の採用と、その表現で、軽やかな浮遊感を与えている。


◁熊本市営新地団地A
早川邦彦氏が、5階建170mの中層棟、2・3階建囲み型の低層棟、吹抜、中庭、プール等の巧みな配置により、快適な住空間と豊かな共有空間を創出している。

八代市立博物館(未来の森ミュージアム)▷
伊東豊雄氏の最新話題作。建物全体をなかば人工丘の中に納め、収蔵庫を空中に持ち上げ、未来の蔵としての博物館のあり方をシンボリックに表現している。



大阪国際 平和センターをめぐる風景
ーシーラカンス作品展・講演会ー

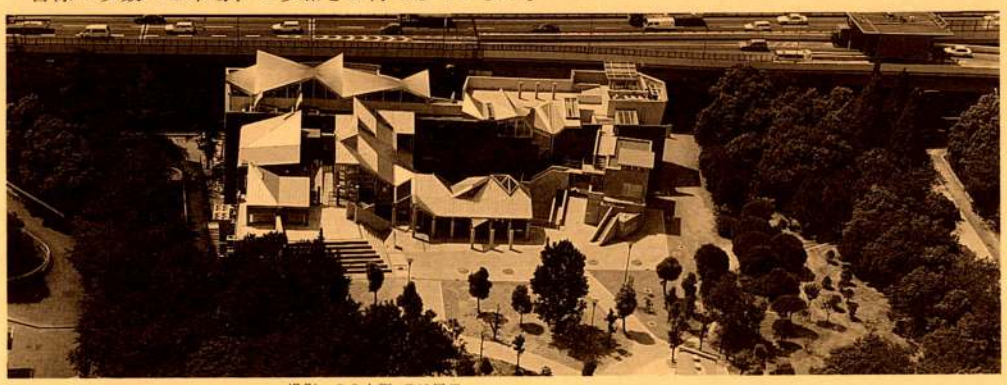
くしくも湾岸戦争のあった本年、大阪城公園の一画に、平和のための建築「大阪国際平和センター」が9月17日オープンしました。

湾岸戦争の生々しい報道を通じて、平和の大切さを改めて考えさせられた方も多いと思います。

今回オープンした「大阪国際平和センター」は、いま全国各地で計画されている平和資料館の先頭を切って完成したもので、1989年2月全国公開コンペにおいて253点にのぼる応募作品の中から最優秀に選ばれた、若手建築家集団シーラカンスの代表作ともいえる力作です。

〝大阪国際平和センターをめぐる風景〟と題された当企画は、シーラカンスが、建築を通して問いかける平和へのメッセージ、そして、その個性的な設計手法、デザインを、大阪国際平和センターを中心とした作品展と講演会、見学会を通じて紹介しようとするものです。

皆様の多数のご来場、ご参加をお待ちしています。



撮影　ＳＳ大阪　花城辰男

□作品展

日　時　1991年11月12日(火)—17日(日)
11：30—19：30

会　場　ソニーサロン(心斎橋ソニータワー9階)
大阪市中央区心斎橋筋1-1-10 TEL06-251-2391

内　容　模型、写真・図面パネル等の展示

入場料　無料

大阪国際平和センター（ピースおおさか）

所在地　大阪市中央区大阪城2-1
建築主　財団法人大阪国際平和センター
設計監理　大阪市都市整備局営繕部
　　シーラカンス一級建築士事務所
施　工　大林組
建築面積　1,783.99㎡
延床面積　3,483.79㎡
構造規模　ＲＣ＋Ｓ、３Ｆ
設計期間　1989年1月—1990年3月
施工期間　1990年3月—1991年7月

□講演会（含、見学会）

日　時　1991年11月16日(土)14：00-17：00

会　場　大阪国際平和センター講堂

講　師　シーラカンス

ゲスト　粟津　潔／グラフィックデザイナー
大阪国際平和センター理事・展示委員長
林　昭男／建築家
「平和と環境を考える建築家」代表

定　員　200人（申込者多数の場合は抽選）

参加費　会員　1,000円、一般　1,500円
※入館料（団体割引）200円が別途必要

申　込　11月7日(木)までに、下記までお申込み下さい。氏名、会員・一般の別、勤務先、参加証送付先、電話番号をお知らせ願います。

㈶日本建築協会事業課
〒530　大阪市北区梅田1-1-3-2100
FAX 06-348-0634　TEL 06-348-0633
※参加証を11月8日(金)に発送します。

シーラカンス　COELACANTH ARCHITECTS

●パートナー

伊藤恭行　1959年神奈川出身　東京都立大学助手
工藤和美　1960年福岡出身
小泉雅生　1963年神奈川出身
小嶋一浩　1958年大阪出身
日色真帆　1961年千葉出身　神戸芸術工科大学助手
堀場　弘　1960年東京出身

●主な作品

ＳＥＬＦＩＳＨ／1991（東京）
桜台アパートメント／1990（東京）
ＴＲＡＮＳ／1989（東京）
江古田アパートメント／1989（東京）
北山コンドミニアム／1987（京都）
ＢＵＯＹＡＮＴ／1987（静岡）

主　催　社団法人日本建築協会
　　事業委員会・若い会員の集い小委員会
　　内仲　毅、松隈　章、龍野豪利、長嶌史明、松本　明、村松一彦、山口圭一、山本勝彦
後援協力　財団法人大阪国際平和センター
協　賛　大林組、岩崎大理石、きんでん、三晃金属工業、日本板硝子、不二サッシ
　　朝日工業社、タジマ、日本オーチスエレベータ、平田タイル、ホウトク販売、神戸コルク

◀ GALLERY・MA 講演ビデオ映写会

—第 8 回—　日　時　1991年11月25日(月)　18：30～20：30

宮本　忠長「小布施の詩」(56分) 1990．2．17講演

「長野県・小布施町並修景計画」が完成されていくプロセスを中心に、氏の建築思想、設計の技を紹介する。

受賞作品：須坂市公民館・働く婦人の家／長野県知事賞（1975）、長野市立博物館／日本建築学会賞作品賞(1982)、小布施町並修景計画／第12回吉田五十八賞（1987）

北川原　温「横たわる円錐」(60分) 1990．12．29講演

代表作となった渋谷の「RISE」ビルをはじめ、最近の作品を紹介しながら、氏の設計思想を「円錐」というキーワードを通して具現化する。

紹介作品：RISE（1986）、小野建設本社屋（1987）、METROCA（1989）、VASARA（1989）等

◀ GALLERY・MA 講演ビデオ映写会

—第 9 回—　日　時　1991年12月16日(月)　18：30～20：30

阪田　誠造「多様な相とひとつの理念」(80分) 1990．10．19講演

建築は、人々の共感を得るものでなければ、生き生きとした寿命を全うすることができない。幅広いジャンルの作品を通して、坂倉建築研究所の設計思想を語る。

紹介作品：横浜人形の家（1986）、東京サレジオ学園（1989～90）、川崎定徳日本信託銀行(1989)、山下公園再整備(1989)、箱根桜庵（1990）等

黒川　紀章「黒川紀章と美術館」(50分) 1990．2．22講演

部分と全体、歴史と現在、技術と人間—相対する要素を同時に包含する「共生の思想」を基に、最近の美術館作品を紹介する。

紹介作品：埼玉県立近代美術館（1982）、名古屋市美術館（1987）、広島現代美術館(1988)、小松市立本陣記念美術館(1990)、ルーバン・ラ・ヌーヴ美術館（ベルギー・1990）等

会　場　㈳日本建築協会サロン（大阪駅前第３ビル21階）
定　員　30人
参加費　無料
協　賛　東陶機器㈱

＊申込者多数の場合は抽選で参加者を決定します。
＊参加証を開催日の１週間前に発送します。

申　込　ハガキ、FAX、電話で、開催日の１週間前までに㈳日本建築協会事業課へお申込みください。催し名（GALLERY・MA 講演ビデオ映写会第○回）、氏名、会員・一般の別、勤務先、参加証送付先、電話番号をお知らせ願います。
㈳日本建築協会事業課　FAX348－0634　TEL348－0633
〒530　大阪市北区梅田１－１－３－2100

日本建築協会企画図書目録

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書　発行：学芸出版社

NO	書　籍　名	税込価格
1	茶室の話（岡田孝男著）	￥1,339-
8	建具の知識と意匠（山片三郎著）	￥1,339-
9	エレベータ（木村利雄著）	￥1,339-
13	医院・診療所の計画と設計（池田有隣・船越暉由著）	￥1,339-
15	PC建築の話（下伊豆隆三著）	￥1,236-
16	石垣と石積壁（窪田　祐著）	￥1,339-
17	基礎と地盤の手ほどき（中堀和秀著）	￥1,339-
20	タイルの話（田中　弘著）	￥1,339-
24	鉄骨構造の話(金多潔・甲津功夫・西澤英和著)	￥1,339-
27	建築積算業務（生島道春著）	￥1,442-
28	建築金物の知識（立野一郎著）	￥1,339-
29	瓦と屋根構造（佐藤滋朗著）	￥1,442-
32	建築塗装の手引き（児島修二著）	￥1,442-
33	建築式典の実際（若林嘉津雄著）	￥1,339-
38	住宅の照明（大島　博監修）	￥1,442-

日本建築協会創立70周年記念事業

選書特装版　発行：学芸出版社

NO	書　籍　名	税込価格
1	構造コストと経済設計（須賀好富著）	￥3,605-
2	建築設備の健康診断（牧野　茂著）	￥3,914-
3	新・建築と設備の接点（宮脇　毅・南部　武著）	￥3,605-
4	外壁構法チェックリスト（飯塚五郎蔵著）	￥3,399-
5	建築デザインのための構造計画（須賀好富著）	￥2,884-
6	場所打ち杭の設計と施工（阪口　理著）	￥3,296-

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇

〈プロのノウハウ〉シリーズ　発行:学芸出版社

NO	書　籍　名	税込価格
1	TQCから見た建設業（荒木睦彦著）	￥1,648-
2	躯体工事監理のチェックポイント100（須賀好富著）	￥2,060-
3	パソコン会計術（西部明郎著）	￥1,854-
4	建物の値打ちの高め方（小林清周著）	￥1,751-
5	空調設備のトラブル50（建築設備トラブル研究会著）	￥2,060-
6	衛生設備のトラブル50（建築設備トラブル研究会著）	￥2,060-
7	火災安全学入門（岡田光正著）	￥1,700-
8	現場マンのアイデア発想（合原一夫著）	￥1,854-
9	建築基準法の実際（矢吹茂郎著）	￥1,854-
10	工務店の税金対策100ポイント（建設税務研究会著）	￥1,854-
11	工業化住宅・考（松村秀一著）	￥2,060-
12	鉄骨工事の現場学（石田満裔著）	￥2,060-
13	建築紛争の実際（岡本辰義著）	￥1,854-
14	仕上工事監理のチェックポイント（監理業務研究会著）	￥2,060-
15	ゼロ災への道（表　一郎著）	￥1,648-
16	木造住宅のしくみ（浅野平八・東　敏博著）	￥2,060-
17	コンクリート工事のチェックポイント100（加賀秀治著）	￥2,060-
18	インテリアコーディネートの100ポイント（町田ひろ子監修）	￥1,648-
19	建築基準法を読みこなすコツ（高木任之著）	￥2,060-
20	ニュー組積建築のすすめ（福嶋孝之著）	￥2,060-

日本建築協会事務局でお求めの場合、建築技術選書と〈プロのノウハウ〉シリーズが100円割引き、選書特装版が200円割引きでおのおの頒布しておりますのでせいぜいご利用下さい。

◀'91～92年版日本建築協会会員名簿頒布お知らせ

会員の皆様方待望の'91～92年版会員名簿が出来上がりました。

この名簿は、建築界に活躍される会員の現況（出身校・現住所・勤務先・所在地）を紹介するばかりでなく、官公庁・学校・関係諸団体のほか、建築事務所、建設、建材、設備その他関係業者の主要なものを業種別に収録しており、日常業務に大いに役立つものとおもわれます。また、年賀の資料にもご利用いただけますので、何卒お買い求め下さるようお願い致します。

なお、すでにお申し込みの方、営業案内欄掲載の各社へは、発行と同時に一部ご送付申し上げておりますので、申し添えます。

記

1．体　裁　B５判　272頁　本文上質紙
1．定　価　3,000円（消費税含む）　〒310円

なお、３月末日までにお申込みの方は、**会員特価**として**送料・消費税込み**の2,500円でお頒け致します。

◀'91建築関係団体合同忘年懇親会

関西建築界の恒例行事である忘年懇親会を、本年も建築関係団体合同で開催することになりました。多数の建築関係者が集い、親交を深めます。何卒ご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

日　時　平成３年12月13日㈮　午後６時～７時30分
会　場　太閤園ガーデンホール
（ビュッフェ・スタイルのパーティ）
大阪市都島区網島町９－10　電話06（356）1111番
（京阪京橋駅より西へ徒歩10分・市バス東野田より徒歩５分）
会　費　8,000円（別に多額の補助があります）
●ご面倒ですが会費を添えて申込期間中（11月11日～12月５日）に共催団体事務局までお越し下さるか、現金送金にてお願いします。（土曜休日）
●申込者には忘年懇親会参加証をお渡しします。
定　員　400名
余興・福引　豪華景品が当たります。（寄贈品を含む）
お土産　参加者全員に進呈
お願い
(1)出席者名簿を作成しますので申込の際に氏名・勤務先をお知らせ下さい。
(2)申込者で12月５日までに欠席の連絡がない場合は会費のご負担を願います。
(3)当日は参加証で受付いたしますから必ずご持参願います。
共　催　㈳日本建築協会　㈳大阪府建築士会　㈳大阪建築士事務所協会　㈳新日本建築家協会近畿支部
協　賛　㈳日本建築学会近畿支部　㈳大阪建設業協会　㈳日本建築材料協会　㈳建築業協会関西支部　㈳日本建築構造技術者協会関西支部　㈳日本建築積算協会関西支部　㈳建築設備技術者協会近畿支部

◀'92建築関係11団体合同新年交礼会

日　時　平成４年１月６日㈪　午後２時～３時
会　場　マイドーム大阪３階宴会場（大阪市中央区内本町）
会　費　3,000円（申込者で当日欠席されても会費をいただきます）
申　込　12月10日までに会費を添えて最寄りの団体にお申込下さい。
共　催　㈳日本建築協会　㈳大阪府建築士会　㈳日本建築学会近畿支部　㈳新日本建築家協会近畿支部　㈳大阪建設業協会　㈳日本建築材料協会　㈳大阪建築士事務所協会　㈳建築業協会関西支部　㈳日本建築構造技術者協会関西支部　㈳日本建築積算協会関西支部　㈳建築設備技術者協会近畿支部

◀「建築工事共通仕様書」―日本建築協会で頒布始める

社団法人新日本建築家協会監修、大阪府建築家協同組合発行の下記仕様書、ノートの頒布を始めました。

従来当協会で頒布している「四会連合協定・工事請負契約約款」と併せて、皆さまのご利用をお待ちしています。

品　名	価格（含消費税）
1991年度版　建築工事共通仕様書	2,900円
1991年度版　建築設備工事共通仕様書	3,300円
第15版　現場監理ノート（建築編）	2,600円
第15版　現場監理ノート（設備編）	2,600円
第３版　設計チェックノート	515円

なお、1991年度版　特記仕様書ガイドブック、制定書式501号（見積表書）、502号（工事別内訳）、503号（内訳その１）、504号（内訳その２）、505号（コンクリート・型枠集計）、506号（鉄筋集計）、507号（鉄骨集計）、508号（横ケイ紙その１）、509号（横ケイ紙その２）、601号（５㎜方眼・枠線なし）、602号（５㎜方眼・枠線入り）についても、ご入用の都度お取りつぎいたしますので、ご利用下さい。（事務局・総務課）

◀「建築保全業務積算要領」講習会
―日本建築協会後援

平成２年度に発刊された「建築保全業務共通仕様書」に基づく、建物および付帯設備の運転・監視・保守・点検の合理的な積算方法が、「建築保全業務積算要領」としてこのほど発刊されました。

この要領は官公庁施設だけでなく一般建物にも十分適用できる内容となっており、これをテキストに、講習会が開かれます。

「建築保全業務積算要領講習会」の開催日時・会場・内容

会場／日時	神戸 1991年11月26日㈫ 13：00 神戸市教育会館 神戸市中央区中山手通４-10-５ ＴＥＬ078－222－4111 定員 150人	大阪 1991年11月27日㈬ 13：00 大阪府教育会館たかつガーデン 大阪市天王寺区東高津町７-15 ＴＥＬ06－768－3911 定員 200人
総括 13：10～14：10	建設省近畿地方建設局営繕部 工務検査課長　林紘一郎	左　同
電気関係 14：10～15：10	建設省近畿地方建設局営繕部 工務検査課電気係長　橋本　力	左　同
機械設備 15：20～16：20	建設省近畿地方建設局営繕部 工務検査課機械係長　丸山良一	左　同
建築関係 16：20～16：50	建設省近畿地方建設局営繕部 工務検査課保全係長　古谷　正	左　同

受講料　テキスト(イ)(ロ)ともある方　6,500円（消費税込み）
テキストのない方　6,500円＋テキスト代（同　上）
テキスト　(イ)平成３年版　建築保全業務積算要領　（定価5,500円税込み）
(ロ)平成２年版　建築保全業務共通仕様書（定価5,500円税込み）
申　込　受講申込書に必要事項を記入し、各地区の経済調査会へ（関西地区の講習会は経済調査会関西支部06－312－7221）お申し込み下さい。定員になり次第締め切ります。
主　催　㈶建築保全センター　㈶経済調査会関西支部
協　賛　㈳営繕協会近畿地区事務局
後　援　建設省近畿地方建設局　㈳日本建築協会ほか

◀出江寛講演会「京都と現代建築」
―日本建築協会京都支部後援

日　時　1991年11月８日㈮　PM６：00～８：00
会　場　京都商工会議所３階講堂（京都市中京区烏丸通夷川上ル）
定　員　350名（当日先着順）―入場無料―

1917創刊
1991
72集

建築と社会 © ARCHITECTURE AND SOCIETY
CONTENTS
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

10 通巻 835

「建築と社会」10月号表紙
デザイン・白子正人
（グラフィックデザイナー 日本タイポグラフィ協会会員）

垂直と水平のラインで構成された都市の中にあって、異質の曲線は視線をよく引き付け、そしてそれを休息させてくれる。
今月号のモチーフは、そんな美しい曲線が織り込まれた「広島県民文化センターふくやま・エストパルク」。
カラーリングは、日本の伝統色チャートより「香色」。レイアウトはその香色のように、やわらかく控え目に香らせたいという意図。いかがなものでしょうか。

■特集予告
11月号／第38回青年技術者建築と土木（構造篇）
12月号／スリムでタフなコンクリート
21世紀の住まいを考えるシンポジウム

会長 佐野正一
副会長 金多 潔・薬袋公明
市川 宏・鴻池藤一
編集委員会（平成3年度）
■編集理事
井上 豊 / 金井 弘次 / 川島 繁三 / 小島 雄 / 須賀 好富 / 竹中 練一 / 深江 實 / 松村 慶三 / 溝神宏至朗 / 若山 繁
■編集委員長
溝神宏至朗
■編集顧問
東 孝光
■編集委員
★計画系分科会
☆計画系
梅村 宏尚 / 河端 秀直 / 小浦 久子 / 鈴木 克彦 / ○田中 直人 / 中井 省吉 / 松川 敏正 / 山尾 弘子 / 横関 真紀 / 吉村 英祐
☆建築計画系
石山 道男 / 磯村千恵子 / 上杉 秀隆 / 江副 敏史 / 菅野 忠司 / ○北村 潤 / 黒川 明彦 / ※佐藤不二男 / 塚本 史郎 / 刃金 国男 / 山本 匡 / 吉羽 逸郎
☆インテリア・住宅系
大森 智子 / 大橋眞由美 / 加藤 力 / 角方 利幸 / ※神谷 剛 / ○北浦かほる / 駒田 哲男 / 中村 孝之 / 西川 純一 / 福田 由利
★構造分科会
稲葉 繁夫 / ○角 彰 / 多賀 謙蔵 / 野村外喜夫 / 馬場 研介
★設備分科会
池田 秀行 / 遠藤 進 / 大田 克彦 / 梶井 宏修 / 河津 隆之 / ○伊達 正雄
★施工材料分科会
有光 利治 / 植田 実 / 小椎八重猛 / 志水 史典 / 加藤 眞 / ○村上 信直
★法令分科会
稲継 典彦 / 岩田 純一 / 樫田 攻 / ○佐藤 勝 / 高見 成志 / 中島 弘志
■作品作風小委員会
荒川 米美 / 遠藤 公介 / 尾崎 久純 / 岡本 隆 / ※北澤 修一 / 田中 均一 / 富田 昌義 / 福地 一彦 / 前川 治彦 / 松田 善弘 / 松村 衡 / ○宮下 幹雄 / 水川 尚彦
■会員企画小委員会
伊藤 郁郎 / 稲木 裕子 / 尾崎 俊文 / 大沢 智弘 / 北村 恭一 / グレッグ ホール / 小板橋鉄雄 / 小林 孝一 / ※佐伯由紀子 / 佐野 洋 / ○高田 光雄 / ※高橋 麗子 / 塚口 明洋 / 増渕 昌利 / 山嵜 章子
■広告企画小委員会
※池渕 俊男 / 上井 善一 / 衣川 徳好 / ○佐野 寛志 / 山東 晃 / 下村 甫 / 原田 常介 / 藤田 孝吉 / 山下 修司
○印 副委員長と幹事 ※印 同代行

印刷 平成3年10月20日
発行 平成3年10月25日
発行人 社団法人日本建築協会
発行所 社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電 06—348—0635
振替口座 大阪1-39975
印刷所 日本写植印刷株式会社
電 06—606—1111㈹
青葉印刷株式会社
電 06—351—5428㈹
サン総合印刷株式会社
電 06—454—1481㈹
日本電植株式会社
電 06—357—1803㈹
定価 980円（本体価格951円・送料共 消費税29円）

会告
作品作風
ART PROCESS
ブックステーション
法令コーナー
追悼文
大先輩に聞く
GBRCニュース
会員の頁
建築の眼
特集
特集
インタビュー
作品
大林組設計部紹介
資料
構造の頁197
設備の頁198
月報
INFORMATION
追悼文

特集●自治体住宅政策への提言 — 大阪市におけるケーススタディー — ●大林組創業100年記念

SPECIAL FEATURES ON THE PROPOSALS FOR MUNICIPAL HOUSING POLICY —CASE STUDY IN OSAKA CITY— & THE 100th ANNIVERSARY OF OBAYASHI CORPORATION.

九州話題建築見学会—今、博多・熊本が面白い—．大阪国際平和センターをめぐる風景—シーラカンス作品展・講演会—．GALLERY·MA講演ビデオ映写会—第8回および第9回—．'91～'92年版日本建築協会会員名簿頒布のお知らせ．'91建築関係団体合同忘年懇親会．'92建築関係11団体合同新年交礼会．「建築工事共通仕様書」—日本建築協会で頒布始める．「建築保全業務積算要領」講習会．出江寛講演会「京都と現代建築」 1
広島県民文化センターふくやま・エストパルク 6
設計監理：広島県土木建築部都市局営繕課 日建設計
施工：大林組 富士建設 三島産業
大阪市阿波座センタービル 8
設計監理：大阪市都市整備局 石本建築事務所 新日本設備計画
施工：松村組
大阪フィルハーモニー会館 10
基本設計・監理：南海電気鉄道一級建築士事務所
実施設計：奥村組一級建築士事務所 音響設計：奥村組技術研究所
施工：奥村組
堺筋本町センタービル 12
設計監理：安井建築設計事務所
施工：鹿島建設・竹中工務店・大林組・大成建設・間組・山田組共同企業体
富士電機大阪ビル 14
総合企画・監理：富士電機設備機器統括部
設計監理：安井建築設計事務所
施工：熊谷組
メイセームア（MOOR） 16
設計施工：鴻池組大阪本店
板倉忠則 18
短評4冊／稲木裕子・大沢智弘・山寄章子 20
建築確認支援システムの開発—その2—／岩田純一 21
前田敏男先生を偲んで／横尾義貫．尾亀清四郎．加藤 渉．斎藤平蔵．松浦邦男．松本 衛 24
前田敏男／増渕昌利 26
平成2年度の工事用材料受託試験に関する調査—その2—骨材の品質試験 29
環境振動に対する防振対策
先輩会員の近況とご意見—2— 32
アーキテクチュアルフェア／安田丑作．輸入住宅／川上昌男．広い川のある／猪倉啓行．町並みと公開空地／中村俊難． 34

自治体住宅政策への提言—大阪市におけるケーススタディー —

提言の背景 住宅問題懇談会 36
都市活性化の最優先課題としての住宅政策 塩見 譲 38
地域住宅対策の展開 住田 昌二 40
都心居住の促進 巽 和夫 42
低質木造住宅地の整備と公営、公社の鉄筋コンクリート造住宅の建替 山本 晃 44
民間住宅対策の在り方 椚座 正信 46
ウオーターフロントの開発を含む宅地供給の促進 富安 秀雄 48

大林組創業100年記念

HUMAN ARCHITECTURE HOLON.—21世紀の人間・建築・都市
浅田 彰．鈴木隆之．大林組本店設計部員— 52
HOLONIC CRUISE.—都市游泳
■NATURE CONSCIOUS.—地球とハーモナイズ
神崎東洋ゴルフ倶楽部クラブハウス．オークヒルズ香里．鷹尾山けやき坂．日生ニュータウンサウンズヒル．桜宮リバーシティ・ウォーター・タワー・プラザ．奈良スポーツ振興カントリー倶楽部クラブハウス．
■FEEL COMFORTABLE.—時間と空間のホスピタリティ
明治生命京都パストゥール研究所．スタンフォード日本センター．日本生命今橋ビル．四天王寺国際仏教大学1号館・2号館．PATIO DE ROBLE大林組御影社宅．東洋ホテル（リノベーション）．島津メディカルプラザ．ARCUS（アルカス）．銀水荘別館兆楽
■NEO STANDARD—機能と美のバランス
オーク江坂．藤村大和生命ビル．第三松豊ビルディング．ニッセイ高知本町ビル．大同生命富山ビル．武庫川女子大学薬学部．アサヒビール西宮工場装製場．テクノセンター長岡．
■ART AND DESIGN—時代と呼吸するスタイル
トヨタカローラ南海第二阪和岸和田営業所．白鹿記念酒造博物館．コーナーハウス・ドゥ．ブルク帝塚山．SIRAKAWA RESIDENCE．角座．財団法人大槻清韻会能楽堂．近鉄劇場．近鉄アート館．日本生命京都三条ビル．キングスロードゴルフクラブハウス．ポラール一番館．神戸製鋼所ラグビー部クラブハウス
OBAYASHI OFFICE GUIDE.
WORKS LIST.

ノンウエルド鉄骨によるシステム建築／牧野俊雄 99
吊り金物／野瀬誠治 100
平成3年8月分 101
出雲建築展・シンポジウム—出雲建築フォーラム．マンションリフォーム現状と課題—住まいのリフォームセミナー．錠のかたち・錠のふしぎ展—INAXギャラリー—．夢の封印（Sealing of Dreams）—倉俣史朗展 102
川口喜代枝氏逝く／中島 一 103

広島県民文化センターふくやま・エストパルク

設計監理　広島県土木建築部都市局営繕課　日建設計
施　　工　大林組　富士建設　三島産業



外観



ホワイエ

所 在 地　広島県福山市東桜町１－21
敷地面積　3,083.35㎡
建築面積　2,899.68㎡
延床面積　20,582.24㎡
構造規模　ＳＲＣ、ＢＩＦ、ＩＩＦ、ＰＩ
工　　期　平成元年７月～平成３年３月(県部分)
　　平成元年７月～平成３年５月(住友信託部分)
最 寄 駅　ＪＲ山陽新幹線・山陽本線 福山駅
撮　　影　国際写真、アルプフォートデザイン

「広島県民文化センターふくやま・エストパルク」は県有地の有効利用を図るため広島県が、民間活力導入の為行った事業コンペにより選定実施された複合施設で、広島県と土地信託受託者である住友信託銀行の区分所有の建物です。
広島県施設である「県民文化センターふくやま」には、ホール・文化情報コーナー・文化交流室等が、住友信託部分には、スポーツクラブ・オフィス・レストラン・駐車場等の施設が設けられており、それぞれの機能を補完し合うことで施設全体の機能が高まり、福山を中心とする、地域の活性化の索引的役割を担うことを意図した総合的文化施設です。
敷地は新幹線福山駅に至近の、南側は建て替え工事進行中の福山市役所で、完成時には前面道路をはさみ市民広場と対面する場所となります。
外観は民間施設を高層棟とし駅前広場からも見通しのきく敷地東側に配置し、県施設の文化ホールのステージタワーを高層棟に寄り添わせ、ホール屋根を西側道路に向かい、円弧状の段で順次下げることで威圧感を無くす様に配慮しています。また、この連続した円弧のモチーフで青空に向かって湧き上がる雲の形態を表現することにより、文化が湧きいでることをイメージしています。
敷地が狭いため建物周辺にオープンスペースを設けられなかった分としてピロティとサンクンガーデンを南側の前面道路添いに設けると共に、１階及び地下１階をロビー、ショールーム、レストラン、イベントプラザ等の開放的な空間とし、街のにぎわいを活性化する様に計画しています。
文化ホールは多目的な利用を考慮し、はね上げ機構を使用した可変舞台形式を採用し、５３０席のプロセニアム形式から７０６席のアリーナ形式まで様々な舞台設定が可能です。
また、本格的な音楽や邦楽等の公演を可能にするため反射板使用時の残響時間は空席時1.85秒、80％満席時で1.65秒で内装は音響に理想的な木質としています。

（大泉研二／日建設計・大阪）



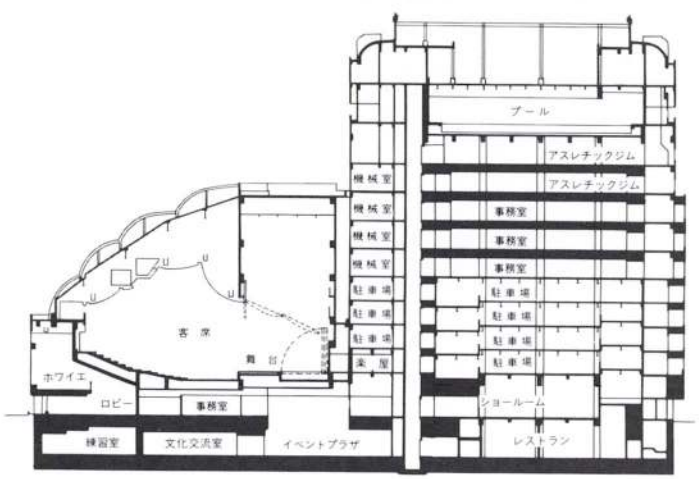
ホール側面



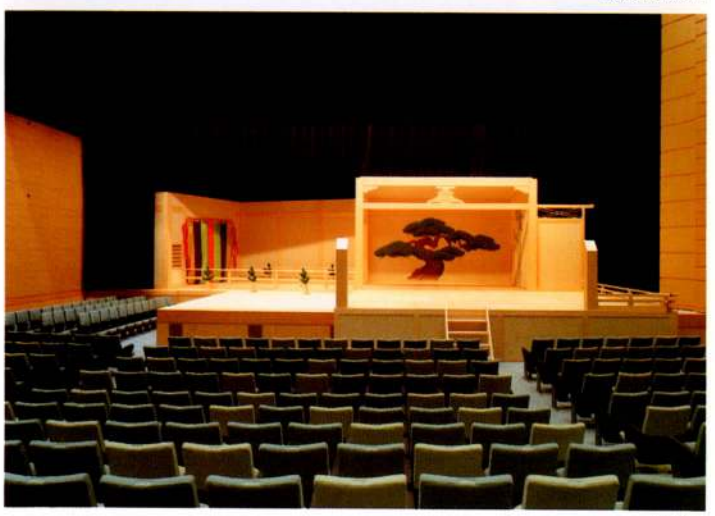
ホール正面



はね上げ舞台



断面図　1：1000



能舞台

大阪市阿波座センタービル

設計監理　大阪市都市整備局　石本建築事務所　新日本設備計画
施　　工　松村組
電　気　協和電設　川北電気工業　　給排水衛生　経塚工業　　昇降機　日立製作所
空　調　大成温調工業　清水工業所　　ガ　　ス　大阪ガス



北西外観

所 在 地　大阪市西区立売堀４－10
敷地面積　2,625.28㎡
建築面積　1,806.57㎡
延床面積　12,446.12㎡
構造規模　ＳＲＣ、ＢＩＦ、７Ｆ、ＰＩ
工　　期　1989年９月～1991年３月
最 寄 駅　地下鉄中央線 阿波座駅

撮　　影　伸和実業

この計画は児童院・高齢者総合相談情報センター・大阪市総務局行政部分室・西スポーツセンターと４つの用途の異なる施設の複合建物である。この複合施設をまとめるデザインとして、大・中・小三つのボールト屋根で構成した。
最も大きな空間を要求されるアリーナに、構造的にも機能的にも効率的な大ボールト屋根を架け、大空間を象徴的に表現した。
次に、柔剣道場の上部に二つ目の中ボールト屋根を、さらにペントハウス部分に小ボールト屋根を架け、どの位置から見てもボールト屋根を持った柔かな表情の親しみ易い建物として計画した。


6階アリーナ


2階通所遊戯治療室


1階多目的療法室


正面玄関ホール①

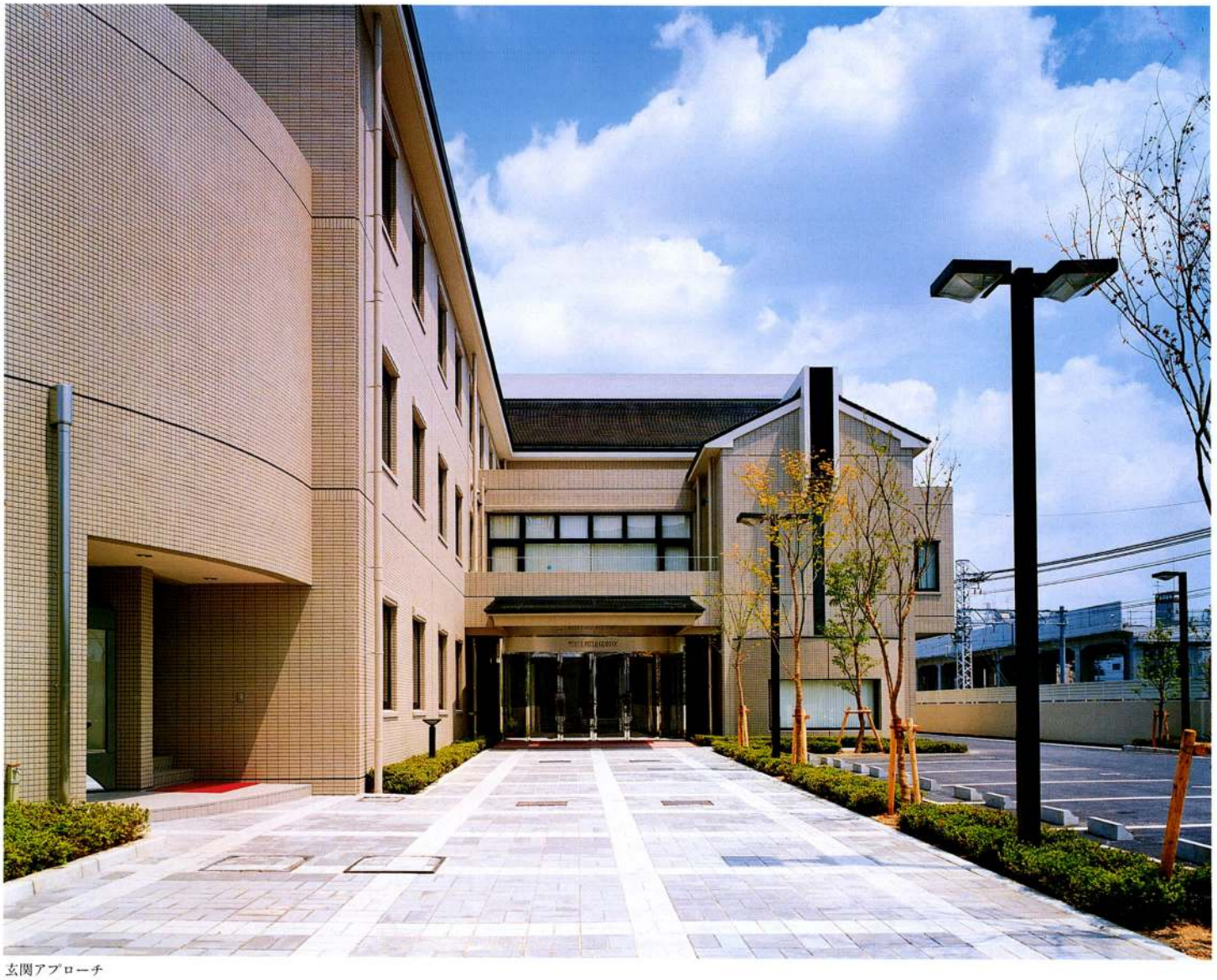


1階平面図　1：1,000


北東鳥瞰

大阪フィルハーモニー会館

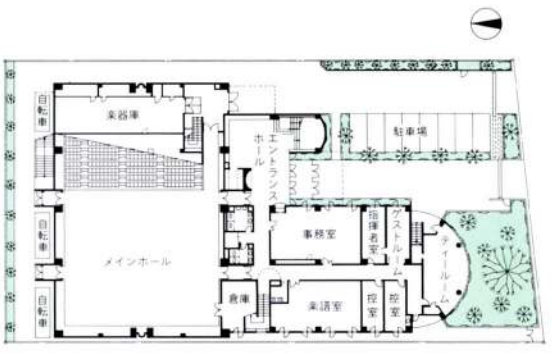
基本設計・監理　南海電気鉄道一級建築士事務所
実施設計　奥村組一級建築士事務所
音響設計　奥村組技術研究所
施　　工　奥村組



玄関アプローチ



外観南東面



1階平面図　1：1,000

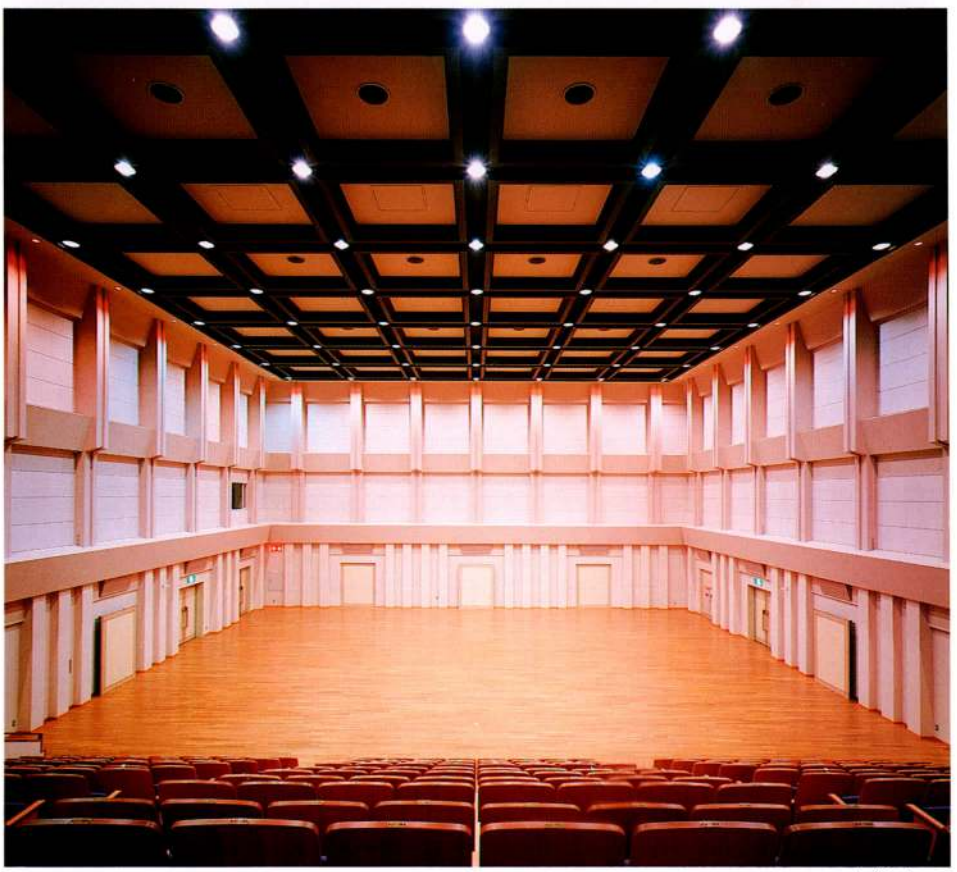
所 在 地　大阪市西成区岸里１－１－４４
敷地面積　2,546.00㎡
建築面積　1,485.30㎡
延床面積　2,977.16㎡
構造規模　ＲＣ(一部Ｓ)、ＢＩＦ、３Ｆ
工　　期　平成２年７月～平成３年６月
最 寄 駅　南海電鉄天下茶屋駅・地下鉄岸里駅
撮　　影　ＳＳ大阪

大阪フィルハーモニー会館は、大阪プール内の狭く老朽化した練習場に替わる大阪フィルハーモニー交響楽団の拠点となる専用練習場として、また、広く市民に音楽活動の場を提供するために計画された。
敷地は、高架化工事が進む南海本線が東に通り、区民センターと並び松虫通りに面する南海電鉄天下茶屋駅前の一画にある。
設計にあたり留意したことは
①大きなボリュームを感じさせない静かな表現での街並み景観への配慮、
②狭い間口の中で主要動線を確保するとともに、ゆとりを感じる建物配置、
③明快で機能的な平面・断面計画、
④メインホール・各練習室の外部騒音との遮音。
である。
建物は最も大きなボリュームとなるメインホールを奥に、その手前に管理部門を含む練習諸室をＬ字形配置とし、道路に沿って豊かな緑地と半円形のティールームを配置している。また“楽団の家”というイメージと、街の人にも親しみを感じる景観となる様、外壁は落ち着いた色のタイル貼とし、切妻の屋根をかけ、屋根裏を設備スペースに活用するとともに、ボリューム感を抑えるのに役立てている。
メインホールの音響については、残響時間2.0秒、柔らかな音でよく響くホールという要望のもとに音響設計を行なっている。また、音の拡散・反射を効果的に行なう為、壁・天井にシンプルな形でリブを設け、ホール全体を引き締めている。
楽団の長年の夢であったこの家が、大阪の文化創造の拠点とし、また青少年の音楽文化向上にも役立ち、地域に密着した会館となることを期待している。





メインホール



メインホール

堺筋本町センタービル

設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　鹿島建設・竹中工務店・大林組・大成建設・間組・山田組共同企業体


南西面外観


南面鳥瞰

この建物は住友生命、協和埼玉銀行及び近畿銀行の３社の共同ビルであり、貸事務所として計画されたものである。

敷地は堺筋本町の交差点にあり、市内の業務地区では珍らしい程の緑に恵まれた場所である。ここに総合設計制度を採用することによって容積の緩和を受けて高層化を図り、土地の有効利用と建物のグレード感を高めることを基本的なねらいとした。またこのビルと同様に総合設計制度を採用し、当社の設計監理でほぼ同時期に竣工した大和銀行本店と、既存の国際ビルや丸紅本社ビルを連担させて、まとまりのあるオープンスペースを確保し、全体としてゆとりのある緑豊かな都市空間を創り出していくことをめざした。

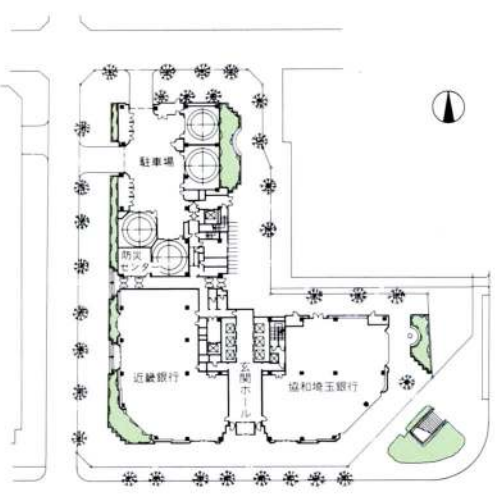
建物は地下１階・地上16階建てとし、道路に面して４Ｍの歩道状公開空地をめぐらせ、本町通り側にビル玄関を設けた。玄関ホールは建物の品位を高めるために、二層吹抜けのゆとりのある空間とし、その左右に両銀行の船場支店を配置した。北側は駐車場として計画しており、全て機械式で収容能力は合計１７０台を確保することができた。

基準階は全面タイルカーペット仕上とした1フロア1,500㎡の無柱のフレキシブルなオフィス空間となっている。またこのビルはインテリジェント化を基本のコンセプトとしており、各種のニーズに対応できるようにしている。

外観は、黒のラスタータイル打ち込みＰＣ版とグレーの熱線吸収ガラスによる横連窓で構成しており、全体に濃いグレーの中にウォールスルーの吸排気機能を持つアルミサッシを白く浮き立たせることによって、シャープなラインを強調した。また、１階廻りの外壁にはノルウェー産の御影石〝ブルーパール〟の本磨きを使用したが、黒のラスタータイルと組合せることによって、個性的で印象の強い表情とすることができた。

歴史ある大阪船場の堺筋本町の一角に、緑に恵まれた上品で現代感覚あふれる雰囲気を持つ街並が形成されることに、この建物が寄与することを期待している。

（関　映一郎／安井建築設計事務所）



配置・１階平面図　１：1,500

所 在 地　大阪市中央区本町２丁目１－６
敷地面積　3,513.85㎡
建築面積　2,093.09㎡
延床面積　35,104.85㎡
構造規模　S、一部SRC、BIF、16F、P2
工　　期　平成元年５月～平成３年５月
最 寄 駅　地下鉄堺筋線・中央線 堺筋本町駅

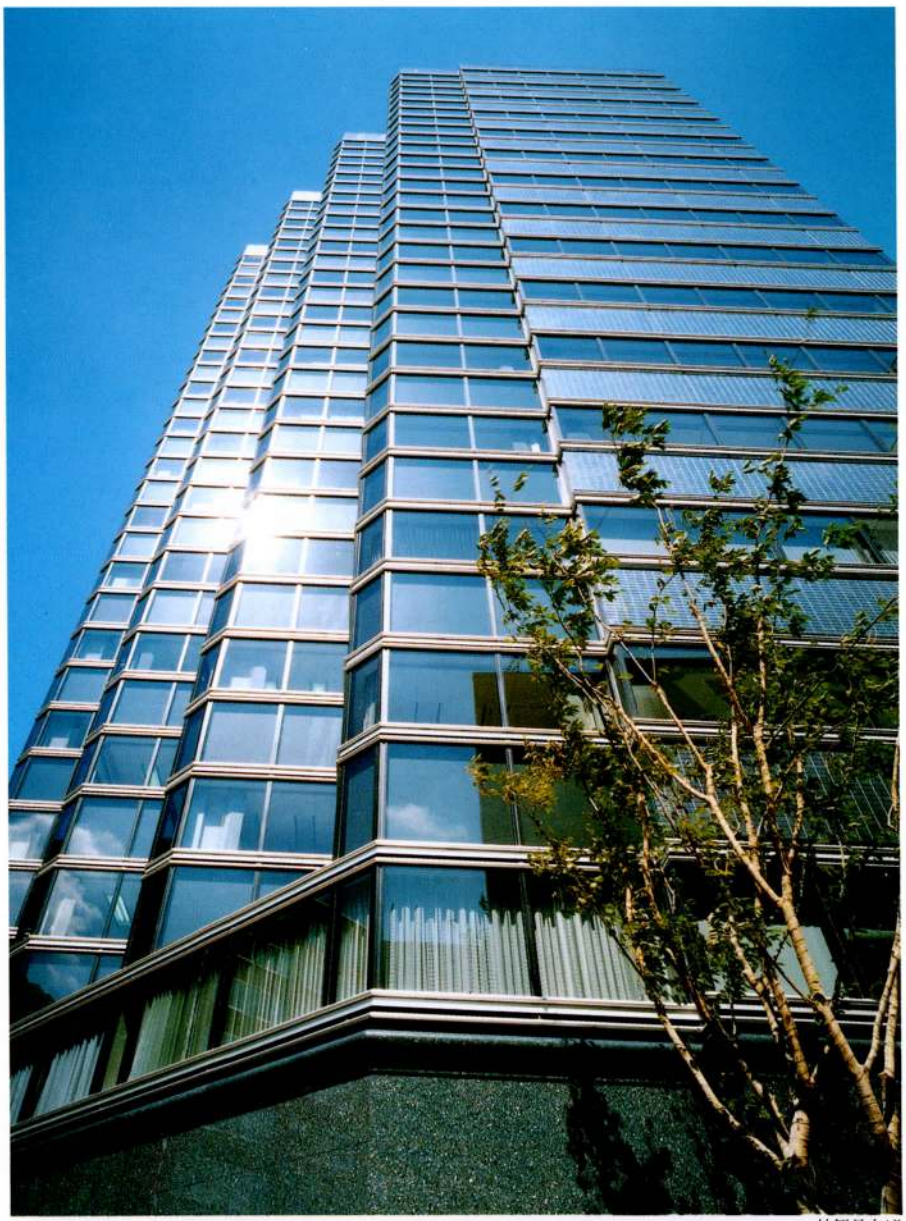
撮　　影　アンコール


銀行クラブ


銀行店舗


銀行店舗


1階エレベーターホール


外観見上げ


1階廻り

富士電機大阪ビル

総合企画・監理　富士電機設備機器統括部
設計・監理　安井建築設計事務所
施　　工　熊谷組



玄関アプローチ

敷地はＪＲ片福線の建設工事が進められている国道２号線に沿った、阪神電鉄野田駅のすぐ近くに立地する。阪神野田駅には近接して地下鉄千日前線野田阪神駅もあり、非常に便利な交通の要衝である。当ビルが着工して間もなく、阪神野田駅北側の再開発工事も着手され、附近一帯は現在急速に整備されつつあり、今後大いに発展が期待できる楽しみな土地である。

富士電機大阪ビルは、１階にショールーム、２階に多目的ホール、９階にカフェテリア（社員食堂）を持った、富士電機グループが入居するテナントビルであるが、「新時代を見つめた富士電機オフィスビルのモデル」、「未来を志向したインテリジェントオフィス」をコンセプトに富士電機グループの総力を結集して構築したインテリジェントビルである。

玄関アプローチの緑はビルの利用者のみならず、近隣住民に対しても街並の潤いの空間となり、玄関ホールやショールームのレストスポット、カフェテリヤ等はビル利用者のやすらぎのスペースとなるよう、中小規模インテリジェントビルにおけるアメニティー度の高い空間の提供を心がけた。

全館ＯＡフロアの採用をはじめ、情報系シャフトや通信ケーブルの配線スペースの確保など、将来への拡充を含めた空間構成にも配慮している。ビル管理システムでは24時間稼動にも対応できるのはもちろん、エネルギー管理・予防保全・故障ガイダンス等も行なうビル運営管理システムを導入している。空調設備として個別分散制御ができるビルマルチ方式を採用、空気熱源ヒートポンプチラー、氷蓄熱方式の導入により省エネルギー化を図っている。また発電効率が高く、将来型発電システムとして期待を集めている、振動と騒音の少ないクリーンなエネルギー「燃料電池発電システム」を導入、排熱回収により温水利用をはかっている。　（清水修平／安井建築設計事務所）

所 在 地　大阪市福島区鷺洲１丁目32―１他
敷地面積　2,506.20㎡
建築面積　1,488.66㎡
延床面積　9,041.61㎡
構造規模　１階ＳＲＣ、上部Ｓ、９Ｆ、Ｐ２
工　　期　平成２年２月～平成３年５月
最 寄 駅　阪神電鉄野田駅

撮　　影　ＳＳ大阪


全景鳥瞰

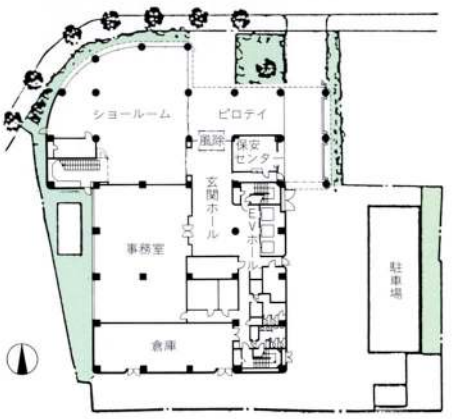

北面外観


１階エレベーターホール


１階ショールーム


２階多目的ホール


９階カフェテリア



配置・１階平面図　１：１０００

給排水衛生・空調　富士電機総設
電　　気　富士電機工事
昇　降　機　フジテック
立体駐車場　古河機械金属　フジテックフロンティア

メイセームア(MOOR)

設計施工　鴻池組大阪本店

メイセームアは大阪市内、安土・桃山時代より商工業の中心地として開発された“船場”と呼ばれる地区の南部に位置し、メイセー株式会社によってオフィスと共同住宅の複合ビルとして建設された。

この建物は計画当初より総合設計制度を採用するものとして斜線制限等により建物の形態に制限が加わらないことを基本目標としてきたが、当時、大阪市が総合設計制度の一貫として新たに制定された都心住宅優遇ボーナス制度の許可第１号として地上13階地下１階のビルとなった。

“船場”地区の開発当初、この附近は一帯は商工業者の居住地域で、天下の台所大阪を代表する豪商の多くが住んでいたが、現在は繊維卸問屋等の密集する地区となっており、夜間人口は著しく少ない地域となっている。ここに居住する為のしつらいを施すためには従来のマンションの形態では困難と考え、大きなＬＤＫを持つ１ＬＤＫとして、通常の枠にとらわれず、職住近接の生活イメージを検討する中で、最適と思われるプランを実現した。

外壁は、南側正面にＳＳＧ工法を採用したアルミカーテンウォール、その他の面は、グレーを基調とした３色のパターンの吹き付けタイルとしているが、カーテンウォールは下層階から上層階へ向かって次第に前面に迫り出しており、３階４階のアール状の部分と併せて、バウ（船首）のイメージを具現化したもので、土佐堀川（旧淀川本流）の船着き場から由来した“船場”という地名を甦らせている。

この建物の南側を通る順慶通りを歩いていると突然、前面の公開空地と共に周りの建物に比べて10ｍ以上も高いこのメイセームアが見える。ある意味では現状の街並にそぐわない建物といえるかも知れない。

しかし、狭小な敷地に建物がひしめき合うこの地区の現状を考えたとき、この建物が将来の新しい街並創造のための試金石になればと考えている。ムア（ＭＯＯＲ）の名前の由来は、Model Of Office and Residence の頭文字をとったもので、船を係留するという意味を持つ。

（岩田俊彦／鴻池組大阪本店）

◀南側外観

▼夜景



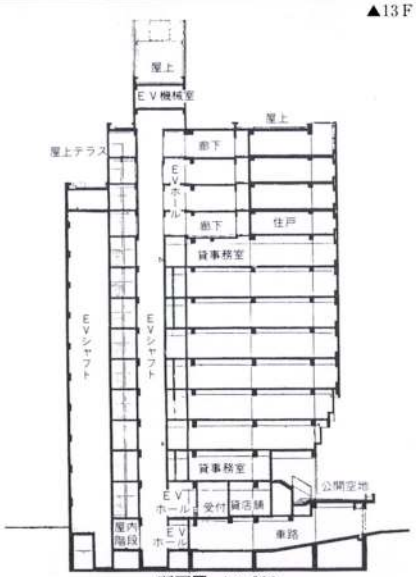
所 在 地　大阪市中央区南船場３丁目８番７号
敷地面積　651.65㎡
建築面積　498.60㎡
延床面積　5,434.00㎡
構造規模　SRC、B1F、13F、PIF
工　　期　1989年９月～1991年３月
最 寄 駅　地下鉄御堂筋線心斎橋駅
撮　　影　上諸　尚美／伸和実業

▼モニュメント(左)レインボーストーンズ 今井祝雄氏作
(右)陶天柱 森 喜久雄氏作





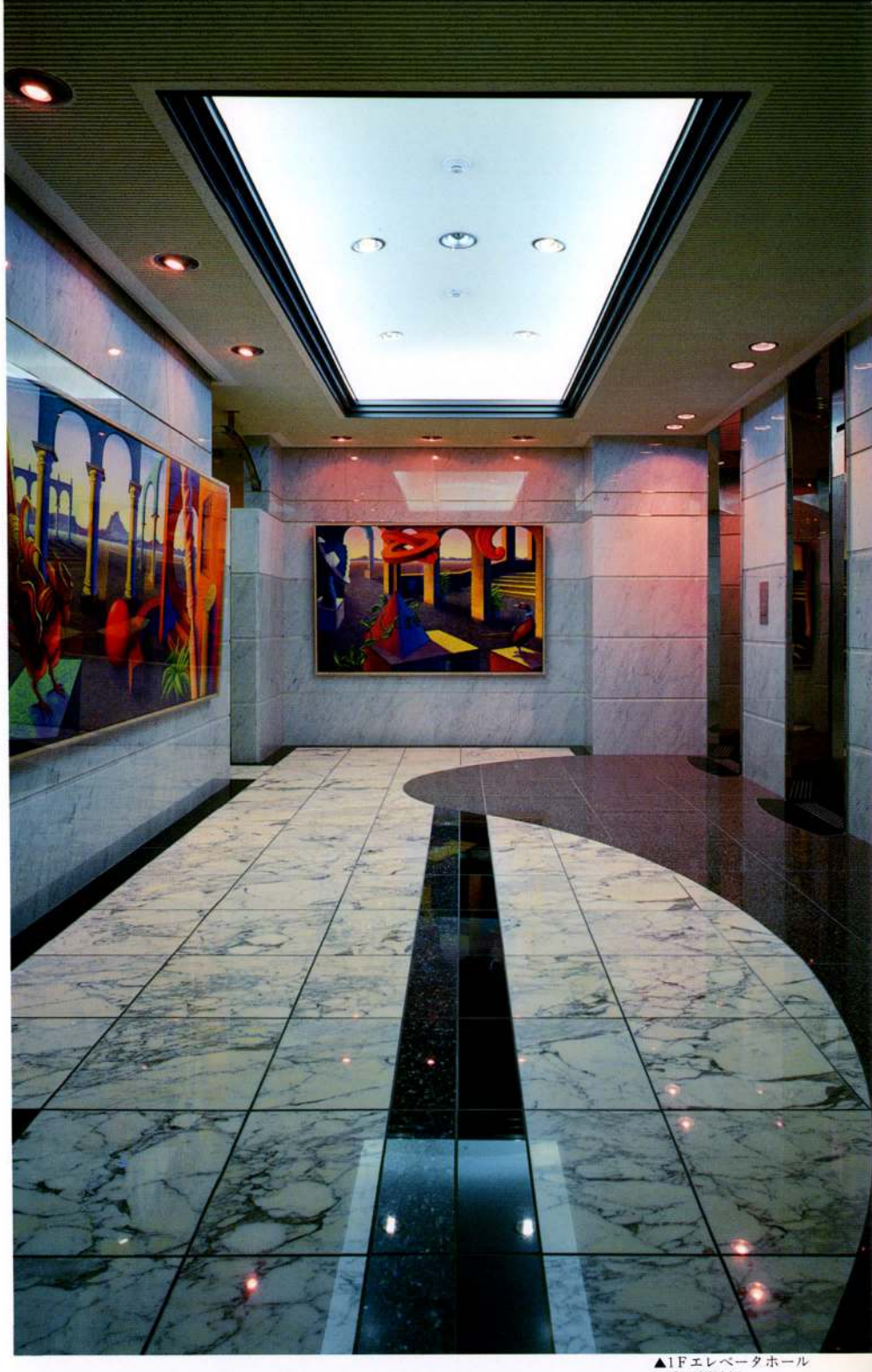
▲13F住宅



断面図　1：800

▼10Fプレイロットを見下ろす





▲1Fエレベータホール

▼南西側外観



ART●アートプロセス PROCESS



アートディレクター

板倉 忠則

Tadanori Itakura

PROFILE

１９４４年１０月１１日生

１９８０年株式会社板倉デザイン研究所設立

現在に至る

(社)総合デザイナー協会（ＤＡＳ）会員
(社)日本グラフィックデザイナー協会（ＪＡＧＤＡ）会員
日本タイポグラフィ協会会員
ニューヨークアートディレクターズクラブ会員

- '85 '86ニューヨークアートディレクションマガジン CREATIVITY受賞
- 第２８回全国カタログ・ポスター展／ポスター部門・日本商工会議所会頭賞
- ニューヨークＡＤＣ第１回国際展／BOOK部門・ポスター部門入賞
- ニューヨークＡＤＣ第２回国際展／ポスター部門入賞
- ニューヨークＡＤＣ第４回国際展／ポスター部門入賞
- 第７回ブルーノ国際グラフィックビエンナーレ展入賞

他多数入賞、掲載書等有

「スーパーディレクション」

依頼があると、私の場合イメージが突然やってきます。
そのイメージからマーケティング表現までトータルに演出してゆくスーパーディレクションを私の仕事のテーマとしています。いわゆるイメージの1から10まで、商品から売り場までトータルにコントロールできる状態です。中途半端とか一部だけではなく最初から最後まで面倒をみるといったやり方です。途中で意味の違うものや人が入ってくると、コンセプトが明確に伝わりにくくなるので、最初のイメージを描いた人が全部やるべきだと思うのです。
だから、広告代理店とよりも、スポンサーとダイレクトに仕事するほうが多く、戦略も含めてのコーポレートアイデンティティ(ＣＩ)の仕事を多く手掛けています。単なる広告デザインというだけではなく、マーケティングや商品開発を含めた、その会社のイメージを創るビジュアルアイデンティティ(ＶＩ)を主としているのです。
そして、会社としてのコンセプトは、ビジュアルエンターテイメント、ワクワク楽しみながら乗って仕事をし、クライアントも楽しんでしまう。それが私の仕事のやり方です。
また、コツコツと自分のグラフィックワークもやっています。プロジェクトやスーパーディレクションという観点からだけではなく、どこか自分の原始的な部分にこだわりたいから。
バブル経済がはじけてしまい、世界はめまぐるしく変動するなかでは、ますます私の仕事のやり方が必要とされ、活躍の場が与えられると期待もし、確信しています。



ADVERTISING POSTER
大阪のクリエイターの鎖づくりをしようとレキシスという名の情報交換ツールが誕生、その創刊号のイメージポスター。
LEXIS（言葉）をアピールするため、私のNEO BAU-HAUS書体を使用し、金紙にエンボス加工したものを素材にした。
※ニューヨークADC第４回国際展／ポスター部門入選
※年鑑日本のグラフィックデザイン'90入選・JAGDA展 '90入選



Symbol Mark



C.I Manual



Shopping bag

CORPORATE IDENTITY DESIGN

開局20周年にあたりCIを導入。大阪のみならずインターナショナルであり、時代の変化により早く対応し、進化していく空間として"O"がシンボライズされ、今後のエフエム大阪が示されている。

※年鑑日本のグラフィックデザイン'90入選



ADVERTISING POSTER

芦屋川沿いにできた多目的イベントホールのオープニングポスター。建物の模型を素材にイベントのエンターテイメント性をイメージしている。

※ニューヨークADC第2回国際展／ポスター部門入選

※インターナショナルポスタービエンナーレワルシャワ'88入選

※年鑑日本のグラフィックデザイン'88入選



Symbol Mark



Business Forms

CORPORATE IDENTITY DESIGN

北梅組創業80周年に向けて、CIを導入。北梅組の歴史である「蔦」のイメージを含みながら、モダンかつ新鮮さと躍動感を現し、梅の花が親しみと覚えやすさ、そして伝統感を与え、トータル企業を目指す株式会社北梅組を表現している。

企画協賛：株式会社タジマ

まちづくり読本

「こんな町に住みたいナ」

延藤安弘 著

晶文社 1990.5.30刊
A4判 234頁 1,930円

著者が関わった全国各地のまちづくり、住まいづくりの記録である。一概にまちづくりといっても、共同建替や公営住宅の改善から、まちかどオリエンテーリングや絵本づくり、公園の中の冒険遊び場づくりなど様々あり、こんな事もやっているのかと驚かされる。またその過程で、都市や住まいが変わる以上に、住む人の生活や考え方が変わり、新しい人間関係がつくられていく様子がいきいきと描かれている。このようなひとづくり、人間関係づくりこそ、まちづくりの原点ではないだろうか。まちづくりを志す市民、行政担当者やコンサルタントにとって、心強いアドバイザーとなる一冊である。 (Y)



三浦啓子のガラスアート

三浦啓子 著

春秋社 1991.6.20刊
B4判 144頁 15,450円

分厚く波うち、時には荒々しく削り取られ、岩のように屹立するガラス達。素朴で力強いその塊はあたかも自ら輝くように、深く素材の奥底からの光りを発する。清らかでとても美しい光。様々な建築物の一部として嵌め込まれた本書の作品の数数には、素材や光の真実の姿に迫ろうとする、すぐれた芸術作品に共通した或る種の宗教性が流れている。それは個々の作品として感動を与えるだけでなく、建築空間に対しても真摯な緊張感を与え、空間の真の意味を問い正そうとする。
輝く岩を意味する独自の“ロクレール”という技法を切り開いてきた彼女の作品の魅力は本書にも十分表れているが、機会があれば是非実物を訪れていただきたい。 (O)



ウエルネス空間のプランニング&デザイン

世界のホテル、リゾート、住宅開発にみる先進事例

檜野憲治 著

学芸出版社 1991.7.10刊
A4W判 144頁 4,944円

ふと気付くと、巷にはフィットネスクラブやホテル内のトレーニングスペースとウエルネス空間が広がろうとしている。著者によれば、これらの背景には、都市環境の悪化、職住環境の悪化、価値観の多様化があるからだと、ウエルネス空間の周りを流れるコンセプトにも本書は詳しい。また、プロジェクトを進めるプロセスや基本的手法も解説されており、加えて、ウエルネス空間をアーバン・リゾート・ホームの3領域に分け、それら分類ごとの世界各地の事例写真が豊富で美しい。この本をもとに、日本の各地にも人々がのびのびと羽を伸ばせるウエルネス空間があふれることを期待したい。 (I)



記号の事典〔セレクト版〕第2版

江川 清・青木 隆・平田嘉男 編

三省堂 1991.9.1刊
B5判 254頁 4,500円

私達がものを考えたり伝えたりする場合、ことばは必要かつ不可欠な方法・手段である。しかし、ことばとともに「記号」もまた、今日では不可欠なコミュニケーションの手段となっている。交通標識などにみる公共のサイン、あるいは家電製品の操作表示などは身近かに目にする代表例といえる。この様な「記号」がもつ象徴性と普遍性は、あるいはことば以上に有効かつ効率的な伝達手段ともなり、私達の身の廻りもあるいは徐々に「記号化」される傾向にあるといえなくはないのである。本書には日々新しく生成変化する「記号」情報が満載されており、いわば「記号」のための「百科辞典」となっている。まずは書架に一冊。



担当：会員企画小委員会／稲木裕子・大沢智弘・山嵜章子

法令コーナー

編集委員会法令分科会

262

建築確認支援システムの開発 －その2－

本誌1989年12月号のこのコーナーで紹介して以来約1年半が経過し、このシステム開発は最終年度に入って内容が明確になってきた。本コーナーでは、システム開発の全体概要ではなく、電子化申請の法制面および申請方法を中心にご紹介する。

申請方法については、申請書作成プログラム等について具体化されたことや整理されたことを中心に、さらに実運用に関係しているため未だ検討段階のこともある程度含めた内容とした。

今後のOA化の推進に向けて、読者のご理解を深めていただければ幸いである。

電子化申請の制度化

平成4年度から、現在開発中の本システムの活用を図るため建築基準法施行規則が改正され、確認関係の申請書の一部（現行の規則に定められている様式のうち第1から12号様式までに相当する部分。ただし、第3、4、8、11号様式を除く）を電子化して、申請が可能となるように制度化される。これに伴い、全国の特定行政庁では、受け入れ体制としてハードウェアの整備および細則改正を行ったところから、順次電子化申請を受理できるようになる。換言すれば、各自治体それぞれの事情を考慮した上で、電子化申請可能区域を各特定行政庁ごとの細則で指定できるという規定である。

●国の規則

特定行政庁の細則で、電子化申請可能区域を指定することができると規定

●特定行政庁の細則

地方自治体の実状に応じて、電子化申請可能区域を指定

また、この規則改正には、主に下記の内容が含まれており、一部は通達となる予定である。

① 用紙の大きさをA4サイズにする。

② 「申請書」様式は、印鑑押印部分と申請物件を特定するための項目のみとする。

③ 「通知書」様式は建築主事押印部分と通知物件を特定するための項目のみとする。

④ 各様式と添付図書との関係を明確にして、それらの書き込み事項の相互加除整理を行い、「計画書」という新様式を設定する。

そして、申請者側のハードウェア整備の遅れを配慮して、従来通りの「用紙による申請」（ただし、様式は新様式を用いる）もできるように規定される予定であり、改正規則は、平成4年4月1日施行予定である。

今後のシステム開発とその導入・運用・維持管理等の当面の計画スケジュールは、**表－1**のとおりである。

申請書作成プログラム

この「建築確認支援システム」により申請されることになる電子媒体は、通常のビジネス機である16(or32)ビットパソコンを使い、OSをMS-DOSとして、その上で走るアプリケーションソフトである申請書作成プログラム（使用言語はBASICで、他機種への移植を考慮してなるべく特殊な命令を用いないことを原則としている。本開発でバージョン1を内容公開し、実費販売を予定している）を使って作成される。

また、申請用電子媒体は、3.5インチまたは5インチの2HD、2HCのフロッピィディスク（以下FDと略す）を想定している。

以下に、その申請書作成プログラムの概要案について述べる。なお、現在、新様式を定める規則等の改正作業中であり、本プログラムも検討作成中で、最終確定はしていない。

その全体メニュー構成（案）は**表－2**のとおりである。

申請FDを作成する場合に入力するデータは、次の3種類に分類できる。

①各様式の項目内容データ

通常のワープロ感覚で入力可。

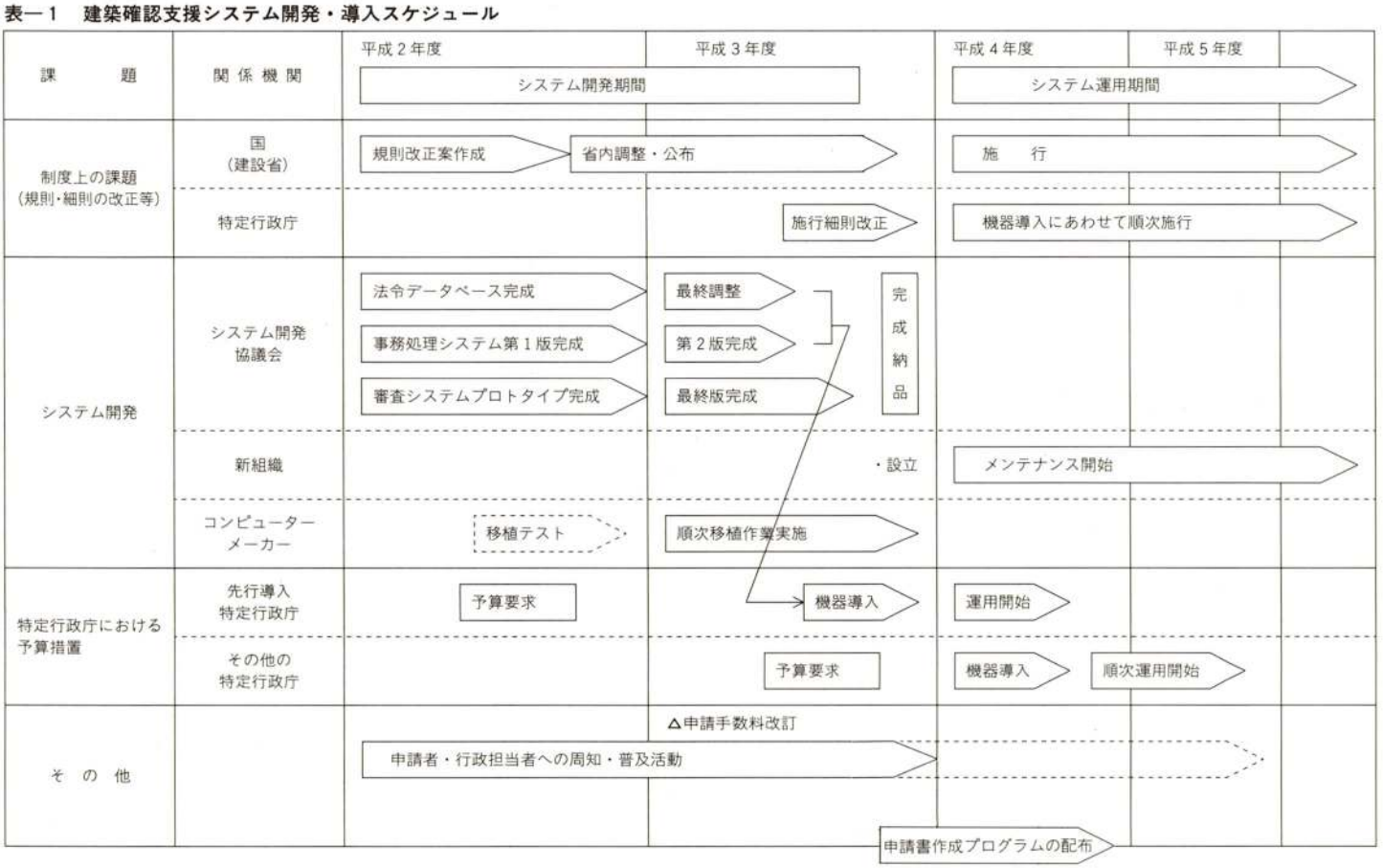
②概要書配置図データ（集団関係規定のうち、建物の形態規制にかかわる部分の建物情報と敷地・道路関係情報に高さ方向のデータを加えた3次元のデータ）

具体的には、下記のデータをコードと数字の組み合わせで入力する。

◇各敷地辺ごとの周辺状況データ（敷地辺属性データという）

・道路関係のデータ（種類、幅員、高さ、みなし

表－1　建築確認支援システム開発・導入スケジュール



表－2　確認申請書作成プログラムの全体構成

メイン・メニュー

1．申請物件選択
2．申請書データ作成
3．配置図データ作成
4．入力データ印刷
5．申請用ＦＤ作成
6．共通データ編集
7．システム定義
8．終了

サブ・メニュー

申請書データ作成メニュー

1．確認申請書（建築物）
2．確認申請書（建築物別概要）
3．建築計画概要書
4．確認申請書（昇降機）
5．確認申請書（昇降機以外の設備）
6．確認申請書（一般工作物）
7．確認申請書（指定工作物）
8．築造計画概要書
9．工事完了届
A．仮使用承認申請書（特定行政庁）
B．仮使用承認申請書（建築主事）
C．建築工事届
D．建築工事届（建築物別内容）
E．建築物除却届
F．安全上の措置に関する計画届
G．終了

配置図データ作成メニュー

1．作図原点，緯度，方位
2．敷地辺頂点
3．敷地辺属性
4．角切り線
5．用途地域
6．防火地域
7．建物要素
8．建物（棟）
9．平均地盤面
A．建築面積算定
B．全体配置編集
C．終了

1．申請書種類選択
1．申請書種類選択

1．申請者
2．建築主
3．代理者・設計者・工事監理者
4．建築設備に関し意見を聴いた者
5．工事施工者
6．終了

1．ドライブ指定

表－3　確認申請書（建築物）のデータフォーマット（案）（注：現行様式編）

```
/* 確認申請書（建築物）-------------------------------------------ID（ファイル名）：10100 */
#10100
/* 0．申請年月日・申請者 */
#10101，：
元号(NC)，元号(M)，年月日(N：YYMMDD)，氏名(K：カタカナ)，氏名(M：漢字等)
/* 1．建築主 */
#10102，：
住所(M)，氏名(K)，氏名(M)，電話番号(N：ZZZZ-ZZZZ-ZZZZ)
/* 2．代理者 */
#10104，：
資格種別(NC)，資格種別(M)，登録種別(NC)，登録種別(M)，登録番号(N)，住所(M)，：
氏名(K)，氏名(M)，建築士事務所資格種別(NC)，建築士事務所資格種別(M)，：
建築士事務所登録種別(NC)，建築士事務所登録種別(M)，登録番号(N)，：
建築士事務所名(M)，電話番号(N)
/* 3．設計者 */
#10106，：
資格種別(NC)，資格種別(M)，登録種別(NC)，登録種別(M)，登録番号(N)，住所(M)，：
氏名(K)，氏名(M)，建築士事務所資格種別(NC)，建築士事務所資格種別(M)，：
建築士事務所登録種別(NC)，建築士事務所登録種別(M)，登録番号(N)，：
建築士事務所名(M)，電話番号(N)
/* 4．建築設備に関し意見を聴いた者 */
#10108，：
住所(M)，氏名(K)，氏名(M)，勤務先名(M)，電話番号(N)
/* 5．工事監理者 */
#10110，：
資格種別(NC)，資格種別(M)，登録種別(NC)，登録種別(M)，登録番号(N)，住所(M)，：
氏名(K)，氏名(M)，建築士事務所資格種別(NC)，建築士事務所資格種別(M)，：
建築士事務所登録種別(NC)，建築士事務所登録種別(M)，登録番号(N)，：
建築士事務所名(M)，電話番号(N)
/* 6．工事施工者 */
#10112，：
登録種別(NC)，登録種別(M)，登録番号(N)，住所(M)，氏名(K)，氏名(M)，電話番号(N)
/* 7．確認の特例 */
#10114，：
有無及び区分番号(NC)，有無及び区分番号(M)，形式指定番号(N)
/* 8．敷地の位置 */
#10116，：
地名地番(M)，用途地域(NC)，用途地域(M)，防火地域(NC)，防火地域(M)

（その他の区域，地域，地区，街区 …… 入力しない項目）

/* 9．主要用途 */
#10118，主要用途(M)
/* 10．工事種別 */
#10120，工事種別(NC)，工事種別(M)
/* 11．敷地面積 */
#10122，敷地面積(N)
/* 12．建築面積 */
#10124，申請部分(N)，申請以外の部分(N)，合計(N)
/* 13．延べ面積 */
#10126，：
申請部分(N)，申請以外の部分(N)，合計(N)，：
申請部分の内，車庫，駐車場又は駐輪場の床面積(N)，申請以外の部分の内，車庫，駐車場又は駐輪場の床面積(N)，車庫，駐車場又は駐輪場の床面積の合計(N)

（/* 14．敷地面積との比 …… 記入しない項目 */）
（#10128）

/* 15．工事着手予定日 */
#10130，元号(NC)，元号(M)，工事着手予定日(N：YYMMDD)
/* 16．工事完了予定日 */
#10132，元号(NC)，元号(M)，工事完了予定日(N)
/* 17．その他必要な事項 */
#10134，申請区分(NC)，申請区分(M)，その他必要な事項(M)

/* 18．建築物別概要 */
#10136．申請建築物の数(N)，：

  /* 建築物毎の概要 */
  #10138，建築物番号(N)，地上階の階数(N)，地下階の階数(N)，塔屋の階数(N)，：
  イ.用途(M)，ロ.工事種別(NC)，ロ.工事種別(M)，：
  ハ.構造(NC)，ハ.構造(M)，ニ.屋根(M)，ホ.外壁(M)，ヘ.軒裏(M)，：

    /* 階別のデータ …… 地上階：F，地下階：B，塔屋：P */
    #10140，階別(A＋N)，：
    ト.申請部分床面積(N)，申請以外の部分床面積(N)，床面積合計(N)，：
    チ.柱の小径(M)，リ.横架材間の垂直距離(N)，ヌ.階の高さ(N)，：
    ル.居室の天井の高さ(N)，：

  /* 合計面積 */
  #10142，ト.申請部分床面積の合計(N)，申請以外の部分床面積の合計(N)，：
  床面積合計の合計(N)
  /* 高さ関連その他 */
  #10144，ヲ.最高の高さ(N)，ワ.最高の軒の高さ(N)，：
  カ.居室の床の高さ(N)，ヨ.便所の種類(NC)，ヨ.便所の種類(M)，：
  タ.建築設備の種類(M)

（階の数だけループする。）
（建物の数だけループする）

（/* 19．備考 …… 確認通知書の時のみ記入する項目 */）
（#10150，備考(M)）

/* 10100 データ終わり */
```

表－4　配置図データフォーマット(案)

＊印は1つのみ入力可

分類 名称	分類 コード	データ種別 名称	データ種別 コード	データ項目　＿＿＿は繰り返しを示す　〔　〕は省略可能
敷地	30100	敷地辺	30110＊	敷地頂点X座標、Y座標、〔Z座標〕、属性種別コード、敷地辺属性データ（表－5参照）
		みなし境界	30120	頂点数、X座標、Y座標
		角切り線	30130	始点X座標、始点Y座標、終点X座標、終点Y座標
		緯度	30140＊	〔度〕、分
		方位	30150＊	〔度〕、分
		用途地域	30160	用途地域コード、〔頂点数、X座標、Y座標〕（別表参照）
		防火地域	30170	防火地域コード、〔頂点数、X座標、Y座標〕（別表参照）
建物（棟）	30500	建物形状	30510	棟番号、配置原点X座標、Y座標、Z座標、回転角度、分、建物要素属性、建物要素形状、相対配置原点X座標、Y座標、Z座標、回転角度、分、形状データ（別表参照）
		平均地盤	30520	棟番号、平均地盤高、〔頂点数、X座標、Y座標、Z座標〕
		建築面積算定領域	30530	棟番号、外周頂点数、X座標、Y座標、〔面積算定外領域頂点数、X座標、Y座標〕
補助データ	30900	線データ	30910	線種、点数、X座標、Y座標（別表参照）
		文字データ	30920	文字左下X座標、Y座標、X軸からの回転角度、分、文字数、漢字コード　└※拡張用なので0°のみ

表－5　敷地辺属性データコード一覧表

敷地辺属性 名称	敷地辺属性 コード	データ項目（距離の単位はmm） 項目数	内容
角切り辺	1	0	
一般隣地	2	1	高低差（敷地と隣地の相対距離）〔住居系後退距離、非住居系後退距離〕
公園・広場	3	2	公園・広場幅（Xs、Ys、Xe、Ye）高低差〔住居系後退距離、非住居系後退距離〕
児童公園	4	2	児童公園幅(Xs、Ys、Xe、Ye)高低差〔住居系後退距離、非住居系後退距離〕
水面・線路敷	5	2	水面・線路敷幅（Xs、Ys、Xe、Ye）高低差〔住居系後退距離、非住居系後退距離〕
前面道路	6	12	道路種別コード 道路幅員 道路中心線(Xs、Ys、Zs、Xe、Ye、Ze)〔道路反対側みなし境界線（Xs、Ys、Xe、Ye)〕
道路反対側公園・広場	7	14	道路種別コード 道路幅員 道路中心線（Xs、Ys、Zs、Xe、Ye、Ze)〔道路反対側みなし境界線（Xs、Ys、Xe、Ye)〕 道路反対側公園・広場幅（Xs、Ys、Xe、Ye）高低差
道路反対側水面・線路敷	8	14	道路種別コード 道路幅員 道路中心線（Xs、Ys、Zs、Xe、Ye、Ze)〔道路反対側みなし境界線（Xs、Ys、Xe、Ye)〕 道路反対側水面・線路敷幅（Xs、Ys、Xe、Ye）高低差

線等)

・角切、隣地、公園、水面のデータ等

◇敷地と建物等の座標データ（X、Y、Z）

3種類（マウス、テンキー、デジタイザー）の入力機器から入力可。

③付近見取図データ

イメージスキャナーを使って入力する。

これら①～③の各項目のデータが、本プログラムによりそれぞれに対応するデータコードを付け加えられて、FDにアスキー形式のキャラクターデータで書き込まれることになる。

今回開発しているデータフォーマット(案)(注：現行様式編）を示すと、**表－3、4、5**のとおりである。

なお、本プログラムで採用されている「FDへの書き込みデータのデータフォーマット及びデータコード」は公開されることになっている。これは今後の民間ソフトメーカー等による「より入力しやすい（使い勝手のよい）バージョンアップ版申請書作成プログラム」の開発に期待しているからである。

建築確認申請図書の組み合わせ

現状では、市町村経由事務や消防同意（または通知）や保健所通知等に必要な添付図書の部数や内容が異なっており、各特定行政庁により運用面にもかなりの差異が見受けられる。したがって、ここでは、申請する場合の全国レベルでの標準的な図書の組み合わせについて検討している内容を述べる。申請方式は、特定行政庁に提出する場合は次の2種類が考えられる。

(1)　FD申請方式

・正本

申請書（はんこ紙）＋FD

＋添付図書（図面＋構造計算書）

・副本

［通知書］＋計画書（申請作成プログラムでプリントアウトしたもの）

＋添付図書（図面＋構造計算書）

（注）［　］は特定行政庁でプリントアウトの予定。

(2)　用紙による申請方式

・正本

申請書＋計画書＋建築計画概要書＋工事届

＋添付図書（図面＋構造計算書）

・副本

通知書＋計画書

＋添付図書（図面＋構造計算書）

（注）両申請方式の情報量は同じである。

アンダーライン部はFDの内容に相当する。

おわりに

本システムは、全国の各特定行政庁単位で、平成4年度からの順次稼働開始を目指している。その後においても、事後導入行政庁へのアドバイスや、システムのバージョンアップやメンテナンスをしていく必要がある。したがって、平成3年度後半は、メンテナンス組織の設立、法令改正、機器予算獲得、申請者へのPR、利用者研修等のさまざまな課題に積極的に取り組んでいきたい。

当面は、確認申請は、FD申請方式と紙申請方式のどちらかを申請者が選択できるようになっているが、官民の相互の高度情報化を図るためには、FD申請方式の比率を向上することが重要である。

建築士をはじめ、関係各位の積極的なご協力を期待している。

なお、本システム開発の全体概要は、下記の各誌で紹介しているので、参考とされたい。

・本誌1989年9月号、12月号
・都市問題研究　第43巻第4号（通巻484号）
　1991年4月号（発行所：都市問題研究会）
・まちなみ　1991年6月号（通巻167号）
　（発行所：㈱大阪建築士事務所協会）

大阪府建築部建築指導課審査第3係主査・建築主事
建築確認支援システム開発協議会開発部会委員
岩田純一

元京都大学総長・前日本建築総合試験所理事長

前田敏男先生逝く



略歴

明治41年（1908）	高知県に生まれる
昭和10年（1935）	京都帝国大学建築学科卒業
昭和23年（1948）	大阪大学助教授
昭和25年（1950）	京都大学教授 工学博士
昭和31年（1956）	（社）日本建築協会正会員
昭和42年（1967）	京都大学工学部長
昭和44年（1969）	京都大学総長
	（社）日本建築学会長
昭和48年（1973）	京都大学名誉教授
昭和50年（1975）	（社）日本建築学会大賞
昭和55年（1980）	勲一等瑞宝章
昭和58年（1983）	（財）日本建築総合試験所理事長
昭和59年（1984）	（財）京都市芸術文化協会理事長
昭和60年（1985）	（財）建築研究協会理事長
平成 3年（1991）	（財）日本建築総合試験所顧問
平成３年７月24日	ご逝去　享年83才

弔　辞

横　尾　義　貫

前田敏男先生には、昨年秋、胆管閉塞のため京都大学附属病院において手術を受けられましたが、その後、回復されてお元気なお姿を拝しておりました。しかし４月下旬異常を訴えられ検査のため短期間入院されましたが、５月中旬にいたり痛みを覚えられ再度入院され、２ヵ月余のご闘病の後、７月24日夕刻、遂に不帰の客となられました。

いまご霊前に、謹んで哀悼の意を捧げます。

前田敏男先生は、明治41年１月、高知に生まれ、昭和10年４月京都帝国大学工学部建築学科を卒業されてからまもなく、大陸満州に渡り、初め満州医科大学衛生学教室に、ついで満州国大陸科学院に勤務されました。この地において、大陸の厳しい気象環境の下における民家や貯蔵庫などの課題に遭遇され、９年にわたり室温変動の解析に心血を注ぎ、先生がライフワークとされる建築環境工学の理論的研究の基礎を築かれたのであります。しかし昭和20年８月終戦を迎え、敗戦の苦難をなめながら、ただ数編の論文の抜刷を携えて帰国されました。ようやく昭和22年６月にいたり、建設省建築研究所に研究員としての職を得て、研究者としての道を再開されたのであります。昭和23年には大阪大学構築工学教室に、25年には京都大学建築学教室に移られ、以来、昭和44年京都大学総長と成られるまで、20年間にわたり、建築環境工学関係の講座を担当されました。大陸で培われた研究を発展させ、拡大し、多大な研究成果を上げられ、また多くの研究者を育成されたのであります。先生の学問に対する態度の厳しさは、門下生のみならず、教室にあるものが等しく認めるところであります。

先生は申すまでもなく、我国における建築環境工学の理論的研究の第一人者であり、その研究の成果は、昭和27年には日本建築学会賞、昭和38年には空気調和衛生工学会賞の受賞となり、ご研究の総体は「建築環境工学における理論体系の発展に対する貢献」として昭和50年度日本建築学会大賞の栄に輝いております。なお昭和44・45年度には、日本建築学会長の要職につかれ、斯界の発展に尽くされております。

また特筆すべきは、大学の行政に対するご貢献であります。きわめて不安定な情況にあった昭和40年代の学園にあって、工学部長として、ついで全学から望まれて大学総長の要職につかれ、吹き荒れる学生運動、臨職闘争、環境問題の追及のさなかを、大学を誤り無く運営されたご功績であります。その嵐の中を、ともに通り抜けてきた教官たちにとって、いまだに忘れ難いことは、策を弄することなく、誠実に、忍耐強く、あらゆる問題に対処された、毅然たる先生のお姿であります。

以上のようなご功績により、昭和55年には勲一等瑞宝章受賞の栄誉に浴されておられます。

先生は晩年、財団法人京都市芸術文化協会理事長、財団法人建築研究協会理事長などの要職を引き受けられ、それぞれの発展に寄与されましたが、なかでも昭和58年４月以来この度ご発病になるまで、８年にわたり、財団法人日本建築総合試験所の理事長として、熱心にその運営に当たられ、西日本における建築技術の向上に尽くされたご功績も大であります。

いま先生の御逝去にあい、先生のご偉業を省みるとき、改めてその偉大な存在が偲ばれ、まことに哀惜の念に堪えないものがあります。私自身、京大建築会の後輩の一人として、ことに日本建築総合試験所理事長の重責を託されたものとして、なお力強いご指導を得たく思っておりましたが、いまそれも叶わぬこととなり、さらにその思いを深くするものであります。

ここに衷心よりご冥福を祈るものであります。

平成３年７月27日

（葬儀委員長　京都大学名誉教授）

思い出2、3

尾亀　清四郎

（財）建築研究協会の発足初期、棚橋先生のお仕事の設備設計をたくさん手伝わせて頂いた。昭和29年鳥取県立中央病院病棟に天井パネルヒーティングが竣工した。その温度分布の特性を測定することになり、前田先生を陣頭に教室の皆さんと共に私も参加させて頂いた。建築学会近畿支部発表会の報告書に私の名も一寸出ている。

私はその頃建築学会の大会によく出席したが、昭和32年８月北海道大学であったときは、まだ空便がなかったのかＪＲ大阪22時発日本海号で札幌まで凡そ１昼夜半かかった。折しもフェーン現象の北陸路を駅々で冷たいビールなどを仕入れながら、前田先生はじめ各大学の諸先生方にお伴しての、それはそれは楽しい旅であった。

（社）空気調和・衛生工学会近畿支部は２年後に創立30周年を迎えるが、先生はその間支部創立委員、常議員そして永く顧問として大所高所よりご指導を頂き、常に一門の諸先生方を常議員に送って下さった。昭和52年５月支部通常総会には学会創立60周年記念として〝熱環境工学の歩み〟をご講演下さった。

（三晃空調取締役会長）

偉大なる星

加藤　渉

若き日の前田先生の一声！「加藤君、函数論を勉強しなさい！」この言葉が今も昨日のことの様に聞こえて来ます。先生は大変な酒豪家で飲めばいつもお酒のオカズは函数論の話でした。学問に対する激しい情熱と迫力あるイデオロギーに驚き圧倒されながら先生にきたえられましたが、先生の爪の垢も頂けなく、そびえ立つ高い山を唯、眺める心地で過した青年時代でした。しかし私の人生は先生に押し出され歩き出し、はじまり、限りない夢を希望の生きる命を与えて下さった大恩人です。晩年の先生と語り合うことが出来ず残念ですが恐らくおめにかかってもご病気で肉体の衰えも先生には一切無関係で青年の様に輝やいて見事な男の中の男の生きざまをこの私にご披露下さったことと思います。頑強なお体に似合わない優しい目でニコッとされる先生を終生忘れることは出来ません。

偉大な先生の前に私は頭をたれ、みたま永遠に安かれと感謝の熱いお祈りを捧げます。

（元日本大学理工学部長）

前田先生をしのぶ

斎藤　平蔵

先生に初めてお目にかかったのは、昭和15年冬、私が東大建築学科２年生のときである。ロシア革命の折逃げこんだ白系露人が当時の満州三河（サンガ）地方にいて、その住宅の室内気候を、医学部学生が組織する研究会の誘いにのって測りにゆき、帰途新京（長春）の大陸科学院に寄って報告したときである。

戦後しばらくの間の建築学会大会は、若手はみんな会社の寮や宿舎を紹介されて一つ屋根の下で寝泊りしたから、食後は深夜まで話に花が咲いた。中でも前田先生のお話は痛烈で文字通り談論風発、ここで筆に尽くせね程の楽しい思い出が一杯である。

先生には学会の発表や研究協議会でずいぶん御注意を受けた。一番印象に残ったのは自然換気計算法の協議会である。

御葬儀の折祭壇に飾られた、ハッタとこちらを見ているお写真を仰ぎ、先生は既に御他界されたのだと何回も自分に云いきかせ、いろいろなことが一度に思い出された。心から先生の御冥福をお祈り申しあげます。

（元東京大学教授）

前田敏男先生語録から

松浦　邦男

先生は火曜談話会で弟子たちに多くのことを語られた。そのなかから二三を思い出してみる。「他人の論文はすべて嘘だと思え。」つまり研究論文を読むときは最初はすべて嘘だと仮定して、論理にかなっているか、実験条件が妥当であるか、徹底的に検討しながら読めという意味なのである。たいへん過激な言葉だが、先生はよくこのような言い方をされた。しかし、「私の言うことは相手によって違う。」とも言われている。先生は私があまりにものを疑わない性格であることを見抜かれてこのように言われたと思う。もう一つ「晩酌をするな」という言葉があった。先生はお酒が好きでまた強かったが、若い者が晩酌をして夕食後の貴重な勉強時間を無駄にするなということだった。あるいは私が酒を飲むとすぐ眠くなることをご存知で、私個人への特別のご忠告であったかも知れない。大学学部学生としてご指導を受けるようになってから丁度40年、先生の研究者を育てる熱意の下で過してきた私は、先生に深く感謝し、ご冥福をお祈りするばかりである。

（摂南大学教授・京都大学名誉教授）

我が師、前田敏男先生

松本　衛

「徹底的に考えよ」研究者の卵として、前田先生の研究室に入れていただいて以来、何度となく言われた言葉である。

「理化学辞典ひっくり返して並べたようなことを言うな」「自分の頭で考えよ」そして「の様に思います」とつい言ってしまうと、「〝である〟と言いたまえ。そう言えなければ、言えるまで考えよ」そして「疑問をもて」と言われた。人を見て法を説くとも云われた。前田研究室のゼミは、しばしば深夜まで及んだ。決着がつくまで〝ディスカッション〟された。翌朝、研究室にこられて「昨日のこの問題は」と始められることも少なくなかった。弟子どもの集まる新年の宴でも、話題はすぐに研究の話になった。昨春の新年宴「前田先生を囲む会」で、「君達は考えることが多くなって大変だなあ、私は楽しんで研究したし、しているよ」と。温かい、しかし痛烈な批判であった。勉強に時間を惜しみ、学問に情熱を燃やし続けられて、先生は逝かれた。

目の前に、先生自ら切って、挿し目の仕方を教えていただいて植えた沈丁花が繁っている。あの時の笑顔の先生は、もう居られない。只、ご冥福を祈るのみ。

（神戸大学教授・日本建築学会近畿支部長）

前田敏男



本文は、昭和63年３月、前田先生がお元気な頃に、日本建築総合試験所の理事長室でお話を伺ったものです。原稿をお送りして、数回にわたりご校正を頂いていたのですが、最終的なご承諾を得るに至らなかったものです。ここにご遺族のご了解のもとに掲載させていただきました。
先生のご冥福をお祈りいたします。

1．土佐のデーンマークに

高知市の少し南の農村の生まれです。山あり川ありの豊かな田園地帯で、土佐のデンマークと呼ばれているところです。山モモを取ったり、鰻を捕まえたりして、楽しい子供時代を過ごしました。農家の三男坊でしたから、小学校を卒業すると師範学校に行かされ、小学校の先生を目指す運命でした。師範学校時代は勉強に追われることもなく、絵を描きながら遊び暮らしました。

2．建築の道へ

師範学校を卒業する年に高知市にも高等学校が創立されました。その頃、「このまま小学校の先生になればいいのか」悩んでいたところでしたので、思い切って高校に行くことに決めました。また、もともと理数が得意でしたし、楽しみに絵を描いたり、運動会には緑門のデザインを毎年担当したりしていましたので、同じ工学部でも機械や電気ではなく、「文科」的香りのする建築に決めていました。高校２年の時に昭和の大恐慌が起きました。校内には左翼運動も盛んでしたし、一方では軍国化の傾向もあり、軍人が配属されていましたが、私はどちらも嫌いで普通の学園生活を送っていました。

3．アーキテクトを目指して

京都大学に入学しても、中学校からまっすぐ大学に来た学生と違って、師範学校に寄り道している分だけ年嵩でもあり、同学年との交友はなく、もっぱら下宿にこもってめったに学校に行かず、本を読む毎日を送っていました。コルビュジェ、ブルーノ・タウトの本を覚えています。病気で一年生を二回もやりましたし、今振り返ると堅実に計算してピシッとやるというタイプの学生では無かったと思います。設計演習はうまい方ではなかったですが、将来はアーキテクトになろうと志していました。卒業論文のテーマに「劇場の音響」を選んだのも、「将来、音響の道を歩みたいから」という発想ではなく、これからの劇場設計をするには音響に関する研究が必要だからと思い選んだわけです。もとから数学が得意でしたから、デザインをやる為に音響を選んだということでしょう。音響をやるうえでは流体力学の本を読むのに苦労しました。最近の建築環境工学の学生がいきなり音や熱の専門分野に入り込むという傾向は好ましくないと思いますね。理学部とは違うのですから、まず建築が分かるようにつとめて欲しいとおもいます。私の講座の先輩である藤井厚二先生を見れば分かるでしょう。藤井先生の講座は建築環境工学です。

では、先生が建築環境工学のプロかといえば、そうではないですね。ただ、他にやる人がいなかった。理論的にも、今から見ればうんと幼稚ですね。建築デザインをやる為に先生は熱も風も研究した訳です。しかし建築デザイナーとしては一流でした。

私もデザインをやる為に熱の研究を始めたのです。だから、今の私は藤井先生の業績の1／2しか受け継いでいないことになります。

4．就職、そして大陸へ

私は昭和10年の卒業です。その頃は就職難の時代で、学校の紹介で卒業前に就職の決まる者は半数足らずでした。私も大阪の施工会社の面接試験を受けたのですが、断られてしまいました。しばらくの間、医学部付属学院敷地内の瀬川研究室という小さい鉄筋コンクリート２階建ての構造計算と現場監督をしましたが、９月に完成し大阪の長谷部・竹腰建築事務所に勤めました。日建設計の塚本猛次氏が１年前に入所されてるはずです。鉄骨の構造計算をやったり、住宅の門灯の設計をやらされたりしましたが、12月になって、藤井先生に呼ばれ、奉天の満州医科大学にいかないかと言われました。

建築デザインの道を進むつもりだった私の気のりしない様子を見て先生は「自分は日本の気候に適した住宅を目標に研究と設計をしている。君も建築設計が好きなれば、まず満州の住宅の研究をしてからやればよい」という風なことを言われました。学問の道を選ぶ為に大陸に行くのではなく、デザイナーの道も残されているからと勧められたわけです。しかし、私は、瀬川研の建築工事にたずさわってる折に、医学部の研究者のスタイルをかい間見ていましたから、医学部に行ってまでデザインをやることはできないと感じました。

その時に私は研究者になることを決心していたのです。自分の希望とは違うが、年齢も同窓生より５つも上だし、父が亡くなって経済的にもゆとりが欲しい等々を考えて、道を曲げることになったのです。

昭和 11 年１月から14年まで、満州医科大学の衛生学教室で三浦運一教授（現京大名誉教授）の指導を受け、満州開拓団の農民の住宅を研究しました。最近、話題となっている中国日本人孤児の親の住む家ですね。終戦間際に大連とソ連との国境に日本から送りこまれましたから、先生は、医学の立場から衣・食・住の研究を始めて



日本建築総合試験所の理事長室にて取材に応じられる前田先生（昭和63年３月３日）

おられ、壁の伝熱の研究等をされてましたが、医者だけでは住宅が判らないということで、建築の研究者として私を招いた訳です。専門分野はちがいますが日本の建築環境工学のルーツは京大の医学部の衛生学教室だという私の主張の根拠がここにあるわけです。しかし、私は医者と同じ方法論では建築工学の解決にはならないと感じました。「家は生き物だよ。前田君の理論どおりにはならない。」と批判されながら、工学としての熱環境理論の研究をめざしたのです。当時の衛生学研究室の中で一人反乱を起したような感じがありましたね。そうこうしている内に、満州国大陸科学院に建築研究室が新設され、昭和14年に副研究官として招かれ、そちらに移り研究を続けました。

5．京都大学第四講座へ

敗戦で郷里の高知に引き上げ、やがて大阪大学の鷲尾先生から声が掛り、創設されたばかりの構築学科に赴任し、一人で建築関係をやっていましたが、昭和25年に京都大学に来て、藤井先生のおられた第四講座を引き継ぎました。

第四講座の内容は建築設備です。建築設備は狭義では空気調和、給排水設備を意味します。私のやっていたのは、建物自体の物理的性質を追求する、計画原論と言われていた分野です。京都大学にきて建築設備の講座に座って、建築設備を知らないのではと思い、また空気調和の講義をするだんになって、大学での講義とはいかにあるべきか等、多いに悩みました。

現在、建築学会では計画原論と建築設備を包含するものとして建築環境工学といっております。その後、日本の経済復興につれて、新設の大学には次々と環境工学の講座が作られ、この分野の教育者の育成が急務になっておりそのために努力しました。また環境工学の発展に伴い、新しい分野をひらいていく若い人の手助けが私の主な仕事になりました。

6．大学紛争の思い出

昭和44年の２月に京都大学でも封鎖事件が発生し、紛争に巻き込まれていきます。丁度、工学部長をしている時でした。総長は奥田先生でした。研究も教育もストップしてしまい、その頃の学生は十分な教育も受けられずに卒業していったことになります。今から思っても極めてムダな内部摩擦だったと思います。その年の12月に総長に選出されますが、苦労の方が多かったですね。テルアビブで工学部の学生達が事件を起こした時は本当に苦しみました。総長の任期が切れてホッとしましたね。「修羅の巷をかけ抜けた」感じでした。

7．サイエンスとしての建築学を

最近の世相ですが、少し遊びが過ぎるように思えますね。勿論、豊かになれば遊ぶのは当り前です。しかしあらゆる分野で消費を勧めている今日の在り方には疑問があります。第一次オイルショックの直後は住宅にも合理的な計画が求められましたがこの頃はフワフワしすぎている。どんなに社会が進歩しても根底には科学的合理性が必要です。サイエンスとしての建築学の進歩に期待したいと思います。その意味からも若い人には「本を読みなさい」と言いたい。マンガは困りますが、このごろは新書判でもその研究者の一生をかけた成果を上手にまとめたものも出ていますから、多いに読書に励んで欲しいと思います。また、この頃建築の学生の中で自分に向くかどうか悩んでいる例が多いようですが、建築はそもそも幅の広い学問です。一人で思い悩まずにむしろ広く他の世界と接触することにより自分の道を捜しだすようにしたらいいと思います。

8．建築学の総合的な発展の為に

最近は建築学の専門化、細分化が進んで同じ建築を専攻していてもお隣りのことさえ判らなくなっている状況です。建築学を総合的に整理し、建築家の常識の範囲で構造にしても設備にしろデザインにしろ互いに一定のところまで判るようにしていくべきです。それをしないと建築の個々の領域は発展しても、何か未開拓の分野が取り残され、全体として好ましくない事態に陥りかねない。そのためには、各々が出来るだけ共通言語を工夫して捜すことが必要です。

学問上での功績を焦るあまり、難解な言葉を使うのも程々にするべきです。そもそも、世の中で「他」が判るということは、自分のアナロジー（類似性）で組立てているということにほかならないのだから。ここ日本建築総合試験所では、昼食会でも開いて、話し合いのチャンスを増やそうと言ってるところです。違う分野の問題かとおもっていたが、同じ種類の悩みでいきずまっていたという発見がきっとあると思います。

（文責　増渕 昌利／編集委員・神戸市交通局）

「建築と社会」誌21年●特集一覧——昭和46年～平成3年

「建築と社会」誌は昭和42年からA4変形判となり、特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。売価は980円（消費税込）。購読希望者は事務局（06—348—0635）へ。

＊は欠号

巻号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
昭和46年（52集）	住宅—60年代の総括と70年代の展望	＊都市エネルギーと無公害化ビル	＊建築基準法	＊都市生活とみどり	＊企画と設計のプロセス	＊解体工学	都市と港湾	＊転換期のニュータウン	＊軟弱地盤と震災	＊変貌する建築生産	＊第18回青年技術者	＊自然とレジャ空間
昭和47年（53集）	冬期オリンピックと札幌	＊600号記念号	＊インテリアデザイン	＊都市交通問題	＊水利用	＊量産住宅の設備	＊一般号（桂中学）		＊都市住環境へのアプローチ	＊都市防災	＊第19回青年技術者	＊北陸の新建築
昭和48年（54集）	建築教育	＊泉北ニュータウンのコミュニティ施設	＊大阪大林ビルディング	＊レジャーと施設	＊大阪国際ビルディング	＊老人コミュニティ	住宅—建築家のすまい	＊新用途地域制と環境	＊構造と施工	＊仕上と材料	＊第20回青年技術者	＊ヨーロッパのまちづくり
昭和49年（55集）	歴史的環境保全	＊明日の建築はどうなるか	＊保養所作品	既成市街地の住宅地整備の方策	＊北摂ニュータウン計画	建築生産と流通機構の変容	ビルの省エネルギ化	高層プレハブ住宅の構造設計	＊みどり	＊屋根防水工事の失敗例とその対策	＊第21回青年技術者	ビル防災に関する12章
昭和50年（56集）	図書館	＊東海の新建築	＊インテリア	PC板を使用した工業化住宅	＊社会・建築・法	都市の景観と施設	建築とプレストレストコンクリート	生活排水処理施設のあり方	＊人間環境のとしてのターミナル	騒音対策と防音材料	＊第22回青年技術者	＊集合住宅の設備
昭和51年（57集）	＊証言'76—建築デザインの動向	＊建築基礎構造の問題点	＊医療施設	＊床工法と材料	＊建築防災と法	＊市街地整備	＊工場建築と設備	鉄骨構造のジョイント	＊集住体のとハードとソフト	＊結露防止対策と断熱材料	＊第23回青年技術者	設備からみた建築の問題点
昭和52年（58集）	＊デザインの動向—部分と全体	兵庫県—その風土と建築・建築界	●日本建築協会60周年記念号 ●ニュータウンの管理	コンクリートの品質管理と行政指導の方向	＊日影規制と法	＊身障者施設	＊照明設備	埋立地における構造問題—大阪南港と芦屋浜を例として	日本住宅公団と建築作品	＊ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ	建築における省エネルギー化	＊第24回青年技術者
昭和53年（59集）	デザインの動向—新旧のコントラスト	＊水	医療施設—病院建築と情報システム	＊外壁塗装材料	＊電波障害と建築	組合方式による集合住宅計画	住宅設備	新しい耐震設計	CAD—設計とコンピュータ	＊一般号	＊第25回青年技術者	ビル環境
昭和54年（60集）	＊転換期の再開発	大阪南港ポートタウン	商業空間	コンクリートのひびわれ	＊日影規制	ホテル建築と情報システム	＊農村施設の変貌	建物の終局強度の検討	＊庄内のまちづくり	＊80年代のインテリア	＊第26回青年技術者	＊建設業の労務事情
昭和55年（61集）	＊80年代の都市と建築—、まちづくりの歴史と展望	＊●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物	＊●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	住宅の耐久性	建築行政と法規	最近の防水工法	都市景観とアメニティ	屋内体育施設の設備	水ぎわのまちづくり	今後の外装吹付仕上材	＊●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション集合住宅	＊設計のための新耐震設計法
昭和56年（62集）	＊職能論	＊中国の論文—北京の都市計画	＊ポートピア'81	＊台所まわりの計画と設備	＊シーリング材の知識	＊災害と法—安全な環境をめざして	＊都市住宅—住まい手からの発想	＊●建築物と風—デザイナーのために ●日建設計作品集	＊住宅都市整備公団—関西における都市整備を中心とした新公団の役割	＊間仕切壁の性能評価	＊第28回青年技術者	障害者の暮らしやすい環境と設備
昭和57年（63集）	＊新たな商業空間の展開	＊省エネルギーと開口部	＊医療施設地域医療と設備計画	＊近畿の地盤と地質	＊都市景観—まちなみ美観への誘い	＊大阪市庁舎（第一期）	＊音とホール建築	＊大スパン構造	昭和設計作品集	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	＊●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築	＊風土・空気と人間
昭和58年（64集）	関西の建築文化を考える	マイコンの建築への利用	＊多様化する運動施設	建築と品質管理	計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	大阪駅とターミナルビル	維持管理と設備更新	東海の将来と文化を考える	オフィス・インテリアの変革	プレストレスト（鉄筋）コンクリート構造	＊●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール	集合住宅と生活音
昭和59年（65集）	21世紀への関西—魅力あるまちづくりを問う	関西の超高層ビル	ビルのリフレッシュ—内外装補修技術の現状と発展—	建設産業とロボット開発	住環境と法制度	＊●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口（アバンティ）	消防設備のポイント	みどりとそれをとりまく人々	高齢化社会と生活空間	床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	光応用システムと建築
昭和60年（66集）	＊大阪湾物語	東海の現在と近未来	●自由様式への道—建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	情報化をめぐる建築・都市事情	ホール—それが生み出す文化—	建物の表情—最近の外壁材料	大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	都市と健康スポーツ	●接合 ●日建設計作品	●村野藤吾の一断章 ●東海特集	第32回青年技術者
昭和61年（67集）	これからの住空間—都市型集合住宅にみる	屋根—そのデザインと素材	●現代デザイン—ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	インテリジェントビルの建築・設備計画	自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎	21世紀の住居と設備	●開発 ●ツイン21	CAD—その応用と展開	オフィス空間の構成	第33回青年技術者	インテリア・イクステンションとリニューアル
昭和62年（67集）	入浴物話	腐食	創立70周年記念号	躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	室内の仕上床	駅	行政建築家の可能性	シティホテルの設備	宝塚のまちづくり	●建物と街並みの接点 ●昭和設計作品集	第34回青年技術者
昭和63年（69集）	ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	＊建物の外装リフレッシュ	都心居住	中国地方の展望とひろしまのまちなみ	21世紀への照明	制振	超高層住宅を考える	＊●大阪府営繕 ●集合住宅のリフレッシュ	＊●第35回青年技術者 ●800号記念	讀賣テレビ
昭和64年平成元年（70集）	夢をのせる輸送設備	●竹中工務店創立90周年記念 ●リゾート事情	＊●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術	省力化のための材料・工法	まちづくりと法	博覧会とまちづくり	都市環境創造と設備Ⅰ	建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	第36回青年技術者	最近の博覧会パビリオン
平成2年（71集）	＊商業化住宅のデザイン	ニュータウン・ルネサンス	東海の都市景観	スケール感	プレハブ住宅技術の現在と未来	国際花と緑の博覧会	建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	＊高強度化—設計の多様化をめざして—	やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	＊第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観	感性の時代を迎えての外装材
平成3年（72集）	新しい都市空間づくり—Ⅰ—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりⅡ ●建築の風景	東海支部復活30周年記念	大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルにおけるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	一般号	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木（構造篇） ●第38回青年技術者	スリムでタフなコンクリートーコンクリートの変身—

平成2年度の工事用材料受託試験に関する調査

—— その2　骨材の品質試験 ——

財団法人 日本建築総合試験所
所 在 地…吹田市藤白台5－8－1　〒565
電　　話…(06)872－0391　FAX…(06)872－0784
業務時間…平日：9：00～17：00
　　土曜：9：00～12：00(第2、第4土曜休日)

1．はじめに

当試験所の工事用材料試験部門で受託している試験で、「その1」に引き続き、今回、平成2年度に受託した骨材の品質試験について当所機関誌「GBRC」に掲載している中から、その抜粋を述べる。

2．集計対象

集計の対象とした骨材は普通骨材で、細骨材では受託試験の全数について、粗骨材では骨材の最大寸法25mm以下のもの（但し、ふるい分け試験結果については20mmのみ）を対象とした。なお、当試験所が直接、生コンクリート工場で試料を採取して試験を行ったものは対象外とした。

集計の対象とした試験項目は下記に示すもので、試験方法はいずれもＪＩＳまたはＪＡＳＳ５によった。ただし、細骨材、粗骨材ともに粘土塊量試験は前洗いを行うJIS A 5308による粘土塊量試験のみ対象とした。(1)ふるい分け（F.M.）、(2)洗い損失量、(3)単位容積重量、(4)絶乾比重および吸水率、(5)安定性損失量、(6)粘土塊量、(7)塩分量、(8)比重1.95の液体に浮く粒子の量、(9)有機不純物、(10)すりへり損失量、(11)軟石量

3．集計方法および集計結果

上記の各試験について骨材の種類および産地別に分類し集計した。

今回、集計結果の詳細は誌面の構成上割愛し、ここでは海砂、山砂および砕石について、上記の試験項目の中から(2)、(4)、(6)、と海砂についての項目(7)のヒストグラムをそれぞれ**図－1～3**に示した。

4．まとめ

4．1受託の状況

受託試験から見た細骨材の種類の比率は、海砂が全体の44%、山砂が17%、その両者の混合されたものが14%となり、海砂と山砂で全体の75%を占めている。ここ数年の傾向として、混合砂が増加の傾向にある。

粗骨材については、砕石が全体の89%を占め、次いで山砂利５%、川砂利４%となっている。

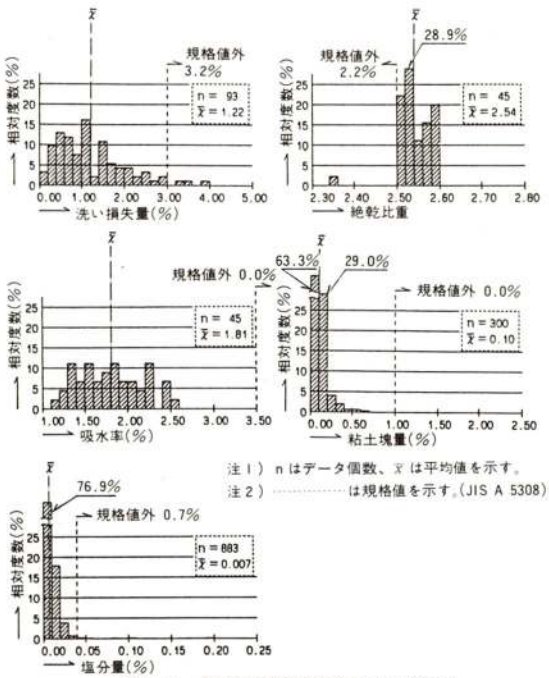
4．2洗い損失、比重、吸水率、粘土塊量、塩分量

図－1に海砂のヒストグラムを示したが、損失量３%を越えるものが、3.2%、比重2.5%以下が2.2%、塩分量0.04%を越えるものが0.7%あり、吸水率、粘土塊量については規定値を外れたものはなかった。

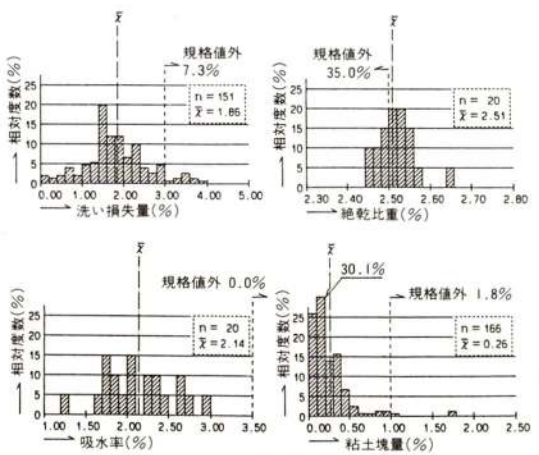
図－2の山砂は、損失量で7.3%、比重で35.0%それぞれ規定値を外れていた。また、粘土塊量についても１%を越えるものが、1.8%あった。吸水率については規定値を外れたものはなかった。

図－3の砕石は、洗い損失量1.0%を越えるものが12.0%、比重2.5%以下が5.0%、粘土塊量0.25%を越えるものが0.8%あった。吸水率は規定値を外れなかった。

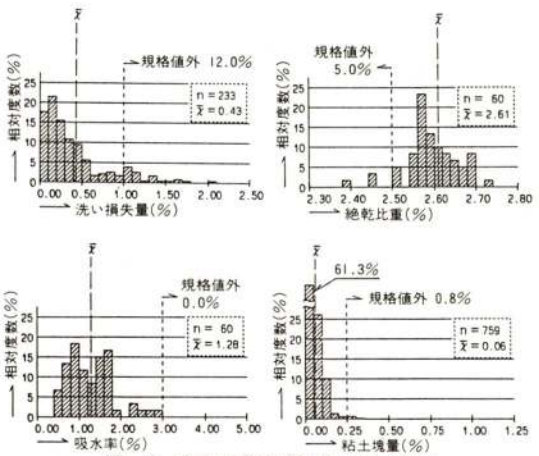
上記外の試験の集計詳細、およびその他詳細については当所発行のＧＢＲＣ63(1991.7発行)を参照されたい。



図－1　海砂の各試験値のヒストグラム



図－2　山砂の各試験値のヒストグラム



図－3　砕石の各試験値のヒストグラム

環境振動に対する防振対策

財団法人 日本建築総合試験所
所 在 地…吹田市藤白台5－8－1 〒565
電　　話…(06)872－0391 FAX…(06)872－0784
業務時間…平日：9：00～17：00
土曜：9：00～12：00(第2、第4土曜休日)

建物の性能を、最大級の地震や強風によって引き起こされる振動に対する安全性のみならず、日常的な環境振動に対する居住性能の観点から評価しようという考え方が定着してきた。この春には、日本建築学会より『建築物の振動に関する居住性能評価指針・同解説』が出版され、この中で3 Hzから30Hz程度の固有振動数を持つ床の歩行に伴う鉛直振動と、0.1Hzから1Hz程度の固有振動数を持つ建築物の風による水平振動に対する居住性能の評価方法が示された。

この指針に示されているような常時風による横揺れが問題となるほどの高い建物や、人の歩行で縦揺れが問題となるほどの大スパン床の設計に携わっているのはほんの一部の方で、ほとんどの設計者はこの様な環境振動問題とは無縁だと思われているかもしれない。しかしながら、『建物が揺れているがどうしたら止められるか』と言う相談を私自身これまでいくつか受けたことがある。読者の中にも、施主から『設計してもらった建物が竣工時からひどく揺れている』と苦情を受けたり、『既存建物で揺れがひどいのでどうしたら止められるか』と言う相談を受けた経験をお持ちの方もあるのではないだろうか。

上述のような振動問題では、一般に、その原因を特定することは難しく、新築の場合には施工不良として建設会社がその責を負い、多少の補強は試みるものの振動は止まず、結局お金で解決されているケースが多いのではないだろうか……。また、既存建物の場合には、専門家に調査を依頼して対策を検討して頂くが、その報告書には入力の卓越振動数と建物の固有振動数が一致しないように剛性を上げなさいとしか述べられていないケースが多い。中には対策は示されず、ただ何dBで揺れているとしか書かれていない場合もある。これでは、実際にどう対処して良いのか分からない。

設計時に、対象建物の環境振動に対する目標値が定められ、予想される振動源（常時微動、常時風、設備機器）に対する応答が予測できて、その結果応答値が目標値を上回ると予想される場合に事前の対策が講じられていれば、この様な事態は防げるのだが、実際にはなかなか難しいことである。そこで、建てられた建物が運悪く揺れることが分かったとき、少なくともその揺れを止める対策でもあれば、とお考えの方もおられるのではないだろうか。読者の方々は、多分このことに一番関心があるのではないだろうか。

ところで、地震や強風などによる建築物の振動をアクティブまたはパッシブに制御しようとする制振装置の研究開発が盛んに行われている。そこで、常時風や地盤の微動による建物の横揺れ（環境振動）対策にもこのような装置を利用できるかどうか検討を始めた。今回は、まず手始めに、最も簡単な制振装置である動吸振器（TMD）を取り上げ、対象とする振動源は取りあえず地盤振動とし、振動台によるモデル実験によりその防振効果を検討した。その結果を以下に述べる。なお、TMDとは**図－1**に示すように板ばね、重錘およびシリコンオイルを用いた減衰器からなる装置である。

重量2369kg、固有振動数2.60Hz、減衰定数0.65%の建物モデルに対し、TMDの重量を61.43kgとし、建物モデルの変位応答が全振動数領域において最少となるようにTMDの固有振動数と減衰定数をそれぞれ2.51Hz、9.7%とした。入力には大阪府下の守口市、堺市、大阪市内の地盤上で得られた実測波形を用いた。各入力波形のパワースペクトルを**図－2**に、また実験状況を**写真－1**に示す。

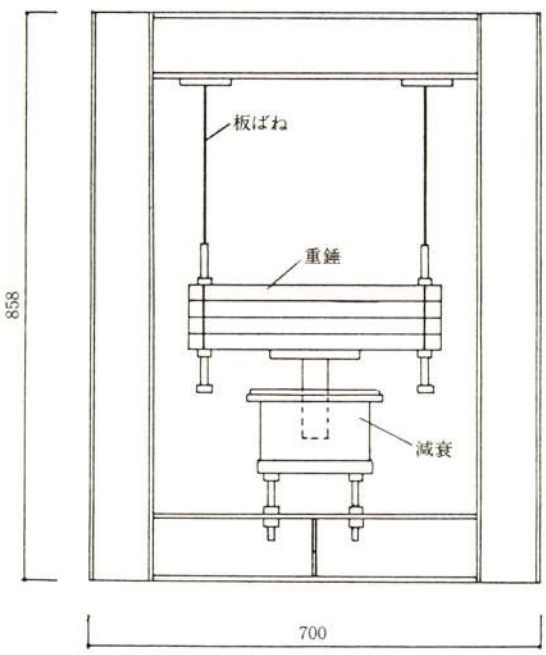
TMD無しの場合の建物モデルの応答に対するTMD有りの場合の建物モデルの応答比率を**図－3**に示す。なお、減衰材料に用いたシリコンオイルの減衰性能は温度により変化するので、その影響も併せて調べた。この結果、その比率は2乗平均振幅で0.23～0.32、最大振幅で0.29～0.49となった。

したがって、建物の防振対策としてTMDを用いれば、ある程度の制振効果が期待できると思われる。なお、TMDを設計するに際して、次の点に留意していただきたい。

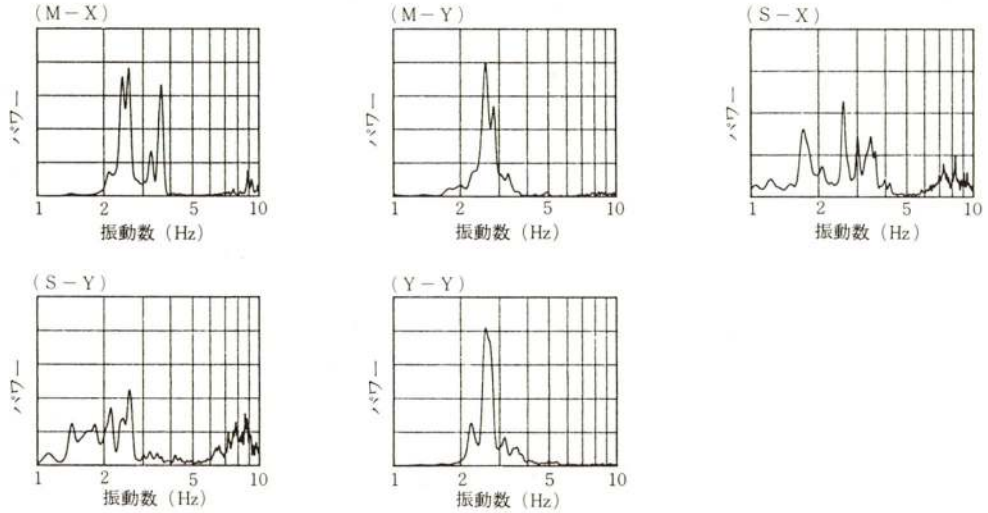
①振動源（入力）の特定とその振動特性を把握する。
②建物の振動特性を正確に把握する。
③TMDの固有振動数は正確に調整する。

建物モデルの実験では、TMDによって十分な制振効果が得られたが、実建物に対しても同様の制振効果が得られるかどうかについては、引き続き検討して行く予定である。

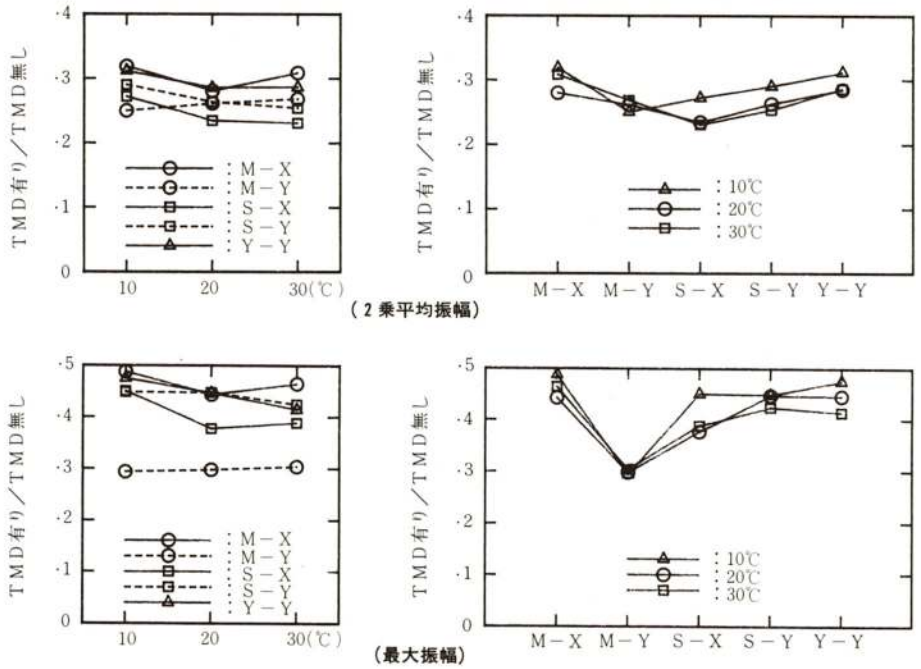
（構造物試験室／井上隆二）



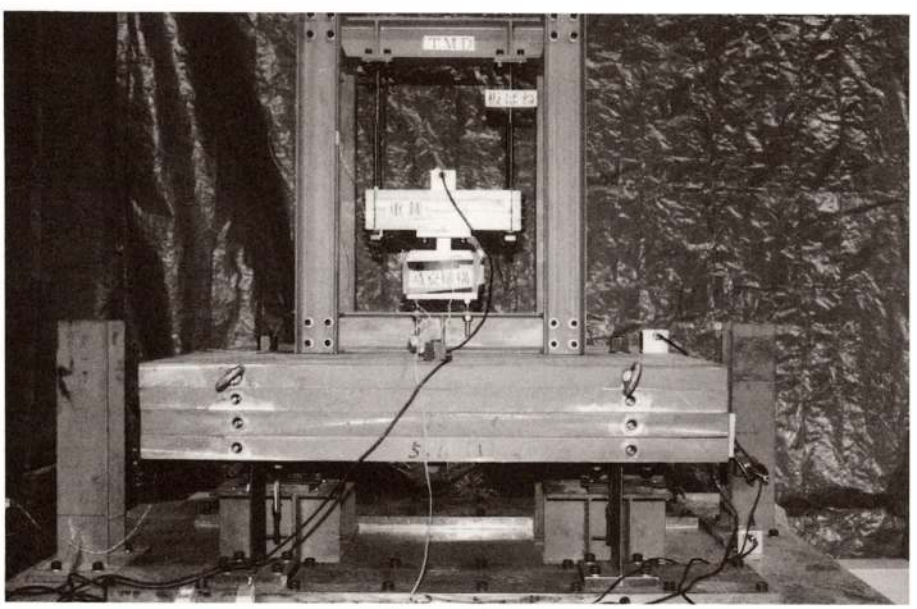
図－1　動吸振器



図－2　入力波形のパワースペクトル



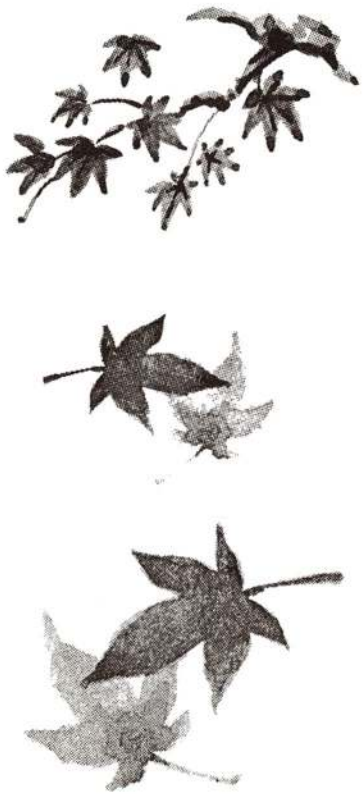
図－3　2乗平均および最大の振幅比



写真－1　実験状況

先輩会員の近況とご意見

－2－



当協会では、名誉会員を始め先輩会員90名の皆さんに、近況と協会に対するご意見を伺いました。多数の方からご回答を得ましたので、ここにご披露いたしますとともに今後の会の運営、事業に反映して参りたいと存じます。先輩会員の皆さんのますますのご健勝をお祈りいたします。

（事務局・松田）

（①住所 ②勤務 ③近況 ④ご意見）　敬称略

佐藤　重夫

①広島県廿日市市阿品４―39―９

②広島大学名誉教授、呉工業高等専門学校名誉教授、日本民俗建築学会会長、㈶建築技術教育普及センター理事・中国四国支部長（常勤は無し）

③歴史的環境（文化財、民家、自然公園、都市、町村等）の保全やそれらの文化的総合的研究と地域へのそれらの関心を深め、将来に悔いを残さないようにする努力をしているほかに、後進者のためのいろいろのことを尽くしたいと努めている。幸に健康なので県や市町村のいろいろのお手伝いも（委員会、審議会、審査会等）していて多忙。

④技術や社会の進歩発展変化に応じて、分離してとかく形而上の問題を特に忘れるくせのある日本の建築界においては、広く建築（土木的なことも含めて）のために関連、関与、分担、協力すべき建築の社会的、技術的、教育的、実務的すべての綜合化に向かっての協会の運営を愈々切望せざるをえない現在と未来を持つに到った。従って、こういった観点から運営も会誌も行事も計られねばならず、しかも、その基礎は人にあることを重視しなくてはならない。本協会の独自の特色がこれにより明確化し、協会の発展に結ぶものと信じている。それは建築をとおして形而上・下全てに及ぶものになるであろう。

白井　周二

①京都市伏見区桃山町島津53―２

②清水建設社友

③毎週一回位会社へ顔を出すなどしていますが、仕事の方はさっぱり、健康保持のため出来るだけ毎日近くの桃山城、明治天皇陵などへの運動歩行に努めています。

④どうぞ皆さんのお骨折りで、当会が更に一層隆盛になります様ひたすらお祈りいたします。

染木　正夫

①名古屋市昭和区広路通５―11

②染木建設株式会社取締役会長

④運営一佳、会誌一佳、行事一佳。よくおやり載いていると感謝いたしております。

高橋　慶夫

①大阪市東淀川区相川３―４―６

②株式会社高橋上田設計事務所取締役会長

③週に４日ばかりは事務所に出ておりますが、特に仕事はせず、自由な勉強をしております。音楽（Disco, World Music）を聞いています。

④内容のある運営をされているようです。何も申し上げることはありません。

竹内　さく

①吹田市古江台３―19―２

②なし

③92才の老人になりました。動作がすべて鈍くなりましたが、無事に暮らしております。毎日30分の散歩を日課にしています。

④毎月お送り頂く「建築と社会」を楽しく見ています。新建築のきれいな写真はほんとうに楽しみです。

塚本　猛次

①兵庫県宝塚市清荒神２―６―27

②日建設計名誉顧問

③月曜から金曜まで朝おそく夕方早く出社、退社しています。

佃　　忠夫

①京都市伏見区深草瓦町35―４

②㈶文化財建造物保存技術協会参与

③上記協会の仕事も京都府教育委員会文化財保護課で約40年勤務、退職後に約10年大阪府、徳島県、高知県等の文化財建造物保存修理現場の工事監督として勤めましたが、近年は自宅で余生をおくるようになりました。

④行事では京都府方面の文化財建造物修理現場見学会の打ち合わせ等時々しております。若い会員の意見がよいと思います。

手賀　　徹

①東京都世田谷区駒沢５―16―16

②無職（81才）

③水彩画を描くことに専念しています。

東畑　謙三

①神戸市東灘区住吉山手４丁目４―35

②株式会社東畑建築事務所
（大阪市中央区伏見町４―４―10）

富松　助六

①和歌山市北坂之上丁19

②K.K.富松建築設計事務所所長

③まだ現役でがんばっています。J.I.A.の副会長もおおせつかって多忙な日々です。

④専業、兼業に対し等間隔であるべき、又、士会、事協、J.I.A.に対しても同じ。そして各団体間のアツレキを解くキーとなってほしい。

野田　清三

①神戸市須磨区須磨浦通６―４―26

服部　小虎

①名古屋市千種区城山町１―79

②太陽建設株式会社代表取締役

③生涯現役

久田　良吉

①八尾市山本町南４―10―14

②K.K.東洋建築設計事務所取締役会長

③仕事は息子に譲ってますので日頃は謡とか俳句とか趣味が多いので元気にしています。

④・会誌が良くなった事を喜んでいます。
・朝食会も喜んで出席する様に心掛けています。
・協会の行事、見学会も楽しみにしていますので、茶室とか社寺建築とかの見学をお願いします。

藤田　重治

①東大阪市東山町17―８

堀内　三郎

①京都市西京区川島桜園町62

②なし（京大・名誉教授）

③最近「京都市景観及び土地利用町づくり審議会」の会長に選ばれ、大変な責任を感じています。

④上記の件に関し、「建築と社会」誌５月号の特集記事は大変参考となりました。「町づくり」に関して、土地の利用計画を細かく規定している外国（例・ドイツ）の例などを紹介して、一般市民にも啓蒙してほしいと思います。

本多　正道

①神戸市東灘区御影町岸本1566

②なし

③あと半年余で満90才となりますので、建築とは全く無縁の生活を続けております。

④会誌を通じ、協会の益々の発展を伺い知る事が出来て大慶の至りに存じます。しかし、日本の新建築に対してどうも違和感を禁じえません。本年5月ヨーロッパを旅行し、ヨーロッパの特に中小都市が自然と調和して美しいのに改めて感銘しました。

前野慶太郎

①芦屋市翠ケ丘町4番18号
②株式会社あめりか屋取締役会長
③毎日7時の電車で会社に7：30～7：40頃到着、午前は仕事、午後は工事場巡りです。土、日は庭の掃除をしておりますが、広いので中々行き届きません。
④「建築と社会」の発行を月の終わりでなく、初めに出来る様、編集委員の先生方の一段のご努力の程お願い致したいのです。

松永　崇志

①兵庫県宝塚市雲雀丘3－9－15
②平成元年　株式会社東畑建築事務所退社
③建築一般の勉強、畑、庭木、家事手伝、旅行何れも楽しみ。
④特にありません。関係担当の方々のご尽力に感謝いたします。

宮田　禮彰

①神戸市兵庫区荒田町1丁目7番3号
②株式会社宮田組代表取締役

森　　茂樹

①奈良市学園南1－5－8
②株式会社森設計取締役会長
③いつまでも現役をモットーにしています。健康は生き甲斐です。
④益々の充実、感銘します。

森岡　武夫

①神戸市東灘区御影中町6丁目5－16
②なし
③最近、椎間板ヘルニヤを患い1月末より5月末まで入院生活をおくりましたので、心身共に衰弱し、目下、旧状に復する様に努力を重ねております。
④いまのところ、なし。

山手　研吾

①東京都武蔵野市中町2－15－13
③酷暑の折りの日常生活は苦しいのですが、早く涼しくなる事を望んで只今のところ元気に致しております。
④法規無視の不法建築、現場施工不良の建造物現場施工上の熟練工の不足等々の記事を拝見することがあります。私達建築士の等しく憂るところと存じます。一日も早くかかる重大問題が解決、改良される様祈りたいものと思っております。

吉原九州男

①大阪市生野区生野東2丁目13－11
②K.K.吉原組取締役

米田　良男

①大阪市天王寺区逢阪1丁目1－7
②㈱米田工務店代表取締役会長
③毎日出社、社業に就いております。
④特にありません。

和田　精一

①奈良市西大寺国見町2丁目14－10
②K.K.藤木工務店非常勤相談役
③毎日退屈しないように努力しています。
④会誌、見学行事を楽しみにしています。

渡辺　幸蔵

①茨城県水海道市大生郷町1818老人ホーム、キングスガーデン
②なし
③老人ホームで生活しております。
④貴会の益々の発展を祈るばかりです。

今元　康彦

①豊中市緑丘3丁目25－4
②㈱きんでん相談役
③常時きんでん本社に出社しております。
電話(06)375-6007

一圓　俊郎

①千葉県浦安市美浜1丁目6番館213号
②なし
③病気療養中当分上記の（仮）住所に変更です。独り住まいを止めなければ病院（名古屋）の退院を認めないとの医師の命令で、7月末から上記に移っております。娘・孫がすぐ近くに居り私のめんどうをみてくれます。名古屋宅は当分使用中止です。

ステップ方式で学ぶ

DRACADスクール

株式会社バス

弊社は『構造システムグループ』の中で、建築設計事務所としてDRA-CADを使い4年間設計をし、蓄積してきたノウハウを皆様のお役に立つようDRA-CADスクールを開講しております。
PC-9801シリーズ、ハードディスク、1670万色対応のフレームバッファなどの機器を揃え、出力機器も完備し、プレゼンテーションの学習もできます。
授業はステップ方式です。興味のある講座のみの受講も可能です。

講座内容

STEP-1	出力	
［2日］	出力マニュアルの作成	
STEP-2	CADによる文章の作り方	
［3日］	プレゼンテーション	
	CADによる模型作成	
STEP-3	データの整理	
［1日］	データの再利用	
STEP-4	ARM(3次元CAD)になれる	
［3日］	ARM(3次元CAD)でエスキース	
	ARM(3次元CAD)の出力	
STEP-5	企画設計Ⅰ(日影計算とCAD)	
［4日］	企画設計Ⅱ(検索,ソート,集計)	
	企画設計Ⅲ(エスキース)	
	企画設計Ⅳ(分析)	
STEP-6	基本設計Ⅰ(シミュレーション)	
［2日］	基本設計Ⅱ(基本設計のコマンド)	
STEP-7	実施設計Ⅰ(実施設計のコマンド)	
［2日］	実施設計Ⅱ(図面作成の手順)	
STEP-8	CADマネージャー	
［1日］	(ハードウェアーのメンテナンス)	
STEP-9	設計事務所のOA化	
［1日］		
STEP-10	総合学習(建物の設計)	
［1日］		

大阪校開講予定表

STEP-1（5万円）
【11月】11, 12
【12月】2, 3

STEP-2（7万5千円）
【11月】13, 14, 15
【12月】4, 5, 6

STEP-3（2万5千円）
【11月】18
【12月】9

STEP-4（7万5千円）
【11月】5, 6, 7　20, 21, 22
【12月】11, 12, 13

STEP-5（10万円）
【11月】25, 26, 27, 28

■講座内容は10のSTEPに分かれておりSTEPによっては、1日のみの受講も可能です。(その場合受講料は3万円となります)
詳細はお問い合わせ下さい。
尚、東京校も開講しています。

1時間目：10:00～11:15
2時間目：11:30～12:45
昼　食：12:45～13:45
3時間目：13:45～15:00
4時間目：15:15～16:30

大阪校
〒550 大阪市西区南堀江一丁目11-21
栗建ビル別館8F
TEL06-541-4198　FAX06-541-5320
［担当：原田］

建築の眼



OBP遠景

やすだちゅうさく
安田丑作

神戸大学工学部建築学科
助教授

かわかみまさお
川上昌男

大阪府住宅供給公社理事
兼計画部長

いのくらひろゆき
猪倉啓行

日建設計取締役大阪第2
事務所所長

なかむらとしお
中村俊雄

長谷工コーポレーション
取締役副社長

以上の4氏が7月号から
12月号まで執筆

アーキテクチュア・フェア

かってベストセラーになった女流作家の小説で、主人公の相手の青年建築家の描写が話題を呼んだこともあったが、いまでは建築家とその仕事についての一般の理解も深まってきたように思う。これまで美術館やギャラリーでの展覧会というと絵画や彫刻と思われていたのが、近頃では建築の展覧会も決してめずらしくはなかった。

折りしも村野藤吾先生の生誕百年を記念した展覧会が兵庫県立近代美術館で開かれているが、会場には若いアベックから年配の人までが溢れ、しかも実に楽しそうに語らいながら鑑賞する様子が印象的である。この不世出の巨匠の自由奔放でありながら格調の高さをもつ作品群が見る人の心をとらえたのはいうまでもない。それとともにこの展覧会は、スケッチ・図面・模型・家具・照明器具・織物などの展示を通して、建築という身近なもののなかに豊かな芸術性のやどっていることを見事に切取ってみせてくれた。

神戸市では、平成5年の夏から秋にかけて〈アーキテクチュア・フェアＫＯＢＥ〉の開催が予定されている。このイベントは実際の建物や街そのものを会場とした建築博覧会で、都市と建築とのさまざまなかかわりや計画・設計から施工までの建築創造の全プロセスをウオッチングしつつ楽しんでもらおうとするユニークな試みである。具体的な企画はまだこれからであるが、これを機に街の中の生きた建築のもつ多彩な魅力を実感できたらと思う。（C.Y）

輸入住宅

輸入住宅が注目されている。輸入住宅を推進する目的として、住宅コストの低減、大工等技能労働者不足に対応可能な工法の開発普及、質の高い住宅の提示による豊かな住生活に対する意識の向上などが挙げられる。しかし、輸入住宅に待つまでもなく、我が国では既にプレハブやツーバイフォーなどの新しい工法により省力化、コストの低減化が追求されている。住宅価格が下がらないのは、コストではなく市場価格で決まるからである。また、生活様式にしても床座から椅子座中心へと西洋スタイルを見事に取り入れてきた。最近では、床面積が大きくなるとともに小間割型から大空間型へと、ゆとりのあるプランが主流になってきている。

住宅とは本来その国、地域の気候風土、歴史、文化等に根差したものであり、輸入住宅そのものが日本の住宅として普及するとは考えられない。しかし、街並みも含めて北米の住宅を直接見ることができ、生活体験できるということは、豊かさの中で取り残されてきた我が国の住宅水準の向上と新しい住文化の創造に寄与することは間違いないであろう。来年には木造3階建集合住宅も認められる。輸入住宅のいろいろな試みが貿易摩擦解消の一助になるなら結構なことだ。（M.K）

広い川のある町

宮本輝の書いた三つの川の小説（螢川、道頓堀川、泥の河）を読むと、人々の生活と川との関わり合いが大変面白く興味がつきない。かつて川は都市のインフラストラクチュアとして大切な役割を担ってきた。流通経路であり浄化装置でもあった。しかし、都市の高密度化につれ汚染の度合もひどくなり、幅の狭いものはそのまま蓋をされ下水道にされてしまった。そして都会は潤いを失い、気がついてみるとそこに住む人は居なくなってしまった。一方、蓋のできないほど広い川には本格的な浄化作戦が展開され、何とか今日の魚の住めるレベルまで来たが、一旦去った人々は戻って来てくれなかった。

人々の目を休ませる憩いの空間、その日一日の変化と人々の生活の表情を映して興味のつきない水面、この尤大な公有水面に潤いを取り戻す方法、それは多分水面と人間の生活平面とを手に触れられる寸法まで近づけ、その周囲にゆとりの空間を設けることであろう。そのためには、大雨の後もその優しさが変らないようにする土木技術の協力も要る。世界中でこの潤い取戻し作戦は着々と成果を上げつつある。このようにして、広い川のある町の例も後世に残していきたいと思う。（H.I）

街並みと公開空地

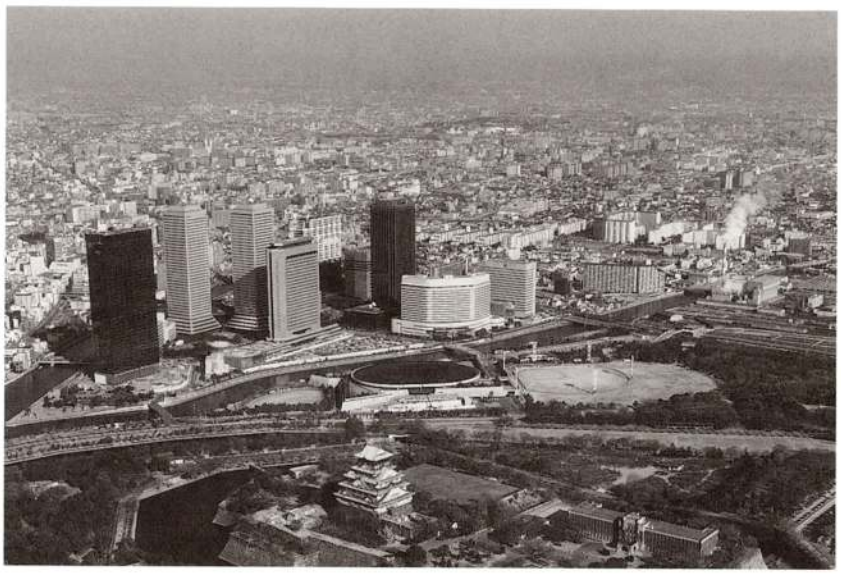
大阪市が街並み整備の一環として御堂筋彫刻設置計画を進めているのは大いに結構な事である。歩道を拡幅してグリーンベルトをつくり、街区毎に彫刻を設置しようとするものである。

しかし残念な事に両サイドのビルのほとんどは夜6時になるとシャッターを下ろし、あかりも消えてしまうのが現状である。休日も同様ゴーストタウンさながらである。今のままでは折角ライトアップされた彫刻も淋しい限りである。人が集り、待ち合せをしたり何かをしようとする様な広場やスペースが欲しい。

総合設計制度に公開空地がある。公開空地を設けて各種の制限緩和を受けている事例は多くあるが、そのほとんどは、芝生を生えたり植栽をしたりして手入れされているものの、出来れば一般の人には入ってもらいたくない雰囲気で、真の公開とはなっていない。立派な前栽をつくっても他人にはチラッとしか見せない「粋な黒塀見越の松」の日本人的感覚が強く働いている様に思えてならない。何十年かかるか分からないが、御堂筋の街並みに真の公開空地が沢山でき、人が集まり彫刻を観賞する雰囲気を実現したいものである。否これは御堂筋だけの事ではない。（T.N）

自治体住宅政策への提言

――大阪市におけるケーススタディー――



提言の背景
住宅問題懇談会
・
都市活性化の最優先課題としての住宅政策
塩見　譲
・
地域住宅対策の展開
住田昌二
・
都心居住の促進
巽　和夫
・
低質木造住宅地の整備と
公営、公社の鉄筋コンクリート造住宅の建替
山本　晃
・
民間住宅対策の在り方
椚座 正信
・
ウオーターフロントの開発を含む宅地供給の促進
富安 秀雄

提言の背景

1．「住宅問題懇談会」の発足

昭和60年8月9日、住宅問題懇談会は第1回の会合を開催することで発足した。この懇談会は、これまで住宅問題・住宅政策に関わってきた関西在住の学識・行政経験者数名に、巽が呼びかけて結成する運びとなった。その趣旨は次のようなものであった。

現在、国・自治体の住宅問題や住宅政策は、戦後40年を経て転換期に来ており、新しい局面を迎えようとしている。これまで住宅の問題に、行政、研究、計画、情報のそれぞれの立場で携わって来た者が集まって懇談することによって、関西の住宅問題の解決に寄与したい。

もともと関西は、住宅分野において独自の文化的・産業的風土を形成してきており、行政面や研究面でも先進性を誇って来た。しかし、全国的な問題状況の変容のなかで、必ずしも十分な対応をなしえて来たとはいえない。今日の住宅問題は、都市、福祉、経済、産業、文化などの多くの領域との関連を視野におさめ、長期的な展望のもとに検討されなければならない。できるだけ当面する日常の仕事の次元を離れて、自由闊達に、問題の本質に迫りたいものである。懇談すること自体が第一の目的ではあるものの、意見をとりまとめて、行政や事業主体に提言することも考えたい。

懇談会の持ち方は、委員の報告をベースにして、意見交換を行うことのほかに、外部からのゲストを招いてのヒヤリングや住宅視察を予定している。

発足当時の懇談会のメンバーは次の通りである。

椚座　正信	安井建築設計事務所
塩見　　譲	和歌山大学
住田　昌二	大阪市立大学
巽　　和夫	京都大学
富安　秀雄	市浦都市開発建築コンサルタンツ
宮田　芳彦	環境開発研究所
山本　　晃	大阪市役所

メンバーのなかで、宮田芳彦氏が昭和61年3月に逝去された。そこでメンバーを補充することになり、産業界からも参加を得るのが望ましいという判断から、62年3月から新メンバーとして次の2名を加えた。

立岡　　弘	大建工業
山田　俊満	東建コンサルタンツ

それ以後、現在まで懇談会メンバーはこの8名である。なお、事務局は発足時から昭和62年4月まで、茂井延明氏（住宅・都市ジャーナル）をわずらわせて来たが、それ以後は、安井建築設計事務所と京都大学巽研究室が事務局機能を分担している。会合は隔月1回（年6回）、安井建築設計事務所と市浦都市開発建築コンサルタンツを交互に会場として開催している。

2．懇談会のテーマ

昭和60年8月（第1回）から平成3年7月（第37回）まで、37回の懇談会、見学会を催してきた。これまでにとりあげた主要なテーマは次の通りである。

- 公共住宅の役割
- 公団住宅を考える
- 都市型集合住宅のあり方
- 民間賃貸住宅の再生
- ニューヨーク・カナダの住宅事情
- 都市内居住について
- 韓国の住宅事情
- 土地問題と土地政策
- 戦後の住宅地開発
- シンガポールのハウジング
- 高齢化社会研究の動向と課題
- 今後の住宅政策のあり方
- 香港・上海の住宅事情
- 千里ニュータウンの環境保全
- 「新工業化住宅」について

これらのテーマには、委員による研究報告、視察レポート、審議会・研究会等報告、ゲストの報告などが含まれている。また、民営賃貸住宅として寝屋川・萱島東地区、新開発団地として、箕面・牧落団地、阿武山団地の視察を行っている。

このような多様なテーマによる懇談会は、委員にとっては大変有益で成果があり、長年の学識・行政経験に裏づけられた討論は、かなり水準の高いものであった。とはいうものの、関西の住宅問題を対象として、テーマを絞り込んで突っ込んだ検討と提言を行おうという当初のもくろみは、必ずしも十分達成されたとは言い難い。これは、各委員の立場や条件が異なるため、歩調を揃えることがむつかしいという事情が大きく作用している。

しかしこのような反省から、平成2年度は年間テーマを「大阪市の住宅政策」と定めて、ヒヤリング、見学会、委員討議を行って提言をとりまとめることとした。

次章（P38）からは、大阪市の住宅政策に対する大阪市への提言を述べている。大阪市では、たまたま本懇談会の討議の時期に平行して、「大阪市住宅審議会」が、市長の諮問を受けて大阪市の住宅政策の今後の方針について審議を行っていた。懇談会メンバーのうち、巽、山本の両委員は審議会の委員でもあったので、懇談会の成果は、ある程度早速に審議会に反映される結果となっている。

3．懇談会における討議の事例

これまで懇談会で行われてきた前述のテーマによる討議の様子を、二つの事例を取り上げて紹介しておこう。

（1）公団住宅を考える

懇談会でこのテーマを取り上げた昭和60年12月は住宅不況下にあり、公団は大量の未入居住宅と未利用地をかかえて、世間の批判にさらされていた時期であった。公団の現状と問題点を検討して今後の方針や役割を見出そうという趣旨で、公団関西支社の住宅事業第2部長の高木登氏から報告を受けて討議を行った。報告と討議の要点はつぎのごとくである。

現状と問題点：公団は昭和30年以来、公共ディベロッパーとして大量の集合住宅・団地を開発・供給し、住宅需要の充足、集合住宅・団地技術の開発、都市住生活様式の確立などに大きな貢献をしてきた。ところが、昭和40年代半ばにはいちおうの量的充足を終え、キメ細かな質的対応を求められる時代に入っていたにもかかわらず、画一的な標準型住宅の大量供給の体勢から脱し切れず、いわゆる“遠・高・狭”という批判を受ける事態となった。一方、40年代か

ら民間ディベロッパーの進出がめざましく、多様な需要への巧みなアプローチにより、供給のシェアを拡げるとともに、技術開発の主導性も発揮して、公団事業の強力な競争者として成長した。今日では、住宅技術、特にそのハード面では「性能発注」で代表されるように、ほとんど民間依存となっており、公団が誇ってきた技術開発力の低下がみられる。

公団は発足以来約65万戸の賃貸住宅を供給してきたが、初期の住宅は約30年を経過しており、機能的な耐用年限を越え始めている。新規供給が困難となってきている事情とも関連して、増・改築によるストック改善がクローズアップされている。

今後の方向：国の住宅供給政策の実施機関としての公団は、長所と短所とを裏腹の関係において合せ持っている。公共住宅の全国スケールでの効率的な大量供給と社会的視野における技術開発という目的に対しては、公団は長所を十分に発揮しえたといえる。しかし、多様な需要へのキメ細かい対応は、公団の性格からは最も不得手な分野である。

公団の今後の方向は、短所の是正を行いつつ、長所を再認識してそこに新しい役割を見出すことである、と考えられる。公団事業のなかの住宅供給分野に限っていえば、差し当り、次のような処方箋が出せるのではないか。

①公団を地域的に分割するとともに、各地域の地方住宅供給公社と合体する。元来、住宅は地域性が強く、中央集権的な構造をもつ公団組織はなじまない。このことが公団が地域と遊離し機動性の弱い原因を生みだしている。公団住宅と公社住宅とは類似しており、これらを一元化するとともに、自治体と協力して、まちづくりとしてのハウジングに参加する。

②基本的な性能に優れた都市型集合住宅の開発・供給を行う。基本的な性能の向上は、非利益型の公共事業主体によってはじめて推進することが出来る。性能表示・性能保証を率先して実施するなどして、民間住宅事業への牽制・誘導効果を発揮する。

③基礎的な住宅技術、特に将来の都市住宅・都市居住に関わるソフト面の技術開発を行い、実験的なモデル住宅・団地を建設する。

④既成の賃貸住宅団地の建替えは、現在の公団にとっては貴重な事業機会である。単なる住宅改善事業として実務的に処理するのではなく、50年後の住生活に応えうる性能やデザインの水準を目指して、十分な調査・研究・計画・設計のもとに、大きな構えを以って取り組む必要がある。

⑤未利用地の民間への早急な処分は好ましくない。可能な限り、公団ないしは国・自治体などの公共所有に残し、将来の活用に備えることが望ましい。

（2）民間賃貸住宅の再生

関西には低質老朽の民間賃貸住宅が大量に存在し、深刻な住宅問題となっている。大阪府下において、長屋が大阪市を中心に45万戸、木造賃貸住宅が50万戸を数える。これらの住戸の大多数は最低居住水準未満であり、住環境も劣悪である。早急な更新・改善が必要であるが、20年来問題が指摘されて、調査、計画、施策が講じられているにもかかわらず、さほどの進展がみられない。

大阪都市圏の住宅事情がいぜん深刻であり、良好な質の住宅の供給と住環境の改善が求められているなかで、都心部に近く交通至便な位置にある戦前長屋や木賃住宅の再開発については、近年いっそうの関心が集まっている。懇談会ではこのテーマを取り上げて検討した。全国共同住宅協会会長の五條源一氏から民間賃貸住宅の経営上の問題点を聞いたり、門真・寝屋川の木賃地区を視察するなどして現状把握と問題点の摘出に努めるとともに、今後の施策の方向についていくつかの提案をとりまとめた。

現状と問題点：木賃住宅は、昭和30～40年代の高度成長期に大部分が建設された。大阪都市圏に流入する労働者のうち、公共住宅に入居しえなかった人達を救う役割を果たしてきたという意味で、木賃住宅を“準公営住宅”と位置づけるべきだ、という意見もある。現在、住宅は狭小・低質で老朽化しており、道路、下水道、公園などの基盤施設の不十分な地域も広い。経営者は全体として高齢化し、経営意欲に乏しく、建替えには資産継承面や需要面に不安が強く、積極的ではない。低所得者・低家賃・低質住宅という低水準でのバランス状態にあるが、空家は増加傾向にある。

木賃住宅には「凝集型」と「拡散型」との2つのタイプがある。凝集型は木賃住宅が多数凝集して木賃地帯を形成しているもので、関西に特徴的な形態である。拡散型は持家などと混在しており、“庭先木賃”と呼ばれている。東京は主にこのタイプであるが、関西にも存在している。これら2つのタイプは施策が異なると考えられる。

民間木賃住宅の建替えのための公的施策として「特賃」「民賃」などの融資制度があるが、木賃住宅建替えへの利用は、住宅水準、経営能力などの点から実際上困難である。また、各自治体の開発指導要綱が定めている住宅最低基準をクリアすることもむつかしく、更新を困難にしている一因となっている。

今後の方向：木賃住宅更新の方法は多様であり、既に指摘されていたり実施されているものもあるが、懇談会で検討された意見をまとめれば次の通りである。

①税制による誘導。経営者に現地で更新を行わせるケースでは、法定再開発の場合と同様の優遇措置、事業税についての特別の扱い、などが考えられる。現在の敷地を宅地化するための買収については、譲渡所得税の軽減、他地域への移転については、租税の買い換え特例の適用が求められる。

②民間木賃住宅への公的助成。公営・公社・公団住宅においては、建設費補助や低利融資が行われているのに対して、“準公営住宅”に対して全く何らの公的助成も行われていないのは公平を欠く、という見地から、経営者側への建設費補助または居住者側への家賃補助を行うべし、という考え方がある。

③木賃住宅を不良住宅と認定して、更新についてある程度の強制力を持つ「第二地区改良事業法」を創設する。現行の地区改良事業法の認定基準は厳しく、木賃住宅に適用するのに困難なケースが多い。そこで、認定基準は緩いが、必ずしも全面買収の手法によらない新しい事業法を創設することによって、強力で計画的な更新事業を行う。

④木賃住宅の空家化の推進。建替えまたは譲渡を促すための空家化を推進する。入居者の住みかえを促すため、特定の比較的良質の木賃住宅に移すとか、公営住宅への転居を図るとか、持家取得を援助するなどの施策が考えられる。

（文責：巽　和夫）

都市活性化の最優先課題としての住宅政策

塩　見　　譲

戦後の大阪市の人口は、昭和40年をピークに減少し続けている。その原因は第一に昭和30、40年代の経済成長時期に西日本各地から集まった若年労働者が、その成長、結婚によって住宅を必要としたが、十分な住宅を提供できる状況にないため、郊外に移転していったことである。さらに経済の成長とともに、中心地区の土地利用が業務専用に移行し、職住一体であった商業地区が、ビル化、高層化とともに住宅は郊外に追い出されていったことである。こうした傾向はここ数年の地価の高騰によって一層促進された。また従来の公営住宅政策は主として低所得者層を対象としてきたため、中堅勤労者の住宅需要に応え得ず、若年層は郊外、市域外に転居せざるをえなかった。その結果は若年勤労者層を中心に人口の減少、高齢化をもたらしたのである。昭和50年代にはいって、都心居住の促進や、工場跡地での住宅建設が行われたが、地価高騰による住宅価格の高価格化、住環境の悪化などから、人口の減少傾向に歯止めをかけるまでには至っていない。

人口の減少と高齢化はすなわちコミュニティの崩壊、都市活力の減退につながる。

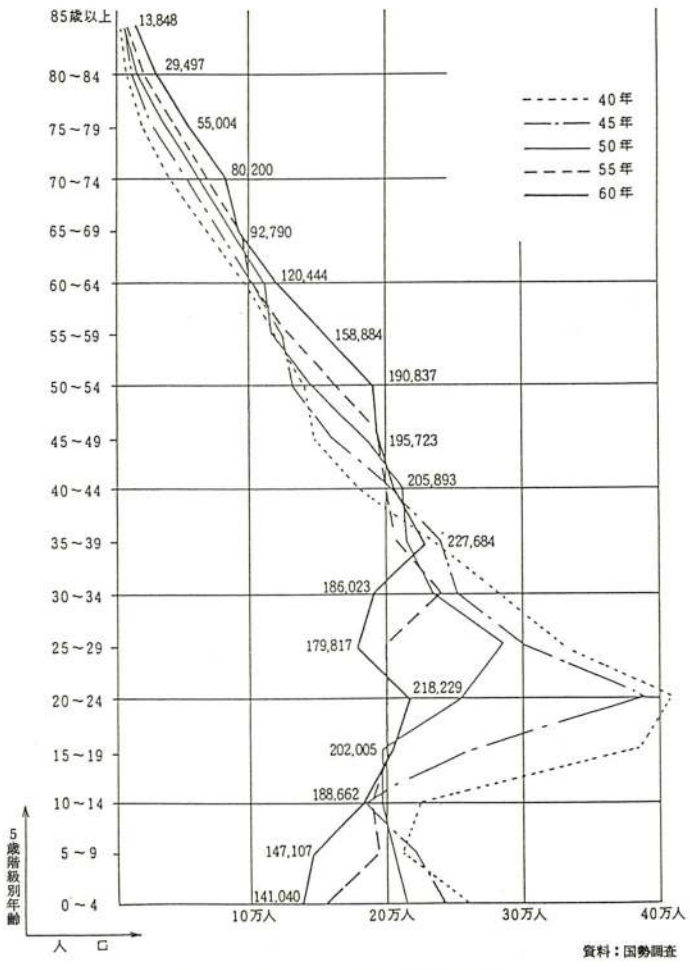
特に働き手の中心をなす勤労者世帯の減少は、都市をささえる活力の減退だけでなく、さらに経済、文化の進展に大きな阻害要件となる。大阪市は新しい総合計画で『住職遊のバランスのとれた都市』を目標に掲げているが、その実現のために最優先課題として取り組むべきは住宅政策であるといわなければならない。特に高地価によって、平均的勤労者の住宅所得が著しく困難となった今日、住宅政策を従来の狭い低所得者対象に限った位置づけから、さらに積極的に中堅勤労者への住宅提供、さらに国際化時代に対応した外国人をも視野に入れた政策に転換し、なかでも住める都市の実現、老朽化した住宅地区の再開発と整備に重点を移していくことが緊急の課題であろう。

1．住宅と人口減少の関係

戦後の大阪市の人口は、昭和40年の315万人をピークに減少を続けている。昭和57年ごろを底に一時は回復するかにみえたが、ここ数年の地価高騰の影響から、再び減少し始め現在263万余人である。昭和63年から平成元年の１年間は実に9,536人も減少した。人口の減少は、中央区、北区などの都心地区だけでなく、阿倍野区、東住吉区、住吉区などでも大きく減少していることは、都心部での土地利用の業務化とともに、コミュニティの崩壊が進む一方、住居地区での若年層の域外転出による高齢化の進展を物語っている。特に結婚適齢期の20歳台後半から30歳台の若年者の市域外移住が多く、市域全体としての活力低下を招いている。ちなみに昭和60年の老齢化率は10.3%で、全国平均をかなり上回っている。

また市内の住宅事情の悪化と相俟って、高額所得者の流出をまねき、大阪市の平均の市民一人当たり住民税納税額は、大阪府下の32市のうち24位（昭和62年）と低く、最高の箕面市の54%という開きがある。こうしたことは、市の財政構造にも大きく影響を及ぼしており、経常費のうちで、生活保護や母子、老人福祉など扶助費の増加をもたらす一方、学校その他の都市施設ストックの遊休化となっている。

また昼間就業者人口は371万人だが、市外からの流入人口は133万人にのぼり、人口流出は通勤交通事情の悪化に拍車をかけている。市内の交通事情の悪化はこうした職住の遠隔化によってますます深刻な問題となっている。こうした都市問題の多くは、住宅環境の悪化、都心居住の減少によってもたらされており、住宅政策の抜本的で積極的な展開が不可欠となっている。



年齢（５歳階級）別人口構成の推移

2．過去の住宅政策の在り方の分析、評価

大阪市の住宅総戸数は114万戸で、総世帯数の96万所帯に対して、13.9%という空き家率となっている。しかし総世帯数の22%、21万戸が最低居住水準未満で、全国平均の９%を大幅に上回っており、都市居住型誘導水準以上が27.7%と全国（46.7%）の半分に過ぎないことからも、居住水準の低いことが分かる。これは持家が39%と全国水準をかなり下回っており、６割を占める借家の多くが戦前長

屋や、戦後の木賃住宅でその老朽化が進んでいること、また1割を占める公営、公社、公団住宅も狭小老朽化したものが多いためである。また最近の新規着工住宅の7割が借家で、その平均規模は地価の高騰を反映して減少し、持家との格差はますます拡大している。こうしたなかで公営住宅はその管理戸数は9.4万戸（9万4千戸）と全体の1割程度にすぎず、申し込みは常に10倍以上と大きな潜在需要に対応し得ていないことを物語っている。

最近の公営住宅の建設は、工場跡地や臨海部の造成地などで、積極的な建設が進められているが、毎年の建設戸数は1500戸程度で、総建築戸数の5％程度に止まっている。また市は、若年者の呼び戻しによる人口増加を目指して、昭和50年代後半から新婚世帯への低利融資制度を実施しているが、最近の価格高騰から、世帯用のマンションも平均勤労者所得の10倍にも達しており、若年勤労者世帯の住宅取得はますます困難となってきた。大阪市は市内に第一種住居専用地域をもっていない。したがって東京における成城学園とか田園調布といった高級住宅地がない。かっての高級住宅地区であった帝塚山なども、相続とともに細分化や中高層化が進み、一般住宅地区に変わっていった。周辺部の住居地区も地価の高騰とともに、商業業務化への無秩序な転換が進む一方で、工場跡地などで高層マンションの建設が活発で、都市景観の混乱や緑の空間の減少から住宅環境は悪化している。これは都市計画のなかでの住宅の位置付けがあまり重視されなかった結果であると思われる。したがって、従来の住宅政策を転換、都市開発のなかで住宅確保を厳格に位置付け、住環境の改善を含めて積極的な住宅政策を展開しなければ、総合計画で目標として掲げた280万人の人口回復や都市の活性化を図ることは困難と見られる。

世帯数 / 地域	主世帯総数	最低居住水準未満	最低居住水準以上都市居住型誘導居住水準未満	都市居住型誘導居住水準以上
全国	37,413,400 (100.0)	3,549,900 (9.5)	15,949,100 (42.6)	17,463,800 (46.7)
大阪府	2,850,600 (100.0)	461,200 (16.2)	1,397,100 (49.0)	945,200 (33.2)
大阪市	963,380 (100.0)	211,560 (22.0)	478,020 (49.6)	266,850 (27.7)

資料：昭和63年住宅統計調査

居住水準の状況別主世帯数

3．住宅政策の意味と位置付け

以上にみたように、大阪市は人口目標の達成、都心コミュニティの回復、インナーシテイの活性化、高齢化対策、都市の潤いと文化、国際的都市づくり、交通問題の解決など多くの課題を解決するためにも、住宅、住環境政策を市政の最重要課題として位置付け、積極的な取り組みが不可欠なのである。

最近、東京都においては人口衰退に危機意識をもつ各区が、開発に伴う住宅の付置義務や、高齢者への家賃補助の導入、住宅条例の制定など積極的な住宅政策を展開し、東京都も民間住宅の借り上げによる“都民住宅”制度を発足させるなど、新たな政策の展開を見せている。国も、大都市圏での住宅供給の促進のために、大都市法の改正による、住宅促進地区の指定、都市計画法の改正による、住宅地区高度利用地区計画、用途別高度利用地区計画制度、さらに遊休地利用促進地区計画などの制度を設け、都市計画において住宅の確保を促進するとともに、民間賃貸住宅の借り上げ家賃助成など、さまざまな積極的な住宅政策を打ち出している。

これらの制度を積極的に活用することはいうまでもないが、新たな発想で住宅の建設促進、住宅を中心とする都市再開発の展開、住環境の改善に取り組むことが求められる。

特に大阪市は、従来の経済偏重の都市政策を住宅中心、市民の居住を重視した政策に転換することが、市政の民主化のためにも重要不可欠であることを強調したい。大阪市は“住む都市”としてより、“使う都市”としての都市整備が進められた結果、今日の住民の高齢化、低所得化を、地域によってはコミュニティの崩壊という事態を招いた。また市の職員の8割が市域外に住むという現実のなかで、わがまち意識の希薄化が、民主的市政の推進に障害となっていることを認識しなければならない。

多様な市民の住まない都市は健全な都市とはいえない。真に市民のための、市民による市政を実現するためには、まず中核的な市民が住んでいることが前提であろう。その象徴として職員の大半が住めるような住環境を回復することこそ、あらゆる大規模プロジェクトに優先する事業であるといえるのではないだろうか。大半の職員も住めない都市を放置しておいて、市民の市域外流出を嘆くことは矛盾であろう。この問題は従来も時折提起されてきたが、真剣な論議はタナあげされてきた。しかし市民のための都市づくりをめざした住宅政策の抜本的な転換の指標としても、この問題は重要であると思う。つぎに国際都市をめざすなら、外国人が住める都市をつくるべきであろう。大阪をアジアとの交流拠点として重視するなら、アジアの人たちを受け入れる都市づくりを積極的に展開すべきであろう。国際会議場やトレイド・センターだけで、国際化をいうのはもはや十分とはいえない。大阪市は横浜市や神戸市のような市街化農地や山林などの開発予備地をもたない。従って住宅の供給は既成市街地の用途転換や、再開発により、土地利用を高度化する以外にない。

都市の再生、再開発の観点からいえば、環状線周辺に広がる住居地区の大規模な再開発により高度利用を図ることが最大の課題であろう。大阪の再開発は都心商業地区と工場跡地に集中されてきたが、今後は老朽化した住宅地区の再開発を官民共同で推進することが大きな課題である。すべての地区を新たに導入された各種地区計画を適用して住宅を中心に中高層化を図るとともに、緑地空間を生み出すなど都市改造に取り組む方向で事業を展開することこそこれから取り組むべき最大の課題であろう。

（しおみ　ゆずる／宮崎産業経営大学教授）

地域住宅対策の展開

住　田　昌　二

大都市の住宅問題は、都市問題とオーバーラップし、地域的に多様な形をとって顕在化しているのが特徴であり、これからの住宅政策では〈地域住宅政策〉としての枠組みづくりが強く求められる。この章では、大阪市について、3段階の地域住宅政策の構想を提案する。

1．ゾーン別住宅政策（臨床的対策）

大阪市は、近畿圏全体からみれば、大都市圏の中心地域を構成しているが、市域内部を子細にみていくと、住宅事情のかなり異なるいくつかの地域に分けられるのに気付く。マクロに地域分けすると、都心地域、準都心地域、周辺地域に三分されよう。

いま簡単に地域別の住宅事情を特記すると、都心地域（北・中央区）は、常住人口少なく（全市人口の5％）、その割に高齢者の占める比率が相対的に高い。就業地中心の地域でありながら、住宅ストックに占める専用住宅が8割強に及び、その3分の1は持ち家である。準都心地域（福島・西・浪速・天王寺区）の住宅事情は都心地域の住宅事情に準ずるが、遷移地帯の特徴として土地利用の混合性が強い。

周辺地域は上記2地域を取り巻くリング・ゾーンで、さらに6つの地区に細分される。北部（東淀川、淀川区）は住宅的性格強く民間借家、なかでも非木造借家の占める割合が高い。東北部（都島・旭・鶴見）は北部と似ているが、持ち家の比率がやや高い。東部（城東・東成・生野区）は戦前長屋のストックが多く、全市1割に対して当地区では2割を占める。高齢者率が都心地域と並んで高いこと、住宅と町工場の混在が目立つことなど、特有の問題が集中している。東南部（平野・東住吉区）は住宅スプロールが顕著であった地区であるが、公営住宅が2割を占めるのが注目される。南部（阿倍野・西成・住吉・住之江区）は民間借家、木賃アパートの比率が高い。西部（西淀川・此花・港・大正区）は公共・民間の各賃貸住宅の比率が相対的に高い。住宅の集中性強いが大工場群と接しているのが特徴である。

上のような各地域によって、人口・世帯の構造、住宅ストックの状態、土地利用の傾向が大きく異なる。従来、階層対応本位に展開してきた政策体系を見直し、これら3地域6地区を対象に〈地域住宅計画〉を立案し、それに基本をおいた恒常的な住宅対策を計画的に展開していくようにすべきであろう。

2．重点地域対策（構造的対策）

上の住宅対策は、いわば臨床的な施策体系である。地域的に特化している現状の住宅問題に対処するという点にいちばん大きな目的がある。しかし、これだけでもって、大阪市の住宅問題を根治させることはむずかしい。より構造的な対処が必要である。

大阪市からの人口流出は80年代の中ごろで一端食い止められたが、近年、今度は全市的規模の流出兆候がみられはじめている。もしこれに歯止めがかけられなくなると、住宅問題は都市問題全体に転化し、大阪市が目に見えて衰退化するのは必至である。人口流出を食い止め、逆に人口回復をはかることは至上の命題であるといえる。それを実現するためには戦略的な住宅配置構想を立て、地域をねらい打ちした住宅の集中投資、あるいは誘導をすすめていく必要があろう。どのような対策が必要か、かなり大胆に提起してみる。

（1）都心居住の誘導…（旧）北、中央区

大阪の都心は、世界の大都市の中でも、もっとも常住人口の希薄な地域となっている。業務地が集中し、夜間の人口空白地になっているため、都市の活力がそがれるのがもっとも問題である。常住人口の中では、高齢者の占める割合が高くなりつつあるのも看過できない。人口の回復を図るためには以下の政策の複合的展開がいる。

①住宅付置義務制…オフィスなどの建築には一定床面積の住宅の付置を義務づける。住宅付置を行う場合は容積ボーナスも考えられる。

②アメニティ地域制…都心は生活関連施設が衰弱し、ここで生活していくのはたいへん不便で生活費が高くつくのが問題。旧小学校区単位で生活施設ミニマムを設定し、生活し易い最低の条件整備をはかることが必要である。

（2）ヤングタウンの形成…（旧）大淀区

90年代に顕在化する住宅需要の中でもっとも注目されるのは第2ベビーブーム世代が20歳台に突入することにともなう膨大な単身住宅需要の発生であろう。この層を大都市内部に積極的に定着させることで、都市の活力を増大させるべきである。大阪市ではキタの都心に隣接し交通の便がよい旧大淀区にシングル、ディンクスなど向けの大規模団地をつくり、そこを人口逆流の係留地点とすべきであろう。

①ヤングタウンづくり…ワンルーム・マンションと若者文化娯楽施設がミックスした大規模団地をつくる。高密にすれば高地価に対応できよう。

②若年層向け家賃補助制度…若年層の大都市内定着を促進するため、大阪市ではじめられた新婚層向けの家賃補助を積極的にすすめる。①ともリンクさせる。

（3）ウオーターフロントの開発…西、此花、港、大正

戦前の大阪市の居住地の中心は今よりもずっと西にあり、その名残で此花や港は、庶民の住宅地的性格が強い。その外側を工場街、港湾地区が取り囲む格好になっている。工場はスクラップ化したものが多く、港湾関連の倉庫街は荷揚げのやり方が変わり遊休化しているものが多い。昨今、ウオーターフロントが見直されている折から、これら地域をニューヨークのソーホー地区などのように住宅と文化、商業のコンプレックス地域として再生させることを狙う。

①芸術家村…倉庫街をアトリエ、ホール、演劇場、あるいは観光ショッピング街などに再生させていく。

②タウンハウス地区…川沿い、ドックヤード、工場街などにおいて低層高密でヒューマンスケールの町並みづくりを目指す。

（4）戦前長屋の再生…東成、生野、天王寺、阿倍野、福島



都心のコーポラティブ住宅



若者達の集まるアメリカ村



居住地としての整備が期待されるウオーターフロント

大阪は、戦前日本でもっとも長屋街が発達していた伝統があり、焼け尽くしたとはいえ非戦災戦前長屋が日本でもっとも多く残っている都市である。ところがこれら長屋街の老朽化は顕著であり、権利関係が錯綜している。個々の改修は相隣関係に悪影響を及ぼすだけだが、さりとて共同建て替えには有効な手法が見つからない。土地利用的には住宅と町工場の混在が目立つ東成・生野と、比較的長屋に純化している天王寺・阿倍野に分かれる。これらの地域を新たな町家街に再生していくことが重点課題のひとつである。

①新・町工場地区…工場の下駄ばきアパート、または工場アパートなどへの共同建て替えをすすめ、新たな職住一体の町に仕上げていく。

②新・長屋街…長屋の密集する住宅街は、小規模でいいからまとまるところからタウンハウスへの建て替えをすすめていく。

③スポット・クリアランス手法の開発…数戸単位でもまとまれば共同再開発をすすめていける公的援助手法を創り出すのが急務である。工法的には立体街区（都市型ハウジング）の形成に向かわしめる。

3．ポケット・ゾーン対策（遊撃的対策）

上記のゾーン別住宅対策と重点地域対策を補完する役割を狙い、遊撃的に展開する施策としてポケット・ゾーン対策を別途用意する。ポケット・ゾーン対策というのは、街区レベルで行う小回りの利く対策という意味である。何等かの形で区域指定し、そのオーソライズのもとに財政的技術的な公的援助制度を設ける。

（1）市街化農地整備地区…数アール単位の未利用の放置農地を対象に、借り上げ借地型の住宅経営を行う。土地の信託を受ける財団を農協と提携してつくる。

（2）地区計画推進地区…郊外型の未利用宅地、農地を含む街区で地区計画を実施させ、そこでの住宅充填の事業を公的助成を伴った形ですすめる。

（3）木賃再生地区…大阪市内の木賃は、豊中や門真のように集中的傾向を見せず、むしろ散発拡散型立地であるが、それでも数棟の木賃が集まっている所は結構ある。これらの地区を木賃再生地区として指定し、できる限り共同建て替えとしてすすめていく。

（すみた　しょうじ／大阪市立大学教授・工博）

都心居住の促進

巽　　和夫

1．都心居住の意識

都心の定義は、都市の規模、性格、成立過程などに応じて都市別に異なっており、流動的であるが、商業・業務・行政・情報等の中枢管理機能を中心とするという点ですべての都市に共通している。大阪市の場合、中枢管理機能とともに、商業、文化の集積機能の意義が非常に大きい。居住機能面でとらえる場合には、住宅市街地の広がりを考慮して、おおむねＪＲ環状線の内側の地域、行政区では６区（北・中央・西・天王寺・浪速・福島）を対象とするのが適当であろう。

大阪市都心部は、歴史的にも市街の中心地であり、低層高密に町家・長屋が集積し、職・遊・住が近接する生活が営まれていた。第二次世界大戦により大半が消失したが、戦後、復興区画整理事業による基盤整備がなされ、業務・商業機能の集積地域として発展してきた。大阪市人口は、昭和40年の316万人をピークに減少傾向が続いているが、特に都心部の人口減少は著しく、昭和38年の62万人から57年の37万人へ、20年間に25万人減少した。

昭和59年の住み替え動向調査によると、大阪市の人口移動要因のなかで転出超過の最大原因が「住宅･住環境」、次いで「結婚」となっている。都心部の場合、住宅から商業・業務用途への土地利用の転換も一因となっているが、居住条件の悪さが人口流出を促していることは疑いがない。

ところで、都心居住を推進する必要はどこにあるのだろうか。次のように考えられている[1]。①コミュニティ機能の維持、②都市基盤施設の有効利用、③職住接近の促進、④居住ニーズの多様化への対応、⑤地域の活力維持、⑥人口構成のバランス確保。

市域からの人口流出は、大阪市域に職場を持つ勤労者にとって通勤負荷の増大を強いるが、市当局にとっても都市経営上ゆるがせにできない問題である。ことに大阪市は市域が狭く、全域が市街化されているという性格から、都心部の人口回復は、他都市に比べてより重要性が高いと考えられる。

都心居住を活性化するための条件は二つある。第一は、都心部が、情報・文化・商業などの都心機能性を高め、職・遊の魅力を増大させることである。第二は、優れた住宅・住環境、および生活関連施設を供給・整備し、低廉な費用で便利で快適な生活を可能ならしめることである。

2．都心の居住者層

大阪市人口は昭和40年から60年までの20年間に16.5％減少したが、世帯数はこれとは逆に14.6％増加した。すなわち、世帯分離が進んで多人数世帯から小人数世帯へ急速にシフトした。特に単身世帯の割合は、12.8％から26.0％へと２倍以上にふくらんだ。この傾向は都心部においていっそう顕著に表れており、今後さらに進行するものと予想される。

都心の居住者はどのような特徴を持っているのだろうか。およそ次のような三つの型に分けることができる。

（１）定住型：古くから都心に居住している居住者層、及びなんらかの事情で都心部に来住している居住者層。古くからの居住者の中には高齢・低所得者も多く、居住水準は低いが、長年にわたる地域居住の経歴のなかで、比較的に安定した生活を営んでいる。戦前長屋や一戸建居住者が多いが、都心の商業・サービス業等の自営業者もこれに含まれる。

（２）職住型：都市サービスに従事する居住者層。仕事の性質上、早朝勤務・交替勤務・深夜勤務のため、勤務地に近い都心部に居住せざるをえない。これまではサービス労働者が多数をしめていたが、今日、金融・情報等の業務の国際化やニュービジネスの出現に伴って、これらの業務に従事するエリート・ビジネスマンに都心居住を余儀なくされ、またはそれを志向する層が現われている。

（３）遊住型：都心生活を積極的に享受しようとする居住者層。都心に集積している文化施設や豊富な商品のある商業施設等の利用を楽しむというライフスタイルにより、生活時間の合理化を図って都心居住を志向する。

これら三つの型は相互に画然と区分できるわけではなく、組合せ型や中間型が存在する。今後、都心居住を推進する施策を講ずることによって、より積極的な都心居住者層が増加していくであろう。

3．都心の居住形態

大阪市都心部は、中高層高密の居住形態を目指すべきである。第二次大戦前は木造の町家長屋形式による低層居住であったが、居住密度は200～300人/ha にも及んでいた。この居住密度は、中高層化を図ることにより、魅力のある現代都市生活を実現することができる。今日、都心部における住宅供給は、中高層集合住宅が一般的となっているが、これは個別の敷地ごとにインフィルされたクローズドタイプの集合住宅建築である。いわば平面の街における立体的建築物に閉じこめられた居住形態だといえよう。

都心部の集合住宅形態は多様であって良い。長期居住者が多く、在来的なコミュニティが成熟している地域においては、界わいの雰囲気を残すことに重点をおいて、中層程度の街区に構成することが適当であろう。これに対して、工場跡地の再開発のようなケースでは、高層・超高層として大きなオープンスペースを生み出す方が好まれよう。いずれにせよ、都心部各地区の地域的特性を反映すると共に、全体として、単調でなく変化に富んだまちなみを形成しなければならない。

都心部に建設される集合住宅の計画基準は見直しが必要である。今後、公営住宅団地の建替え事業を推進しなければならないが、それに際して、従来の郊外型基準から都市型基準へ改訂する必要がある。具体的には、日照基準の変更、地下空間・屋上空間の積極的な活用、駐車場問題、住戸床面積・日照条件・家賃等の総合的評価体系の確立などの諸課題がある。

将来の都心部の居住形態は、立体の街としての都市型ハウジングシステム[2]を志向すべきであろう。都市型ハウジングシステムが従

来の集合住宅と異なる特徴は次の諸点である。

①開放的な集住形態を持ち、各住戸は社会に対してオープンで独立的である。

②立体的な近隣コミュニティが形成されるとともに、地域コミュニティとの連関関係への配慮がなされている。

③立体の街として、街路や広場が設けられ、都市サービスシステムが整備されている。

④立体街区を構成する社会資本としての軀体と各世帯（家族）の自由な生活を実現する私的資産としての住戸とは分離されている。

⑤民有地の社会化を図り超低地代での利用を実現するためには、賃貸住宅の形態を取らざるをえないが、これを軀体／賃貸と住戸／持家（または賃貸）とに区分して扱う。

⑥住宅と業務・商業・文化施設などの他用途施設との立体的な複合化を図り、新しい都市居住様式を創出する。

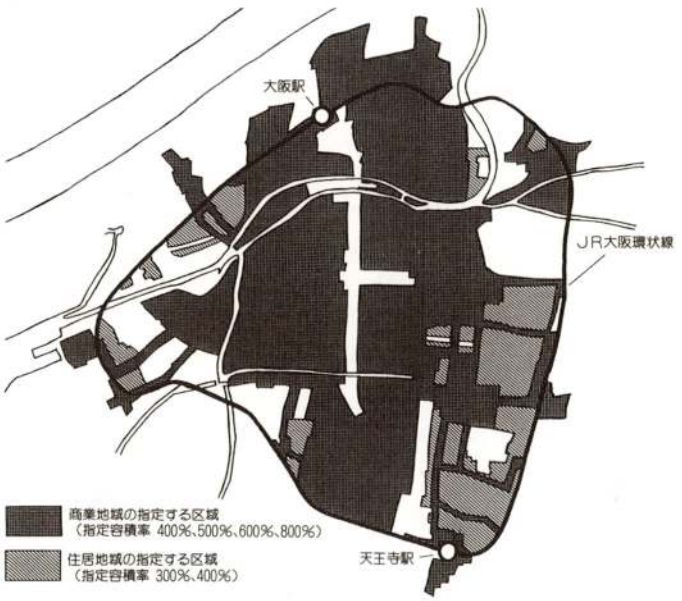
4．都心居住推進の政策

都心居住を推進するためには、立体街区の形成に向う長期的な施策の他に、当面する諸施策を講ずる必要がある。次のような諸施策が考えられる。

①オフィスと住宅とのリンケージ。都心部における業務・商業施設の進出により住宅の立地が困難となる事態を改善するため、オフィス供給事業者にオフィス供給と住宅供給とをリンクさせて、住宅附置を誘導する政策を行う。大阪市ではすでに「都心住宅優遇ボーナス制度」を実施している。これは、都心部の一定区域において総合設計制度を利用して住宅を含むビルを建設する場合には、一般の事務所ビルに比べて容積率の割り増しを大きくする制度であり、昭和54年度から実施されている。また再開発地区計画制度を活用した「船場地区における都心居住促進地区ボーナス制度」や、都心住宅優遇ボーナス制度の適用区域において、各種融資制度の条件を緩和する融資・助成制度（平成元年度より実施）が行われている。これらの都心居住促進のための諸制度は、それぞれに一定の成果を挙げている。

今後、用途地域性の区分細分化の見直し、ダウンゾーニングの検討、中高層集合住宅地区の設定、立体用途地域制の導入などの検討が行われなければならない。また、都心部の集合住宅に非住宅利用が多いことから、職住密接型の零細なオフィス需要が旺盛であることが分かる。こうした需要を積極的に誘導するために、併用住宅の中高層化を進めることが考えられる。都心型住宅の一つのタイプとしての開発が期待される。

②単身者・DINKS向け集合住宅の供給。都心部の単身者・DINKSの居住需要は多く、ワンルームマンションなどがこれに応えている。しかしながら現在のワンルームの多くは長期に定住するためには不十分なものであり、一方では近隣とのトラブルも多発している。住戸面積の拡大、居住サービスの充実を図る必要がある。また集合住宅の運営管理のシステムを整備して、居住者の居住利便性を高めるとともに、良好な近隣コミュニティの醸成に努める。このような誘導を行うためには、ワンルームマンションに対する適切な「指導要綱」を定めて、質水準の維持を図るとともに、優良なプロジェクトを表彰するなどして計画や技術の向上を促すことが重要である。



都心住宅優遇ボーナス制度適用区域

③居住機能の向上。都心部は道路・下水道・公共施設などの生活的社会基盤が整備されているといわれているが、必ずしも日常的な住機能が円満に整っているとはいえない。たとえば、スーパーマーケットがないので、毎日の食料品もデパートに依存せざるをえないといったことがある。また、小学校が統廃合されて通学に不便を来している。都心からの人口流出が居住機能の低下を招き、そのことがさらに人口流出をもたらすという悪循環に陥っている。都心部は都市全体の中心部としての役割と、自らの居住地としての役割とがある。都心居住を推進するためには、日常的な居住機能を向上させて、既成の生活関連施設を活用しながら、不十分な施設を重点的に整備しなければならない。

（たつみ　かずお／京都大学工学部教授）

1）鳴海邦碩「都心居住の実態と展望」『日本不動産学会誌』1990.7
2）巽　和夫・高田光雄「都市型ハウジングシステムの展開」『カラム』1989.10

低質木造住宅地の整備と公営、公社の鉄筋コンクリート造住宅の建替

山本　晃

1．低質木造住宅地の整備

大阪市内において低質木造住宅が密集している地域はＪＲ環状線に沿った外周部に多く分布しており、その地域においては住宅の質的水準が低いのみならず都市基盤施設や土地利用の面からも多くの問題をかかえている。これらの低質木造密集地域はこれまでその更新再整備の必要性は充分認識されながらも、着手するまでに至らなかった、事業化には大変むつかしい状況にあるといえよう。

しかし、これらの地域の整備は今後の大阪市のまちづくりにとって放置出来ない問題であることは云うまでもなく、また国の長期的かつ積極的な公共投資の気運等を考慮しても、今が具体的に取組む時期であると考える。

（1）低質木造住宅の対象戸数

低質木造住宅の対象として考えねばならないものの１つは、戦前老朽木造長屋である。戦前に建築された住宅で現存する戸数は約10万戸と推定されており、これは全住宅ストックの約11％を占めているが、そのうち木造長屋は70％の７万戸と推計される。

これらの戦前木造長屋は経過年数、規模、間取り等から見ても大部分が早急に更新が必要な住宅と考えられる。

次に対象として考えられるのは戦後昭和20年代から昭和30年代前半までのわが国の経済の高度成長期以前に建設された木造共同住宅である。

この木造共同住宅は、大阪市への急激な人口の集中期の住宅需要に対応して建設されたものが殆んどであり、その当時では住宅難解消に有効に働いたものであるが、生活水準が著しく向上した現時点においては、建設当時の社会、経済情勢を反映した規模、構造、整備等の面からも現在の住宅需要に適した住宅とは言いがたい。

これらの木造共同住宅は全市で約13万戸と推計されている。

以上のように、低質木造住宅の対象として考えられる戦前木造長屋と木造共同住宅は合計20万戸にのぼる大量のものであり、全住宅ストックの20％にも達している。

（2）低質木造住宅地地区の状況

低質木造住宅の密集地区は、戦災を免れた地区にほぼ対応しており、ＪＲ環状線の東部と南部の周辺地域に広く分布している。これらの地区の住宅は戦前長屋が比較的多く、木造共同住宅はより広範囲に分布しているが、隣接の門真市等のように集中して大量に密集している地域は見られない。また、低質木造住宅地区は居住水準も低位にあり、生活道路等の都市基盤施設も不充分な所が多く、土地利用の面においても住・商・工が混在している地区が多く見られ、敷地も狭小なものが多く、権利関係も複雑であり市の中心部に近い立地条件にあるものの、住宅および住環境が低水準にある地区と言えよう。

（3）事業の手法

これまでの大阪市では、不良住宅が密集した地区において、国の住宅地区改良法に基づいて、住宅地区改良事業が実施され、かなりの実績を重ねてきている。

しかしながら、改良事業は手厚い国の補助が得られる反面、住宅の老朽度に重点をおく全面クリアランス方式であり、また採択基準が厳しい等、低質木造住宅地区の整備には不充分な点が多い。その他にも地区整備についての国の制度は数多く設けられているが、現実に事業を実施していくためには、いづれも一長一短があると言わざるを得ない。

今後、整備を進めようとしている低質木造住宅地区は、その状態や整備目標等も地区毎にかなり異なったものとなるであろうし、手法も全面クリアランスが望ましい地区や小規模であってもその更新が公共的に意義のある場合など多様な内容が予想される。また事業の実施に際しては、住宅施策だけでなく、経済、福祉等の面の施策も必要になる場合が多いと考えられるので、「低質木造住宅地区整備手法検討委員会」を設置し、モデル地区を対象に現行諸制度の改善をはじめ、地区の多様性に弾力的に対応できる、また民間エネルギーを活用するに必要な助成策等を含めた総合的な制度を確立することが重要である。

（4）事業の実施

①　事業推進の組織

事業の実施に当たっては、公共が先導的役割を果たすことは言うまでもないが、旺盛な民間の活力の活用を図っていく必要がある。

事業を推進するためには調査、企画をはじめ、地元の協力、都市計画との調整等々、国をはじめ、多くの関係機関との協議調整を図りながら進める必要がある。そのためには専任の事業推進組織を市の部局または関連団体に設置し、民間コンサルタントの活用等も図りながら、強力に進める必要がある。

事業の進展によっては独立した新組織の設立も検討すべであろう。

②　事業の実施

この事業を着手する際には事業地区の近隣に現住者等のための仮住居等を建設出来る更地が得られることは、事業を円滑に進める上で非常に大きな要因であり、新規用地取得の積極的な確保が望ましいが、公営、公社、公団住宅の仮住居としての利用の相互協力や、特に建替事業主体間の連繋、さらに仮住居として長期にわたり使用出来る仮住居用住宅の建設、民間住宅の借上げに対する家賃補助など、あらゆる方策を検討し、可能な地区から事業の実施に踏み切る事が必要である。

2．公営、公社の鉄筋コンクリート造住宅の建替

大阪市は市域が狭く、殆んど市街地化されているため、住宅建設用地の取得は従来から困難な状況にあったが、多くの悪条件を克服しながら用地取得に努める一方、木造住宅の建替事業を積極的に行い、公営住宅、改良住宅等の市営住宅を120,000戸建設してきた。

しかしながら、近年の異常とも言える地価の高騰により、住宅建設用地の取得は不可能に近いといっても過言ではない極めて困難な状況を招くに至った。この様な極めて厳しい用地事情の下で、市民

の住宅需要に応え住宅建設を推進するためには、公共用地の積極的活用、他施設との複合化等を推進する一方、これまで進めて来た市営木造住宅、簡易耐火造住宅の建替事業が完了の目途がついてきている現段階で、市営及び市公社の建設年度の古い鉄筋コンクリート造住宅の活性化と高度利用を図るための建替事業に着手することが急務であると考える。

（1）市営住宅、公社住宅の建設状況

戦後から昭和63年度までに建設された12万戸の公営住宅、改良住宅等の市営住宅戸数を構造別にみると、木造21,500戸、簡易耐火造8,500戸、鉄筋コンクリート造9万戸となっている。

公社住宅については、昭和25年度より昭和63年度までの建設戸数は21,700戸であり、殆ど鉄筋コンクリート造住宅である。

（2）市営木造住宅、簡易耐火造住宅の建替事業

大阪市の住宅建設に大きな役割を果たしてきた木造、簡易耐火造住宅の建替事業は昭和30年度から始められ、現在までに昭和20年代及び昭和30年代前半に建設されたものについてはほぼ完了し、木造についてはストックの約87%、簡易耐火造については約30%が建替えられ、全体の進捗率は70%となり約21,000戸が建替完了済である。残りは30%約9,000戸であり、総てを完了する目途がたてられる状況に至っている。

（3）建替対象となる鉄筋コンクリート造住宅（R・C住宅）

①　市営住宅

市営R・C住宅の管理戸数は現在、約85,000戸であるが、これを建設年度別にみると、昭和30年以前が3,600戸、昭和30年代が13,000戸、昭和40年度以降が68,000戸となっている。

このうち昭和30年以前のR・C住宅は、建設当時は新しい生活スタイルの象徴的な存在であったが、すでに35年以上を経過しており、老朽化も進み、規模についても35m²程度と小さく、30m²以下の狭小なものも含まれており、設備面についても低い水準にある。

また、建設場所は好立地のものが多いが、すべて中層住宅であり、容積率が低く、土地の高度利用の面からも住宅の質的な面からも、更新活用を図ることは大阪市の住宅施策にとっての重要かつ緊急な課題である。

従って、現時点で建替事業の対象とするR・C住宅は、昭和30年以前に建設の3,600戸を中心として考える事が適切である。

②　公社住宅

市公社の賃貸住宅は、昭和25年度から昭和39年度の間に2,100戸が建設されたが、総て中層のR・C住宅で容積率も低く、平均床面積も36m²程度と小さく、老朽化も進行している状況にある。

従って、公社R・C住宅の建替対象としては、賃貸R・C住宅の総てを対象として、可能なものから事業に着手していくべきであろう。

（4）R・C住宅建替事業の推進

市営住宅、市公社住宅のR・C住宅の建替事業を推進するに当っては、以下の点を留意して実施することが肝要であると考える。



大阪市内の中層R・C公営住宅

①　R・C住宅の建替事業の第1着手は市営、公社住宅ともに大規模かつ好立地の団地から実施するよう検討される事が望ましい。

その事により、事業の成果を広く市民に示し理解を得るとともに、建替により生じる増戸数を以後の事業の仮住居等に利用出来るなど多くのメリットがあり、今後建替事業を継続的に進めていくうえで有効であると考えられる。

②　この建替事業は木造住宅の建替事業と同様に、市民の貴重な財産である住宅用地の高度利用を図り、活性化する事業であり、21世紀に向けて国際都市大阪のモデルとなる優れた質の集合住宅と豊かなアメニィティを備えた住環境の創造を目指すものでなければならない。そのためには、確実に到来する高齢化社会や、ライフスタイルの変化、車社会の展望など将来の社会の変化への対応が必要であり、広い分野の衆智をあつめ検討する場を設置し、問題点を整理する必要があろう。

さらに、優れたデザインとこれからの時代にふさわしいアメニィティ施設の計画が重要であり、アイディア・コンペ等により、21世紀の大阪の都市景観の形成に大きな役割を果たすものとなるよう努めなければならない。

③　建替事業により新たに創造される住宅団地は、今後の多様な住宅需要に適確に対応するものでなければならない。

市営住宅団地の所得階層については、低所得層だけでなく量的にも多い中間所得層向け住宅など、多様な需要に見合った住宅建設を推進していく必要がある。

また、公社住宅団地については、高所得層向けの住宅や、国外からの来訪者の住宅など弾力的に取組む必要がある。

④　R・C住宅の建替事業を円滑に推進するためには、仮移転のための住居の確保が何よりも重要であるが、そのため市営、公社、公団の保有ストックの相互利用を組織的に行うとともに、用地を取得して建設する仮移転用住宅の建設費や、必要となる家賃減額、また高水準デザインやアメニィティ施設等に対する国の補助制度の拡充と強化の実現を国に対して強く要望していくべきである。

（やまもと　あきら／京橋都市センター㈱代表取締役）

民間住宅対策の在り方

椚　座　正　信

大阪市は1987年に「住宅施策の６つの方向」を打ち出した。
即ち、
(1)　人口の市内定着を推進する。
(2)　良質な住宅の質的拡大と住み替えの促進を図る。
(3)　適切な住居費負担のもとで住宅供給を進める。
(4)　住環境の整備を促進する。
(5)　住宅の計画的立地を図り、職住近接を進める。
(6)　安全なまちづくりの推進を図る。
言い換えれば、如何に豊かで、エネルギー溢れる大阪のまちを創造するかが課題であり、住宅施策が「まちづくり」政策の中の重要な役割を占めることである。住宅施策は「まちづくり」政策を基本にして進められる必要性が高いということを認識しなければならない。

大阪市の行政組織も「都市整備局」がその役割を果たす部署となっていることからも頷ける。

そのためには、６つの施策がバランス良く推進されることが大切であり、住宅の建設のみが突出しては人口の定着及至は人口増は到底実現しがたく、現在の大阪市の人口263万人が260万人を割ることにもなりかねないと心配される。

１．公的住宅対策と民間住宅対策

（１）住宅統計（昭和63年）

大阪市の戸数116万戸中、居住世帯は96万世帯であり、その特色は次の３点である。
ア．借家比率が高いこと（60%、内民間43%）
イ．住宅規模の総平均は61㎡であるが、借家は39㎡と小さい。
ウ．着工新設住宅（昭和63年　500,000戸）では民間資金住宅が87%を占めていること。又民間分譲住宅は年により差が大きいが、10,000戸～4,000戸程度となっている。

（２）民間住宅施策の位置づけ

以上簡単に大阪市の住宅事情の特色を見たが、まちづくり政策として住宅施策を推進する上では、民間住宅の果たす役割は大きい。しかし、行政が何から手をつけていくかといえば、先ず公的政策のハード面、ソフト面の対策であり、現実に行われている大阪市の施策も概ねそうなっており、全国の地方自治体も同様な姿勢であるともいえる。更に、民間住宅対策として何らかの施策を講ずれば、その施策が動き出した時点からそれは公的住宅施策に転換していることもあるだろう。例えば、最近発足した「借上げ公営住宅」制度は長らく望まれていた民間賃貸住宅対策であった。

従って、住宅施策としては如何に公的住宅施策を講ずるかが大切であり、市財政の立場から見ても大儀名分がつき易いであろう。そのために大阪市としては既存の施策の更なる充実、整備を図り、また、新たな施策を打ち出すことが望まれる。

（３）大阪市独自の住宅施策の実現

大阪の地盤沈下が憂慮されはじめて久しい。東西二眼レフ論も消滅し、今、関西復権の大プロジェクトが次々と台頭しつつある中で、住宅施策も大阪市独自の、大阪ならではの施策が望まれる。戦前、戦後に展開された数多くの大阪独自の行政施策と事業が今日の大阪に及ぼしている効果は大きいし、全国に先駆けて実施した制度が、中央、地方の官公庁や民間企業にも参考となったケースも多々あったことを想起する必要があろう。中央の役人が大阪へ来て勉強し、後に国の制度として実現していったケースもある。住宅、建築の分野で、かつての先輩の努力を凌ぐ成果を発揮してほしいものである。

なお、近年。国の住宅施策に関する新しい制度が「まちづくり」の面と住宅対策の面から、次々と登場し、従来要望されてはいたが到底実現困難と考えられていた制度も実現の段階に入り、大阪市の住宅政策のメニューも多様化している。平成３年度から、東京都が独自に思い切った新住宅政策を打ち出しているが、大阪市もこれを上回るアイデアを実現してほしいものである。

２．民間住宅対策

民間住宅対策として大別次の４項目を提案する。

（１）建築行政における住宅建築の指導と誘導

新設着工住宅の87%におよぶ民間住宅は、都市計画的見地から建築基準法による集団規制により住環境に関する制約がある。住宅の内容は建築基準法の単体規定による技術基準を充たす程度に留まっており、それ以上の規制はない。一方、一定規模以上の建築については、総合設計制度、優良再開発建築物制度などにより一部の助成や指導が行われているが、その他の住宅は建築基準法に適合するだけで、建築が進行する。そこで建築指導行政サイドから住宅基準をさだめ、特に民営借家住宅について積極的な指導が望まれる。かつて開発指導要綱が制定され、ある面では行き過ぎ指導もあったが、それなりの成果を挙げたことを考えると、建築行政が住宅施策の一翼を担う役割を果たすのだという姿勢が望まれる。

もっとも、この場合指導行政にも限界があろうから、相当の助成制度を伴うことを覚悟し、現在の「民間賃貸住宅融資制度」の拡大等の施策を考える必要がある。要は建築基準行政から住宅対策を打ち出しうることを配慮すること。これ以外に87%の民間住宅をチェックし、質の向上を図る手立てはないのではないか。多くの官公庁の住宅施策が公的住宅施策に偏っていることが気掛かりである。極言するならば、建築基準法の条例すべてがまちづくり対策の規制であると同時に、まちづくり事業化へのメニューとなり得るという発想を展開したい。野球でいえば、規制は守備であり、事業（助成、誘導を含む）は攻撃であり、規制だけでは「まちづくり」及至は住宅施策は生きてはこないことを認識してほしい。現に都市開発事業では民間事業に積極的助成が実施されており、住宅の分野でも出来ることとおもう。これこそ大阪市が人口対策、環境対策上検討すべき事柄であると考える。

（２）住宅の計画的立地を図る

このことは既に、大阪市の住宅施策の柱として位置づけられ、大

阪市のマスタープランに基づき、事業も推進されているが、(例、桜宮中野地区整備事業等) 更に一般住宅地の再整備に向けて計画立地の拡大を図る必要がある。

①民活方式の活用

土地信託事業による市街地再整備の実施例から反省すると、一つには、その土地プランが民間の自由意志に任されているため、例えば住宅計画が0であることもある。次には、事業の採算に重点が置かれ過ぎ、民間事業者と土地提供者双方にとって、それが全てであるが如き事業も見受けられる。これを住宅施策の見地から望ましいプランづくりを含めた積極的な民活方式として推進する必要がある。

②立体宅地の供給

立体宅地といえば、公的施策の上空の有効利用として公共住宅の建設に既に活用されている。その推進も必要であるが、別に提案したいことは、いわゆる「二段階住宅供給方式」の普及である。要約すれば、建築物の骨組みと内部空間の建設が別々に行われ、後者は建物への入居者が行うものである。建築物の骨組みは、①の民活方式又は大阪市の直接事業として実施し、その後、内部空間を民間住宅事業として或いは個人で完成させる。この方式は既に調査、研究も進み、問題点も究明されていることであるから、一段と努力されて、早く先例を生み出してほしいものである。

(3) 住宅施策として都市基盤の整備

戦前、船場、島之内地区で指定された後退建築線制度や、大阪市東南部における住宅地の土地区画整理事業における道路幅員確保の制度は、今日に至っても充分にその成果を発揮している。住宅地の再整備に当たり、住宅建築対策もさることながら、基盤整備、特に道路の確保は重要である。そのために、都市計画事業では手の届かない住宅地の細街路整備のための助成制度を講じ、住宅地区改良事業、都市再開発事業に準ずる都市整備事業を展開することにより、大阪市周辺部の住宅密集地が再編成されることを望むものである。

その手法としては、地区計画制度により土地利用計画を策定の上、狭小幅員道路の拡幅や、細街路道路網計画を策定し、それを確保するが、単なる規則だけでは実施が困難であるので一定の助成制度の創設が必要である。

(4) 民間賃貸住宅の規模拡大のための助成

既に述べたように民間賃貸住宅の規模は40㎡に満たない。これを解消するために民間借家の規模増部分に対する助成が望まれる。既存の民間賃貸住宅融資制度（本制度は国の制度として発足する9年前の昭和40年から大阪府では実施していた）よりも大幅な建築費助成（出来れば補助）を検討し、一方、入居者対策としては、応能家賃と合わせた家賃補助を採り入れる等の手段を講ずることが期待される。

以上の実施には、単に行政担当者の努力の他、それぞれの業務に関する熱意あるコーディネーターが誠意をもって事に当たることが不可欠である。業務に精通するベテラン・コーディネーターの存否に事業の成否が懸かっているので、彼らの育成も大変困難なことではあるが、やらねばならないことである。



大阪市内の民間集合住宅(1)



大阪市内の民間集合住宅(2)

加えて、①大阪市の住宅政策の重要性をまちづくりの視点で認識し、それを行政の中に位置づけることの理論構成　②各施策に対する周到な計画策定と関係者の実現への努力　③以上を踏まえて、大阪市当局の財政支出への決断－が望まれる。

（くぬぎざ　まさのぶ／㈱安井建築計事務所取締役社長）

注：本稿脱稿後、大阪市住宅審議会から「今後の住宅施策の方向について」－魅力ある大都市居住をめざして－と題する答申が出されている。

ウオーターフロントの開発を含む宅地供給の促進

富安秀雄

大阪市における住宅政策を推進するための、最大の問題の一つとして、地価の高騰と、住宅建設のための用地の不足があげられよう。

住宅を必要とする人々に、適当な価格や、家賃でそれを供給するには、適当な地価で、相当量の空地が存在することが前提となる。ここでは、その方策について考察してみたい。

1．低利用或は、未利用地の存在

戦後の我国の経済成長を支えてきたのは、大都市内の主として第2次産業であった。1970年頃までの高度経済成長は、俗にいわれる重厚長大の製造業が中心であり、それがその後軽薄短小といわれる、いわゆる先端産業に移行し、同時にサービス産業にと、産業の構造が変化していることは、よく知られるところである。

これは、輸送・通信手段では、海運や、鉄道から、自動車への変化、更には、ファクシミリや、通信衛星などによる情報伝達の変化である。

鉄道主要駅周辺などの広大な貨物ヤードや、港湾地帯及び運河沿いの倉庫、工業地帯が、埋め立てや、河川整備によって生まれ、活用されて、高度経済成長を支えてきた。これらの多くは、現在も存在しているが、上記産業構造の変化によって、施設の相対的生産性は低下し、低度利用地区と化している場合が多い。又道路輸送の発展や、港湾施設の沖合展開などから、既に有休地化している倉庫群や、貨物ヤードもあらわれている。

これら運輸・貯蔵、工場地区は、巨大な用地を持つものや、その立地がすぐれているものがあり、今後の都市整備上、極めて重要な意味を持っている。

既に大阪で着手されている淀川リバーサイド・高見フローラルタウンなどは、上記の工場地区の、高密度住宅地への利用の好例であり、いづれも、ウオーター・フロントにある。

大阪湾岸一帯には、上記の低利用地が分布していて、遊休化したＪＲの貨物ヤードや、その周辺関連施設用地と並んで、今後その高度利用を考慮すべき第1に挙げることができよう。

特に湾岸臨海部のそれらは、その規模が巨大である。1カ所数百ヘクタールに及ぶものもすくなくない。用地の合計は、数千ヘクタールに達すると思われる。大阪で昭和30年から40年代にかけて開発され、さまざまな試みを行って、大量の住宅を供給し、合せて北大阪地域の整備発展に大きく寄与した千里ニュータウンの面積が、1100ヘクタールであることを思うと、この規模の巨大さがわかる。

2．低利用地の利用

これらの大規模低利用地を利用することを考えると、解決すべき多くの問題があるが、その第1は高地価への対応であろう。

地価対策の最初に複合化を述べたい。都心部周辺のＪＲ用地などの場合は、桜の宮ＪＲ操車場跡地のように、既にその一部が、高密度住宅地として転換されているものもあるが、高地価が予想されるから、用地の入手ができても、市場価格で開発するとなれば、一般用住宅地にはなり難い場合が多いと思われる。

どうしても複合的開発によって、地価の相当部分を、住宅以外の高収益施設によって吸収し、そこに高密度の住宅開発を行うことで、床当り地価を低下させることが必要になる。

或は用地を公共的施設用地として利用することで、地価の一部を公共的に負担し、それに加えて住宅を開発することで、実質的に地価を低減するといった方法も考えられよう。

臨海部の大規模低利用地の場合には、都心周辺に比較すれば、地価は低いと思われるが、絶対値としては、相当高額であるから、前記と同様の配慮が求められよう。

ところで、これまでにも、住宅と他施設の複合化には多くの例があるが、多くの場合、複合化は、住宅・施設の双方にとって、マイナスの場合が多く見うけられる。しかし住宅にとって、共存する施設の存在が生活上の利便性を増すばかりか、生活環境としてプラスになるような空間を生み出したり、或は周辺市街地とのクッションともなる効果があったり、施設側にとっても、住宅や、そこに住む人々の存在が、施設の質を強化させたり、賑やかさを生んで経営上効果があるといった計画を求めるべきである。事実このような意味で魅力ある複合化の例は、各地にあらわれている。写真は、いづれも、アメリカのものであるが、上六ハイハイタウンや、リリパットハウスのように関西にもすぐれた例はある。

又一方、このような土地は、一般業務、商業的利用も考えられ、土地経営の視点だけからすれば、いかに複合化・高密化をはかっても住宅が不利の場合もある。都市内の夜間人口回復が必要であれば、住宅的利用が可能となるような、公的援助や、誘導策が併せて実施されなくてはならない。

又複合的市街地が、広く展開することが予想される地区では、住環境を確保するため、立体的用途規制を導入して、下層部の商業業務地区と、上層部の住居地区が分離され、それぞれの環境が守られるといったことも必要になる。

その第2は、土地利用の高度化を中心に、多様化の対応である。

その1でも述べているが、地価対策は、高度利用によることが、最も効果がある。住宅だけでの高容積化には、環境上限界があり、おそらく3～400%程度までと思われるから、他施設との複合化を前提としつつ、住宅供給を伴う開発についての、税的優遇策や、容積割増しなどの公的援助によって、通常以上の高容積の開発を可能とすることや、住宅計画にあたっては、高密度開発を可能とする都市内における住環境規準の設定や、これに適合する場合の公的資金の導入などが考えられてよい。これまでの規準は、多くが、郊外住環境を基礎に設定されている。

又臨海部のような所は、これまで陸地の末端で、いわば僻地の性格があり、都心に近い場合でも生活利便施設は皆無といった状況にある。住宅の供給整備は、同時に生活環境の整備と理解せねばならない。周辺部のこれまで不便であった住民の利用も考慮しつつ、日常生活のための商業・医療保険・教育・福祉・文化といった多様な



Daniel Burnham Court（**サンフランシスコ**）
左方に商業施設、側面（ガラス張りの天井の高い）の住宅部玄関に入り高層棟へ入る



Opera Plaza（**サンフランシスコ**）
地上部商業・文化施設　左方外部、上方は住宅、広場の地下はパーキング・スペース

コミュニティ施設や、公園、緑地・スポーツなどのレクリエーション施設などが求められる。これらの施設の多くは公的整備によるものであり、かつ前記のように住宅との複合化も可能である。将来都市内居住の推進のための複合化のモデルとして、高水準の魅力ある開発が期待される。

用地の多くが、臨海部にあることを考えると、多くの開発は、ウオーターフロント開発でもあり、その特性を活用して行くこともプロジェクトの大課題である。

3．交通問題

都心周辺の用地を除き、臨海部に代表される大規模低利用地の多くは、その造成の経緯や、土地利用の性格から、一般市街地から隔絶されている。物資の搬入、製品の輸送などのための、港や、産業道路はあっても、夜間人口は殆どなく、就業人口も面積に比較すると一般にすくないから、通勤輸送システムも貧弱である。こうした用地を、住宅を中心とする複合開発の対象とするためには、都市内各部との間に、便利で、快適な大量輸送機関を含む都市交通サービスや、道路の整備が不可欠である。開発規模が巨大である程この必要性は高いことは、当然である。大阪湾岸の土地利用転換、住宅地としての整備の鍵は、この交通整備にあるといってもよい。

都市部での大量輸送機関整備は、その建設費に占める用地費の割合が増大している。臨海部でも、交通整備費の相当部分が、既成市街地における用地費となると思われる。

大阪都市圏では、臨海部の開発も考慮しつつ、いくつかの新鉄道の整備が考えられつつあるが、これらによるサービスが可能な地区について、早目に開発準備を進めて、その実現をはからねばならない。勿論開発条件には、未定の要素も多いから、いくつかのオータナティブが考えられるが、いづれにせよ、具体化へのアプローチを開始することが大切である。

この場合にも、交通整備と、その費用負担は、計画の主要部分であって、大規模開発が、その費用の一部を負担する方法・既存道路の拡巾や、その上部或は地下利用に際して、道路上空利用についての検討などなどが考えられる。既成市街地の再開発と、新開発地をリンクさせることも、当然検討対象になろう。東京湾岸開発でも同様の課題があって、種々の方策が考えられているようである。これらも含めて、大阪方式とでもいうべき、うまい方式を開発し、湾岸都市化のための、インフラ整備を進め、魅力ある住宅複合都市が生まれ、大阪の住宅・都市問題に大きく寄与することを望んでいる。

（とみやす　ひでお／㈱市浦都市開発建築コンサルタンツ代表取締役社長）

住宅問題懇談会委員略歴（順不同）

椚座正信（くぬぎざ　まさのぶ）
1922年　大阪府に生まれる
1946年　京都大学工学部建築学科卒業
　　大阪府土木部　勤務
1961年　富山県土木部　勤務
1964年　建設省住宅局　勤務
1966年　大阪府建築部　勤務
1976年　大阪府企業局長
1980年　大阪府住宅供給公社・理事長
1984年　㈱安井建築設計事務所入社・取締役副社長
1989年　㈱安井建築設計事務所・代表取締役社長，現在に至る

住田昌二（すみた　しょうじ）
1933年　兵庫県に生まれる
1957年　京都大学工学部建築学科卒業
1962年　京都大学大学院博士課程退学
1962年　大阪市立大学生活科学部助手
1968年　大阪市立大学生活科学部助教授
1978年　大阪市立大学生活科学部教授，現在に至る

富安秀雄（とみやす　ひでお）
1928年　長崎県に生まれる
1954年　東京大学工学部建築学科卒業
　　市浦建築設計事務所入社
1961年　都市開発コンサルタント・大阪支所長
1962年　カナダ・トロントの Project Planning Ass.勤務
1963年　スウェーデン・Anker Gate Lindegren 設計事務所勤務
1963年　都市開発コンサルタント代表取締役，大阪支所長
1967年　市浦都市開発建築コンサルタンツに改組
1981年　代表取締役社長，現在に至る

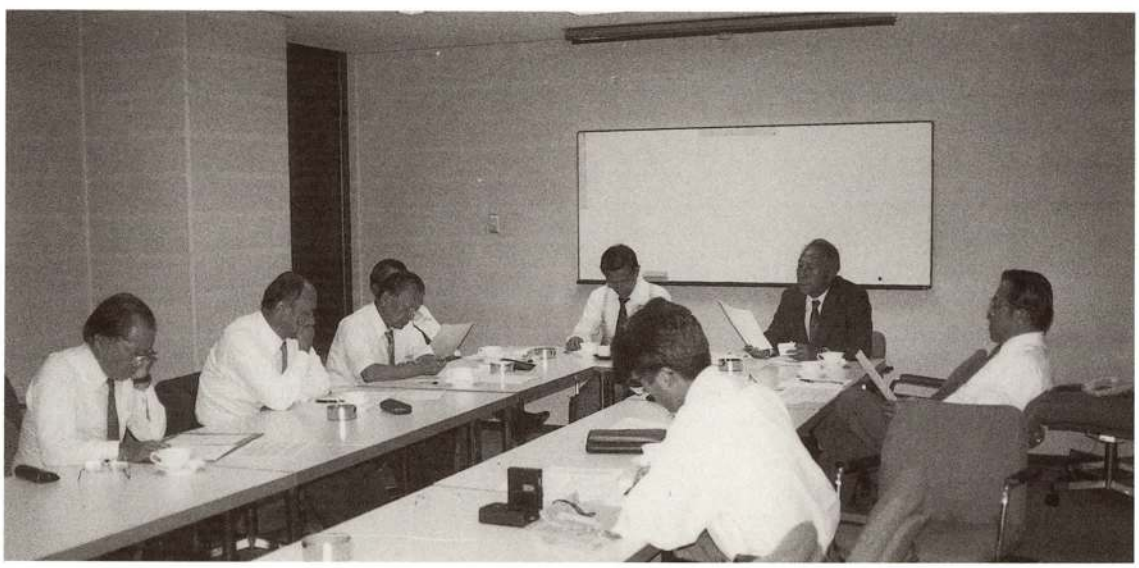
立岡　弘（たつおか　ひろし）
1934年　東京都に生まれる
1957年　名古屋工業大学卒業
1957年　伊藤忠石油勤務
1972年　大建工業勤務
1982年　取締役
1985年　建築本部長
1988年　東京本部長
1988年　常務取締役，現在に至る

塩見　譲（しおみ　ゆずる）
1925年　京都府に生まれる
1951年　大阪外事専門学校卒業
1952年　日本経済新聞社勤務
1976年　同社編集委員
1985年　近畿大学講師
1987年　和歌山大学経済学部教授
1991年　宮崎産業経営大学教授，現在に至る

巽　和夫（たつみ　かずお）
1929年　京都府に生まれる
1953年　京都大学工学部建築学科卒業
1958年　建設省建築研究所研究員
1962年　京都大学大学院博士課程修了
1966年　京都大学工学部助教授
1968年　京都大学工学部教授，現在に至る

山本　晃（やまもと　あきら）
1929年　北海道に生まれる
1953年　京都大学工学部建築学科卒業
1955年　京都大学大学院工学研究所修士課程修了
　　大阪市建築局勤務
1967年　建築局住宅建設課長
1974年　同局企画室長
1983年　都市整備局長
1986年　大阪地下街㈱専務取締役
1988年　京橋都市センター㈱代表取締役，現在に至る

山田俊満（やまだ　としみつ）
1932年　大阪府に生まれる
1956年　大阪大学工学部構築工学科（建築コース）卒業
　　日本住宅公団大阪支社勤務
1981年　住宅・都市整備公団関西支社に改組
　　（都市開発事業部事業計画第二課長）
1984年　関西新都市センター開発㈱取締役事業部長
1986年　㈱東建コンサルタンツ専務取締役
1991年　取締役副社長，現在に至る



OBAYASHI

人間・建築・都市





浅田彰 京都大学経済研究所助教授
Akira Asada
鈴木隆之 京都精華大学講師
Takayuki Suzuki
大林組本店設計部員

21世紀の

Human Architecture Holon
人間建築都市

建築という作業は、極めて多様な領域を横断して初めて成立する。そのことを感じている建築関係者は少なくないに違いない。しかし同時に、建築が他分野の潮流とどのような関係を持ち、また異領域のひとたちからどんな視点によってとらえられているかを、表層的にではなく、根底の思想の地点にまで遡って考えているひとは、そう多くはないのだ。建築や都市が、社会あるいは文化の構造に深く規定され、また影響も与えていることは、もはや明白なことだ。そしてこうしたことに思いを馳せられるぐらいには、建築関係者たちの世界も、成熟しているはずである。そこで、分野を問わず優れた問題意識で発言を続けている浅田彰氏に、実際の建築サイドで奮闘しているひとたちが、インタビューを試みた。この対話は、経済、社会あるいは家族の構造、テクノロジーの問題等々と、極めて多岐にわたって行われた。こうして複眼的な見方で建築について語りあうことは、いまではまだめずらしいことかもしれない。だが、こうした対話が日常的に行われるような状況こそが、これからの建築の世界にとって必要になってくるだろう。
（鈴木）

――**（大林組設計部）** まず、最初にお伺いしたいのですけれども、先生と建築との出会いといいますか、ご交際のある建築家を通して見られた建築、あるいは建築家像といったものについて、お聞かせいただきたいと思います。

浅田 私の伯父の浅田孝が、戦後初期の丹下健三研究室の中核になり、メタボリズム・グループのプロデューサー役になり、さらに建築から都市計画一般へと移行していった姿を見ていたので、日本の戦後の主な建築家たちの軌跡を自然と知るようになった。一般の人よりは建築というものに親しんだわけです。さて、日本の建築の流れでいうと、丹下さんの仕事があり、メタボリズムの人達の仕事があって、その次に、磯崎新さんの仕事があるわけですが、あるとき、『現代思想』の企画でディ・コンストラクションについて磯崎さんと対談をする機会があり、以後、建築と思想のはざまである種の対話を続けるということがあって、そこにアイゼンマンとかリベスキンドとかも入ってきたわけです。そこでは、僕が思想という領域からはみ出てしゃべっているのと同じに、建築家たちも建築プロパーの領域からはみ出てしゃべっているので、これは建築と遭遇していると言えるかどうかわかりませんけれども。



他方、消費者としては、特に京都という町に住んでいるので、それなりに周りの環境や雰囲気にあった普通の家の方がいい。というと、これは名のある建築家より、普通の大工さんが一番いいわけで、実際、そういう家に住んでいるわけです。だから、一方で建築や都市から思想へというふうな前衛的な部分での接触があると同時に、他方では、個人としては普通の家に住んでいるという分裂状態にあるんですね。

鈴木　今のお話にあった浅田孝さんや丹下健三さんに代表される、いわゆるモダニストとしての建築家の存在が一方ではあった。しかし、最近では、いわゆるポストモダニズムの風潮によって、非常に奇妙な形の建物が多く建てられるようになってきましたが、この二つの方向に関してどう思われますか。

浅田　常識的な見方でいうと、今世紀初頭に始まったモダニズムの運動が50年代〜60年代を通じて世界的に広がり、機能主義に基づく鉄骨とガラスとコンクリートの直方体のビルが世界中に建てられたけれども、そういうインターナショナル・スタイルが60年代末に一回行き詰まり、その後、70年代からポストモダニズムと呼ばれる動きが出てきて、80年代には今度はこれが世界を席巻するわけですね。そこでは、モダニズムが捨て去ってきた歴史的な様式とか大衆文化の様式とか民族文化の様式とか、そういういろんな様式を記号として引用してきてコラージュし、多彩さを競い合った。しかし、そういう記号のゲームも飽和してきたというのが80年代末の様相で、これから後、どうなるかということになっていると思うんですよ。

しかし、別の見方で言うと、実はそれ全部がポストモダンだったのではないかという気もしないではないんですね。というのは、戦前のヨーロッパのモダン・ムーヴメントと戦後のアメリカのモダニズムとはかなり違う。ヨーロッパの30年代までのモダン・ムーヴメントというのは、近代の思想や、それによって社会をよりよく変えていこうという社会運動と絡み合って前進してきた。いわば近代史の頂点に立つ理念の運動の一環だったわけです。ところが、既に30年代にフィリップ・ジョンソンがそれをアメリカに輸入したとき、インターナショナル・スタイルと名づける。スタイルというのは様式ですから、バウハウスの理念は捨象して、ミース風の形だけ輸入したわけです。こうしてスタイルになってしまうと、大量生産可能かつ大量消費可能ということで、非常にうまく商品化される。このように、30年代までのヨーロッパにおけるモダン・ムーヴメントは、そこで既にある意味でポストモダンな手つきによってスタイル化され、このスタイルがアメリカのヘゲモニーのもとに戦後50〜60年代の世界を覆ったと言えるのではないかと思うんです。これは、フォード主義的な大量生産・大量消費時代ですが、それに対して70〜80年代になると、オイル・ショック以後、ポストフォード主義への移行が始まる。多品種少量生産が支配的になる。言いかえれば生産の論理より消費の論理が全面に出てきて、消費者の目を楽しませるように細かく差異化した商品をつくらなければならなくなるんですね。そこのところで、アメリカ的な画一性にかわって、ある意味で日本的と言ってもいいと思うんですが、記号のコラージュのような建築が全面に出てきたのではないかと思うんです。それは世界的に商業空間を中心として大変な隆盛を見せたわけだけれども、やはり日本において、よくも悪くも最も突出した表現を見た。日本は地価がめちゃくちゃに高かったし、地上げ屋から見れば、地上げした土地に目立つ建物を建てて付加価値を上げておき、場合によっては2〜3年で潰して大きいマンションを建てることだってできた。いわば消費社会とマネーゲームに支えられたフロー都市のバブル建築ですね。だから、奇を衒った建物が、テンポラリーに建てられ、また壊されて行くという、



浅田 彰氏

生命の論理ですべてを律していくモダニズムに対し、消費社会にきめ細かく適応して多様な装いを見せるのがポストモダニズムだという見方もあるけれど、それらは両方とも本質的な問題には触れていないような気がするんです。

その点では日本が一番「先端的」だったという気はします。

鈴木　フィリップ・ジョンソン的なモダニズムとは、既にポストモダン的な手つきによって倫理観を骨抜きにされたモダニズムでしかなかった、ということはよくわかります。しかし、例えば、バウハウスで出てきたモダンには倫理観があって、それがアメリカに輸入されたとたんに最悪のものになったというような区分けの仕方というのは、若干疑問があります。例えば、マックス・ウェーバーがプロテスタンティズムを資本主義の精神として見ていくのと同様に、バウハウス的なところのモダンにおいて、既に資本主義的なものと結びつかざるを得ないような空間の把握の仕方というのがあったのではないでしょうか。それがアメリカで実際に資本主義と結びついていったわけですね。そういう意味で言うと、ミースの言っていたああいう空間そのものが、やはり資本主義の交通を可能にするようなものであったという気がします。

浅田　ミースは均質空間を作ったというけれど、実際の作品を見た場合、バルセロナ・パヴィリオンにしても、貴族主義的と言っていいほど高級な素材とか完璧な仕上げとかにこだわって、ちょっと一般化しがたいクォリティを追求している。それがアメリカのモダニズムにはない。実際、フィリップ・ジョンソンは完成された資本主義的ニヒリストであって、商売になれば何でもいいんだから、大量生産可能かつ大量消費可能な形で展開していった方が面白いんだと、そういう非常にシニカルなスタンスに立っており、それが商売上、成功したわけです。実際、彼自身が、クリスタル・カテドラルのあたりから特にAT & Tビルの頃になると、今度はポストモダニズムによる高付加価値の建築で商売した方が売れるというので、見事に変身するでしょう。

――今後の傾向として、少品種大量生産から多品種少量生産へ移行しているといっていいのでしょうか。

浅田　生産の論理ですべてを律していくモダニズムに対し、消費社会にきめ細かく適応して多様な装いを見せるのがポストモダニズムだという見方もあるけれど、それらは両方とも本質的な問題には触れていないような気がするんです。生産の時代は終わって消費の時代になるとか、産業社会は終わって情報社会になるとか言いますけれども、生産とか産業とかいうもの、つまり下部構造というものはやっぱり絶対必要なのであって、むしろその次元でどういう変化が起こっているかを考えないといけないと思うんですね。実際、いわゆる生産第一主義から消費第一主義へというふうな見かけの変化の背後には、少品種大量生産のテクノロジーから多品種少量生産のテクノロジーへ、あるいはそれを可能にする電子情報技術への重心の移動があり、フォード主義的生産様式からポストフォード的生産様式への移行があって、むしろそっちの方が重要なんじゃないかと。さらに言えば、50〜60年代の生産の時代から70〜80年代の消費の時代へという変化は、短期的かつ表層的な変化なので、もっと大きいスパンで言うと、前世紀末から始まった機械の時代がほぼ1世紀を経て新しい電子情報時代に移行しつつあるんじゃないか。それにふさわしい造形やシステム作りが今こそ求められているのではないかと思います。

鈴木　情報技術が発展してくれば、家族同士も映像でもって会話をすれば結びつきが維持できるとなれば、特に家族が一緒に住む必要がない。そんなふうに変わり得るのではないかと思います。

浅田　もし電子情報時代が広がってくるとすると、物を大量に集積して外延的に拡大していくというよりは、何もない小さなところでもちゃんと情報にアクセスしてそれを処理することができれば、内包的な密度を持てるというか、極端に言えば、昔のように四畳半の茶室がひとつあれば、そこで無限の時空体験ができるというふうになるかもしれない。今のはやや極端な話ですけれども、少なくとも今までとは逆のベクトルが要求されていると思うんです。例えば、巨大な工場や巨大なオフィスみたいなものがなくても、散在した住宅の1室ずつに端末があって、それをネットしておけば、十分、企業として機能し得るというふうになるかもしれない。とすれば、都市というのも脱都市のベクトルにそって分散していくかもしれない。その場合、巨大な空間に物を集積して詰め込むよりも、むしろマイナスの美学というか、物のレベルでは、ほとんど空っぽに近づいていくんだけれども、実はそのことによって情報のレベルで自由度が高まっていくような空間というのがいいんじゃないかという気がします。

大きな例で言うと、東京都庁舎のコンペのときに、丹下健三はああいう形で歴史的象徴性をもつと称する巨大なビルを提案したわけですけれども、磯崎新は、どうせコンペに落ちるという前提のもとで(笑い)、そういう高層ビルがそびえ立つというパラダイムとは逆の、むしろグリッド状の枠組みだけがあって中は自由に動かすことができ、その中でいろいろな



情報が取り交わされている、その情報の総体こそが建築なんだというパラダイム、ある意味で言うと70年万博のお祭り広場のモデルの拡張版を提案していて、僕はその方が21世紀的だったと思うんですよ。きらびやかに装った巨大な量塊としての建築がそびえ立つというのは、それなりのパワーを持っていて、そのことは否定しませんけれど、今後の建築は情報ネットワークの一つの中継点あるいは交換台みたいなものに変貌していくであろうと思われるので、そういうオープンで可動的なグリッドみたいなものは、その一つのモデルになり得るかもしれません。
小さい方で住宅をとってみても、もちろん非常に細かく造形的に粋をこらした住宅というのも作品としては見事だと思いますが、例えば、入江経一の設計でつくった玉川学園にある単身者住宅「モノル」なんていうのは、そのシンプルさにおいて面白いと思うんですね。



鈴木隆之氏

今の都市の単身者は、家族として充実した生活をするなんていうことではなくて、とにかく食事はコンビニエンス・ストアから買ってきた電子レンジ・グルメでいいし、お風呂はシャワーでいいし、そのかわり使ったあとのものは全部たたんで空間が広くなるほうがいいというような生活パターンに変わってしまっているから、とことんそれに徹していくことで、昔の基準でいえば貧しい、しかし、現代的にはシンプルであるがゆえに格好いい、そういう空間を作ってみせた。そうした新しい集住形式の模索は重要な課題です。
――私自身、一消費者としまして感じることは、家族という形が変わってきつつあるのではないかと思います。例えば単身者の方も多くなりましたし、女性も社会に出て随分働くようになりました。そうしますと、昔みたいに5時ごろになるとおかあさんが夕食を準備して子供のために、あるいはご主人のためにといった家庭は少なくなってきているように思えます。そういったあたりで我々が供給しなければいけない住居のあり方は、これからどういうふうなところに視点を置いて建築をつくっていけばいいのかなと思うんですが。



これからの「家族」という形態……
それはこれからも残り得る単位であるのかどうか。

浅田　建築をつくるということは、生活様式そのものをデザインすることだから、生活様式がどう変わりつつあるかということをもう少し具体的に分析して、それに合わせていった方がいいんじゃないかと思いますね。一つには、経済事情からやっぱり地方都市が再評価されざるを得ないのではないか。一方では東京と地方の所得の格差があるけれど、他方ではそれを打ち消して余りある物価や地価の格差があるから、ある程度、地方都市の方が住みやすくなってくる。さらに情報化が進むとすれば、地方都市にいても世界中の情報に接することができるようになってくる。その場合、地方都市では東京のスタンダードから言えば広やかな住宅というものがもう一遍考えられるわけですね。
他方、首都圏とか近畿圏においては、ラディカルな考え方の転換に基づいて、単身者なんだから、もう家族生活の充実などということは全部切り捨てて、徹底的に身軽にしてみるとか、そういう実験をした方がいい。それと都心の高額所得者のマンションということになるんでしょうね。
鈴木　人口減少にともない、大都市圏においては、外国人労働者の増加もあるでしょう。彼らにとって家族形態は、ほとんどともなわないものです。また、日本人においてもシングル・ライフが各年代とも増えていく傾向があると思われます。これからの「家族」という形態というものについてはどうお考えなんでしょうか。それはこれからも残り得る単位であるのかどうか。
浅田　家族形態は、先端的な部分ではどんどん崩壊するにしても、マジョリティとしては残ると思いますね。そういうことに関して言うと、これはよく言われることですけれども、やっぱり集住ということを考えたときに、できるだけ異質性が高い方がいいわけですよね。家族もいれば単身者もいるし、おじいさんやおばあさんもいれば子供もいるし、それが何となく混ざり合っている状況が望ましい。逆に、同じような年齢層・所得層・家族構成の人たちばかりを巨大な団地に集積するというやり方だと、どうしても不自然な社会になってしまう。しかも、昔は子供が2人ぐらいになったら、いわゆるマイホームを取得して外へ出ていくこともあったわけですけれど、今はずっとそのままですから、全員死ぬような時期になったらものすごく暗くなる。だから、スウェーデンなんかは昔からニュータウンをつくるとき必ず人口構成がばらつくようにした異質性を持たせる配慮をしているんですね。余りにも均質的な近隣をつくると奇妙な社会心理学的ダイナミックスによって、うわさの共同体みたいなものが深層にできちゃったりする。いわゆる新興宗教的なものは、多分そういう均質化された社会の中で行き場を失って渦巻いている情念みたいなものを非常にうまく吸い取って人工的に昇華してやるメカニズムだと思うんですね。それはやっぱり病的だと思います。
――現在、都市において、都心の空洞化が進んでいますが、将来この現象はますます増加する方向にあるのか、また、それを食い止めるため、都心に生活空間を持ち込む必要があるのか、お考えをお聞きしたいのですが。
浅田　60年代にマクルーハンは、電子情報網が地球上を覆ってしまい、端末さえあればど

マシン・エイジの見るからにメカニックな造形に対し、電子情報化されることで逆にバイオモルフィックになっていく。

こにいてもいいということになれば、都市からエクソダスが入って、グローバル・ヴィレッジに人々が散在するようになるだろうと予言したわけです。ただ、それは当時としては時期尚早だったということもあるし、どうしても人がフェース・トゥ・フェースで会って、必要な情報のやりとりを超えた部分を体験しないとだめだということもあってそのまま実現しなかった。そして80年代になると、劇場都市というコンセプトが流行し、都市の舞台の上で人々が単なる情報のやりとりを超えた演劇的な出会いを繰り広げるというふうなことが言われて、特に東京のような大都市の盛り場がそういう意味で注目された。しかし、その両者はどちらもちょっと極端過ぎるのではないかと思うんです。

鈴木　今、エコロジーブームで、人間は自然の中で分散して暮らすべきだという意見もあります。しかし、同時に人間には、機械的な、あるいはメタリックな空間に多数で住むことへの欲求もどこかであるような気がします。例えば、SF映画の中でシド・ミードがデザインした「ブレードランナー」や、「未来世紀ブラジル」で描かれたような都市の風景をみてみたい欲望が僕にはあります。香港の上海銀行をつくったノーマン・フォスターのようにテクノロジーに固執する建築家もいます。もともと建築というもの自体がその時代のテクノロジーをいかに表現しようかというようなことを主題にしてきたところもありました。あるいは、都市もそこにあるテクノロジーで自らをつくっていくという自己組織システムがあったと思います。今までのテクノロジーの進歩と、これからのテクノロジーの進歩の仕方というのは変わり得るようなファクターがあるんでしょうか。

浅田　マシン・エイジのテクノロジーと電子情報時代のテクノロジーは、質的に違うと思うんです。マシン・エイジのテクノロジーは、巨大なロケットをつくって月へ行くというふうに、大きくて機能的にすぐれたものをつくって外延的に拡大していけばそれでよしという機能主義の論理に貫かれていた。しかし、電子情報時代の主役である情報科学、あるいは情報科学の一環としての生命科学においては、細胞の中や脳の中で起こっている情報処理過程をのぞき込むとか、あるいはそれをコンピュータ上でシミュレートするとか、何か人間自身の内側に折れ込んできて内包的に展開していくような部分が重要になるのではないか。そこのところをどういうふうにとらえるかが問題だと思います。一つには、マシン・エイジの見るからにメカニックな造形に対し、電子情報化されることで逆にバイオモルフィックになっていくということがある。また、それと平行して、未来に向かって伸びる「輝く都市」というよりは、生命が生まれてはまた死んでいくというふうな循環過程を思わせるイメージが出てきていると思います。その背後には、機械の論理と生命の論理の違いがあると思うんですね。機械の論理というのは、とにかく最初に目的が与えられ、それを最適に満たす形がそこから計算されて出てきて、その結果、流線形の一分のむだもないロケットみたいなものができて宇宙へ行くというようなことになる。ところが、生命の形については、一応、設計図としてDNAがあるとはいえ、与えられた目的を最適に満たすようにそのDNAが配列されるのではなく、太古の昔から、突然変異により、大体は突然DNAの量が倍になるとかナンセンスなシークエンスがどっさり挿入されるとかいう形で変化を繰り返し、しかし、その中のある部分に対応する蛋白質が事後的にみて生存のために有益であるというので選択されてきたんですね。その結果として、DNAには、全く無意味な、少なくともそう思われるような部分がいっぱいあり、その中にぽつぽつと有益な情報が入っているというふうになっているわけです。それこそサイバーパンク風に言うとレトロフィットという、つまり、ほとんどジャンクなんだけれども、そのジャンクの中で後から見ればここは役に立つというふうなものが幾つかあって、それが生物の形と機能を決めていく。その論理が建築とか都市にもあてはまるとすると「新しいパラダイムに沿った建築を」ということもあるけれど、むしろマシン・エイジ、あるいはもっと前から持ち越したほとんど廃墟のような集積のなかにいわばレトロウイルスのように住みつき、部分的に内側から変えていくというふうなこともあり得ると思うんです。

日本の場合は、余りにも新陳代謝が早いので、そういう昔からの集積は余りないですけれど、ニューヨークみたいな都市ですら、かつての産業時代の遺跡というか、それこそ倉







庫街とか何とかがあって、後からそこにやって来たアーティストやなんかがほとんど占拠同然の形で住みついて内側から変えていくわけですし、もちろん、ヨーロッパの都市なんかだと、もっと古い層まで含めて同じようなことがあるわけです。日本の場合は、廃墟の魅力を云々する前に、いろんな層が重なっていかないでどんどん次のものによって交代させられていくというところが特異と言えば特異ですけれど。

鈴木　最近、大林組を含めて日本のゼネコン各社が超々高層ビルとか、富士山より高い都市とかを盛んに発表しています。「昔」の集積へのあこがれというか、“懐かしのハイテック”とでも呼ぶべきような感じが、これらのメガロ・アーキテクチャーの計画案にあります。あらゆる場面がボードリヤールのいう“シュミラクル”のようなものとすると、やはり都市というのは、何かこの先あまり変わりようがないのか、変わったとしても、それは常に「懐かしの未来都市」でしかないのか、そういう感じがしてきます。

機能主義と言いつつ今まで全然実現されてこなかった部分を埋めていくことが重要なのではないかと思うんです。

浅田　50〜60年代は巨大な集積への誇大妄想的な情熱というのがあって、日本でもそれこそ丹下研究室の東京湾上都市構想のような巨大プロジェクトがいろいろ打ち上げられた。しかし、70〜80年代は、不況になってそうも言っていられないから、盛り場の一角一角をポストモダンな装いで飾って付加価値を高めていくぐらいしかできなくなった。しかし、80年代の後半に好況になったこともあり、小手先の記号のゲームが飽和する一方で昔ながらのビッグ・プロジェクトの夢が突然復活してきたということもあって、現に黒川紀章が再び東京湾上都市構想を提案したり、ゼネコン各社が空中都市や地下都市を発表したりするようになったわけです。それはしかし、80年代末という時期に非常に強く規定されているのではないか。東京都庁舎は「バブルの搭」だといいますけれど(笑い)、まさにバブルの絶頂で、やたらに地価が高く、金利が安くて、ものすごいことができる。しかし、そのものすごいことというのは、60年代の夢の再燃でしかないというような時代、しかし、バブルが崩壊したあと、じゃ、それを支える経済的・社会的な構造はどうなっているのかと問うたときに、答えははっきりしないんですね。例えば、日本はこれからどんどん人口がふえるとは余り思えない。じゃ、そこにはだれが住むのか。1人ずつの専有面積がものすごく広くなるのか。しかし、それをみんなが負担できるほど所得は上がるだろうか。そういうようなことをいろいろ考えると、ちょっと具体的なイメージが浮かばない。必ずやそういう実験はなされますから、僕はそれに対しては必ずしもネガティブではないんですけれども。

――ゼネコンの立場からみますと、テクノロジーを建築の中でどのように表現していくかで悩んでいるんですが、その点に関してはどうでしょうか。

浅田　造形のレベルで言うと、フォスターにせよロジャーズにせよ、やっぱりマシン・エイジの延長という感じがする。「ハイテックだろう」と言って肩をそびやかしているという感じは否めないと思うんです。むしろこれから問題なのは、形としてマシン・エイジの凄味みたいなものは全然なくても、実はものすごくきめ細かい配慮がなされているということではないか。高級なオフィスでも、たとえばエア・コンディショニングには改善の余地があって、OLが冷え症になったりしないように気流を細かくコントロールするといった課題がある。新しい巨大な梁かなんかを使って、何十メートルもキャンチレバーで突き出ているとかというのがハイテクだとは限らないので、普通の建物だけれども空調に関しては絶対的だということでもいいわけでしょう。今のところ完全に機能主義な話をしているんですけれども、機能主義と言いつつ今まで全然実現されてこなかった部分を埋めていくことが重要なのではないかと思うんです。空調の例で言えば、昔の木造で天井が高くて風鈴でもつってあるような建物のほうが過ごしよかったという声があるわけで、今の状況ではとてもそんな家には住めないけれど、じゃ、ハイ・テクノロジーを使ってそれにぎりぎりまで近づくことはできるかというと、それはあんまり追及されていないんじゃないか。そういう本来的な快適性の追求をもっとやれるんじゃないでしょうか。

鈴木　建築家が何をするべきかというと、環境の整備ということがもちろんあります。同時にテクノロジーを使うものでもあるし、あるいは都市の社会構造にかかわる提案をする立場でもあると思います。モダニスト的な理念に照らしていうと、あるべき建築家像とはどういうものなのでしょうか。

浅田　建築家についてあんまり統一的に役割を決めないほうがいいと思うんです。一方には、アーティストのような建築家がいてもいい。機能から見れば、使いにくいし住みにくい、しかし、絶対的なメッセージを発しているような建築であれば、それは認めていいと思うんです。他方、しかし、技術者としての建築家も欠かすことができない。というか、その場合、シヴィル・エンジニアリングという言葉がありますけれども、もっと言ってソーシャル・エンジニアリングというか、つまり社会システムのデザインまで含めた総体的な問題を解いていく技術者としての建築家というのが必要なので、とりわけ大林組のような大きな会社になると、そういう役割が問わ

基本的に社会性を持った職能なのだから、対話から出発すること、また、そのことを社会に向けて明確に意思表示していくことが重要なんです。

れると思うんです。今までは、建物の社会的な位置づけであるとか、収益性なり何なりといった目標であるとかというのは全部所与であり、それをいかに効率的に満足するかというふうにつくっていったわけですけれども、実際は、建築一つをつくるということの中に、近隣の社会的な環境を変えてしまうとか、あるいはその中で働いている人たちの関係性を変えてしまうとか、そういういろんなことが含まれているわけですから、そういう点に配慮した総合的なエンジニアリングが必要なんですね。少し話がそれますが、本来、ウィトルウィウスまでさかのぼって言えば、建築家というのは、あくまでもアーキテクチャー(公共建築)をつくるものであって、ハウス(家屋)はそれこそ雨露をしのげればそれでよいということだったわけですね。ところが、日本の、特に近代においては、むしろハウスの方で、非常に寛大なクライアント、往々にしてそれは近親者だったりするんですけれども(笑い)、そういうクライアントがいた場合、とにかく設計者がアーティスティックに満足できるところまでやってみようということで、現になかなかいい作品が幾つもつくられてきたのに対し、アーキテクチャーの方は、役所が予算を削るとか、コンテクスチュアリズム一辺倒の無難なデザインに固執するとかいうことで、あんまりいい作品が生まれないという転倒した現象があるわけです。それは必ずしも悪いことではないので、都市の混沌に対して個人としてのクライアントと個人としての建築家が自腹を切って自分なりに納得のできるハウスをつくってそこにたてこもるというのは、それはそれでいいと思うんですけれども、本来のアーキテクチャー、つまり公共建築なり、それに準ずる会社やなんかの建物というのが、余りにも生産性の方に引きずられ過ぎているのは問題です。しかし、このごろ何かというとそれじゃコンペをして外国の建築家を呼んでという、それも結局は名前だけで、実際のアーティスティックなクォリティはあまりないというケースが多いので、困るんですね。やはり普通の公共建築とか会社のビルとかのレベルで、もっとアーティスティックにレベル・アップしていく必要があると思うんです。最近、よく企業メセナなどと言って、企業の文化援助が論じられる。確かに、商売と関係のないところにどんどんお金を出して文化をサポートしていくのはいいことだけれど、それと同時に、本業と結びついたところ、例えば、端的に言って、本社ビルなり支店ビルなりのデザインというところで、その企業の文化水準が問われているということをもっとアピールした方がいいと思うんです。わずか1億か2億の文化援助だけで芸術性をごまかして、しかし、オフィスなり工場なりは見るも無残な生産性一点張りの建物だというケースが多すぎる。これを足もとから崩していく必要があるんですね。





――逆の話になるんですけれども、そういったソーシャルデザインをする上でも、これは絶対やっちゃいけないというタブーみたいなものは何かありますか。

浅田　基本的にタブーはないと思うんですけれども、今の時点であえて言うと、すくなくとも80年代に関する限り、グラビア建築というか、とにかく2，3ヵ月雑誌のグラビアをにぎわせて話題になればそれでいいというふうなデザインが氾濫し過ぎたということがあるので、やっぱり建築家は50年とか100年とか、場合によってはそれ以上の時間の流れに耐え、必要ならどんどんリノヴェートしていけるようなものを作るべきでしょう。フロー経済に居直るべきではないと思います。

モダン・ムーブメントが
思想運動や社会運動と結びついて
展開されていた時期に戻って
考え直さなければいけないという
感じになってきていると思うんです。

鈴木　京都でこういう話をしているわけですが、現在、京都は再開発、駅ビルなど景観問題がマスコミを毎日にぎわしている状況です。京都のような伝統的文化があり、都市文化もあるところでも、経済の論理も入らねばやっていけない。それから都市の近代化というか、あるいはポスト近代化みたいな論理も入ってこざるを得ない。そうして都市が変貌していかざるを得ないという、こういう状況に対してご意見なりを伺いたいんですが。

浅田　巨大資本なり、それをクライアントとした巨大なゼネコンなりが、何でもいいから大きな新しいものを立てて都市を破壊していくという固定観念が、広く大衆の中に根づいてしまっている。高度成長期にはそこらじゅうに画一的な近代建築が建ち、70～80年代にはポストモダンと称する奇妙きてれつなビルがあちこちに建ち、その積み重ねで、ぬぐいがたい先入観が人々の心の中にわだかまってしまったわけです。しかし、じゃ、とにかく昔の町並を保存すればいいのか。京都で言えば、高さが31メートル以内なら何でもいいのか。しかし、その31メートル以下の醜悪なビルがそこらじゅうに立ち並ぶことによって京都の景観は完膚無きまでに破壊されているわけですね。本来は、京都駅にせよホテルにせよ、別に高層であろうが何であろうが、ちゃんと全体のコンテクストに配慮し、しかも、それ自体としてすぐれたデザインを持った建築であれば、何も悪いことはないのであって、むしろそのことによって都市が新しく活性化される可能性もあるわけです。むしろ、いま欠けているのは、そういうことを社会に向けて説得していくことだと思うんです。

戦後ずっと、物言わぬ資本の力が都市を破壊してきたというある種の恐怖が住民の側にあって、それはもうしようがないわけですが、その結果、守るべきものなんかもうないのに、その幻影にすがって、何でもいいから31メートル以上の物は建てさせないというような無意味な保守主義が生まれてしまったのは問題です。それを掘り崩していくというのは、狭く言うと広報活動、広く言うと、建築は対話から始まるという姿勢を社会に向けて徹底していくことだと思うんです。今まで、建築とか、あるいは土木まで含めて、あまりにも対話がなさすぎた。しかし、さっき言ったように、それらは、シヴィル・エンジニアリングというか、ソーシャル・エンジニアリングというか、基本的に社会性を持った職能なのだから、対話から出発すること、また、そのことを社会に向けて明確に意思表示していくことが重要なんです。

最初に言ったことに戻りますけれども、50～60年代のアメリカ型のモダニズムと、70～80年代の、特に日本なんかに典型的に見られたポストモダニズムが飽和してきて、戦前の時期、モダン・ムーヴメントが思想運動や社会運動と結びついて展開されていた時期に戻って考え直さなければいけないという感じになってきていると思うんです。そういう意味でも、やはり勝手に職人としてだまって物だけつくっていくということでは済まない、もっといろんな領域の人々との対話の中で新しいものをつくったり、つくり直したりしていかなければならなくなっていると言えるんじゃないでしょうか。

――今日はどうもありがとうございました。

浅田　彰（あさだ　あきら）
1957年　神戸市生まれ
1981年　京都大学大学院経済学研究科修了
　　京都大学人文科学研究所助手を経て、
現在　京都大学経済研究所助教授
　　経済学、社会思想史
主な著書　「構造と力」「逃走論」「ヘルメスの音楽」
　　「ダブル・バインドを越えて」　その他

鈴木隆之（すずき　たかゆき）
1961年　千葉市生れ
1985年　京都大学工学部建築学科卒業
1987年　群像新人文学賞受賞
現在　京都精華大学講師、建築家/小説家
主な著書、作品　「ポートレイト・イン・ナンバー」（小説）
　　「建築批判」（評論）
　　「大阪平和資料館コンペ案」（建築プロジェクト）



大林組本店設計部/福本早苗、林浩二
　　大塚慶子、奥山弘一

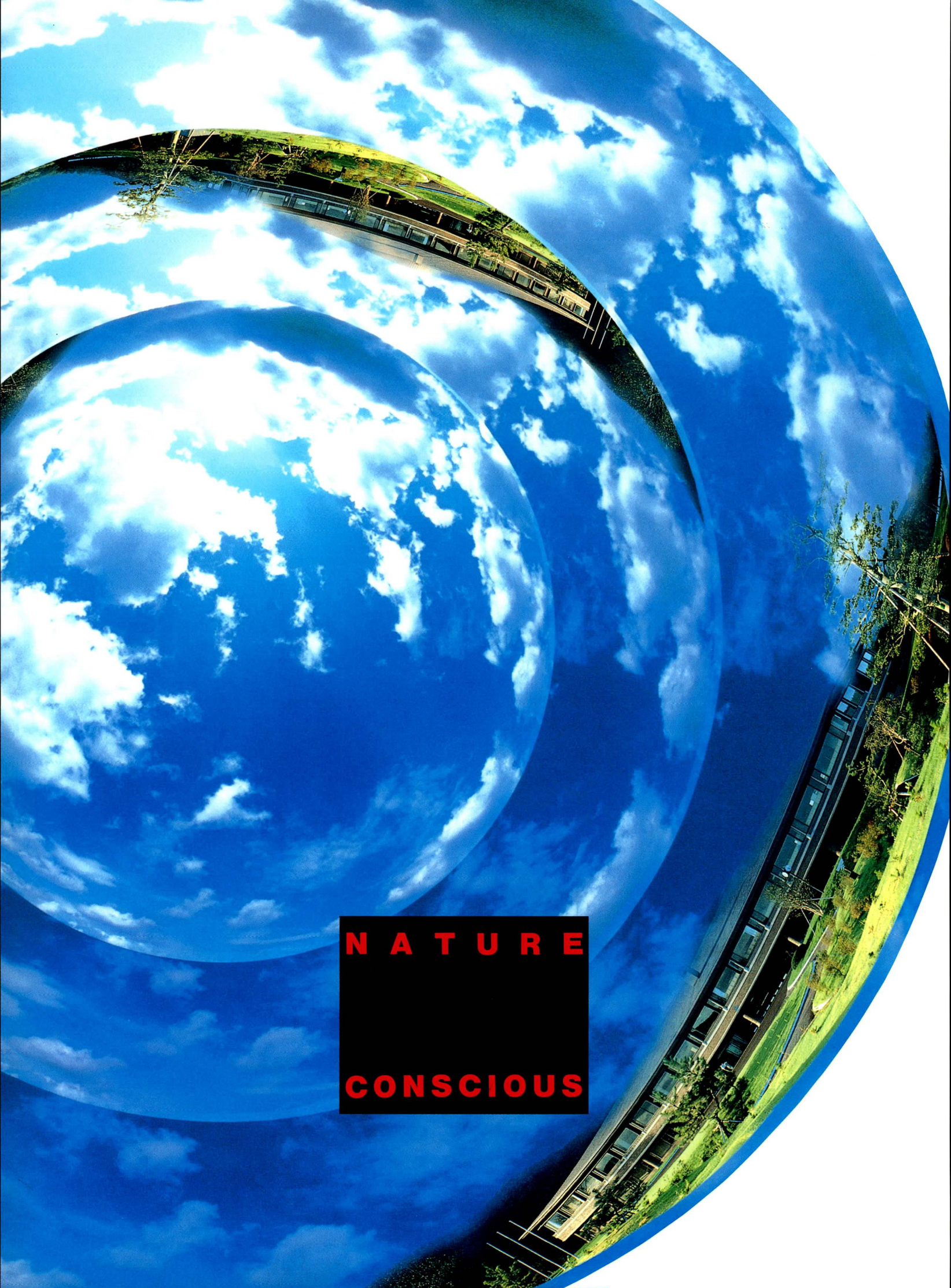
と　き　1991年7月22日
ところ　京都ロイヤルホテル会議室


HOLONIC CRUISE
都市游泳



人、自然、建築 …… それぞれ独立した存在でありながら互いに影響し、テンションを保ち、都市として機能する。 建築をみるとき、都市を構築する様々な 要素（エレメント） との関係を切り取ることで見えてくるものがある。
都市を気ままに泳いでみよう。フラッシュバックする印象をひとつひとつあつめてみよう。21世紀を目前に生きる生活者の視点で、感動を求める鑑賞者の視点で、地球をみつめるグローバルな視点で建築を眺めるとき、都市は発見の玉手箱である。

NATURE CONSCIOUS
FEEL COMFORTABLE
NEO STANDARD
ART AND DESIGN


NATURE
CONSCIOUS

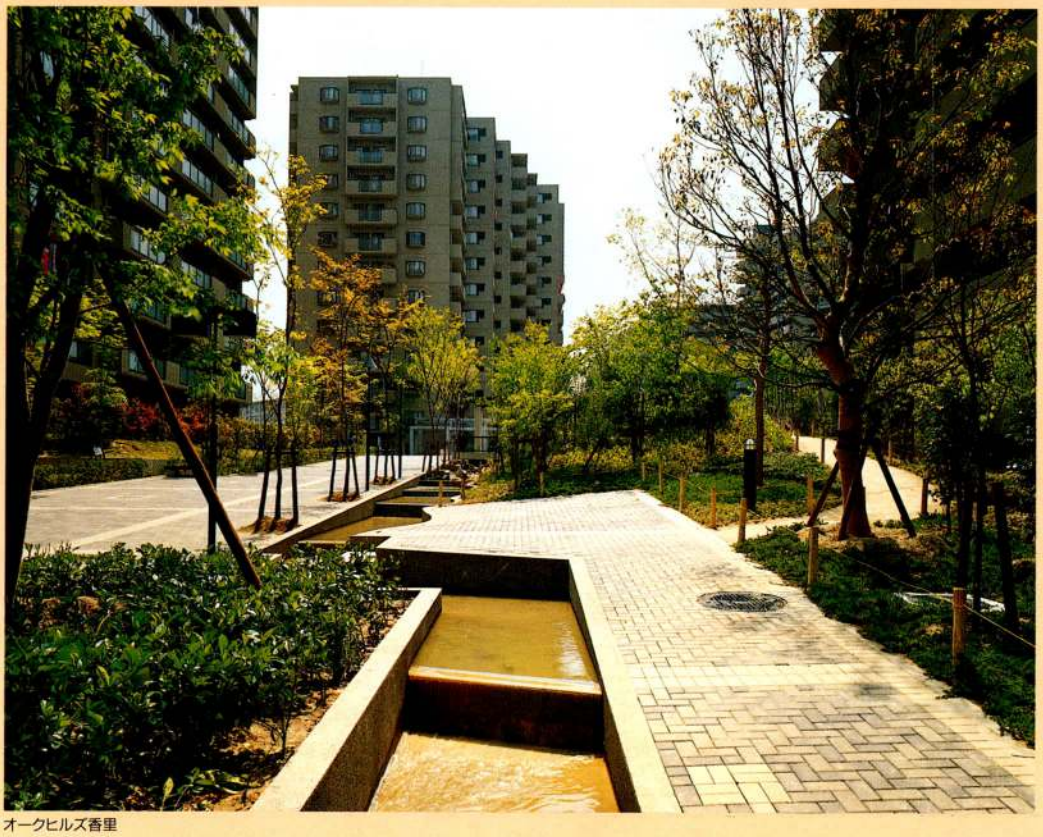


福崎東洋ゴルフ倶楽部クラブハウス

地球とハーモナイズ

空間を切り取るものが建築なら、それは地球、すなわち自然の一部である。自然をコーディネイトするのではなく自然と共振（ハーモナイズ）するとき心地よい空気が流れる。





花と、緑と、小川のせせらぎ……
人と小鳥が友達になる野鳥(やちょう)の森。

オークヒルズ香里

緑と共に育まれる街。
やがて豊(ゆた)かな故郷(ふるさと)となる。



鷹尾山けやき坂



日生ニュータウン サウンズヒル

季節のささやきに耳を傾けて、風景の一部になる心地よさを発見。



桜宮リバーシティ・ウォーター・タワー・プラザ

緑が目に優しい、川を渡る風が心地よい。リゾート性が加味された豊かな都市居住テイスト。



桜宮リバーシティ・ウォーター・タワー・プラザ



奈良スポーツ振興カントリー倶楽部クラブハウス

古都奈良のイメージを今に伝える本瓦葺きの大屋根。



奈良スポーツ振興カントリー倶楽部クラブハウス

伝統の街並に映える端正な存在感。
切妻屋根のシルエットが
東山の峰々と重なる。



明治生命 京都パストゥール研究所

史跡『適塾』をつなぐ和風ゲート。
ビジネス街の閑静なポケットパークへのいざない。



日本生命今橋ビル



スタンフォード日本センター

古都に生まれた新しい文化交流の場。日本的風景に異国の感性が溶けこむ。



スタンフォード日本センター

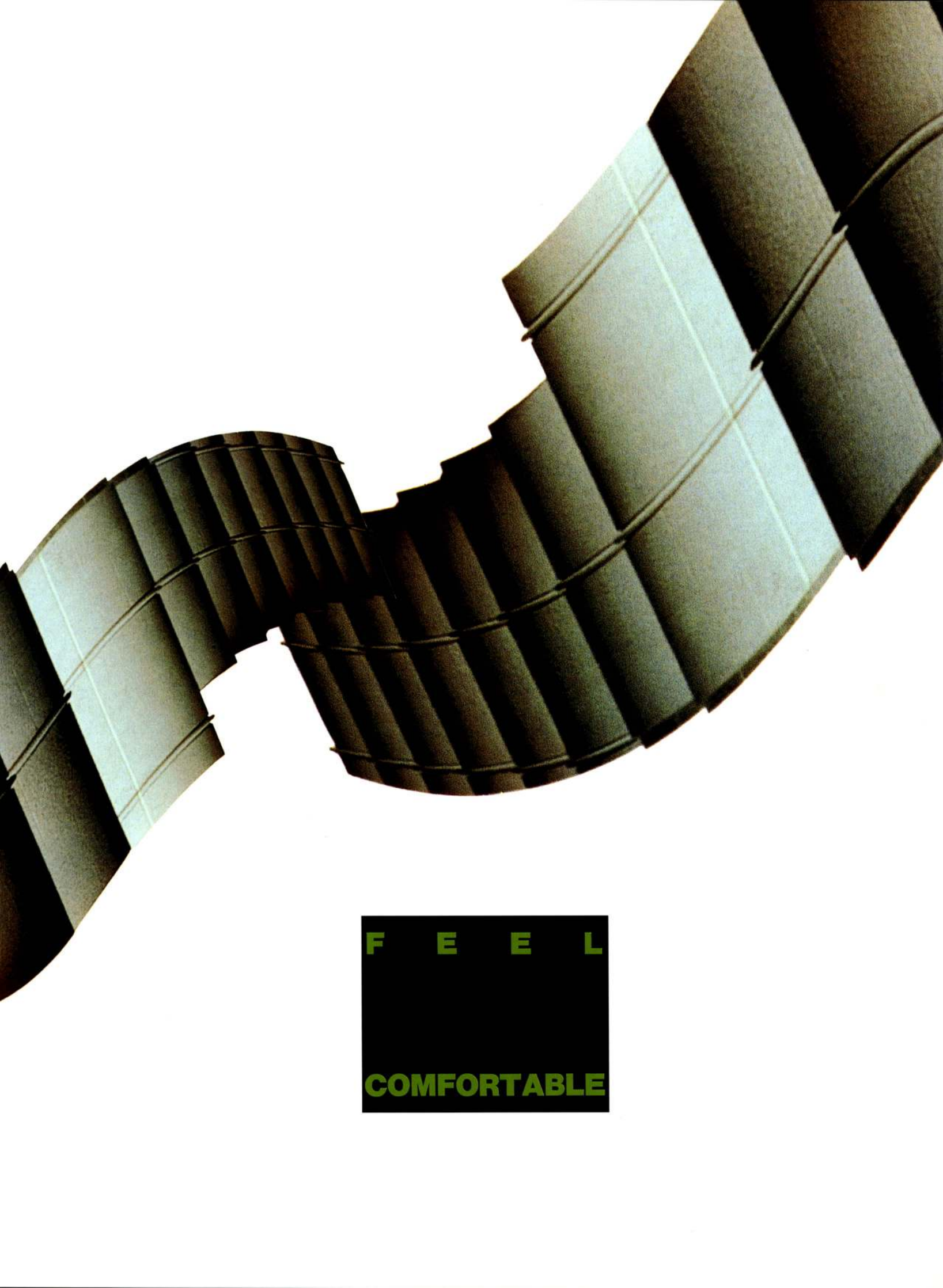
時間と空間のホスピタリティ



四天王寺国際仏教大学1号館・2号館

住み、働き、遊び、生きる——
建築はそのステージであり、人が空気と一体となり夢中になれる時間・空間を創る。快適な環境は人を優しくする。




F E E L
COMFORTABLE



四天王寺国際仏教大学1号館・2号館

回廊をイメージするピロティ、渡り廊下による "透けた"空間構成——歴史の風が流れる。



PATIO DE ROBLE 大林組御影社宅

シンボルツリーのある中庭はプライベートとパブリックの接点。木もれ日の中でふれあいが生まれる。



PATIO DE ROBLE 大林組御影社宅



東洋ホテル(リノベーション)

光と陰、水と緑——シルクロードを想わせる悠久の時間が流れる。



島津メディカルプラザ

重なり合う機能を視覚的に結ぶアトリウム。心と身体がリラックスするくつろぎの空間。



島津メディカルプラザ



ARCUS(アルカス)

光に浮かぶファサード、広場に影を落とす松林。シャープでしなやかなフォルムが街のざわめきと共鳴する。



ARCUS(アルカス)



銀水荘別館 兆楽

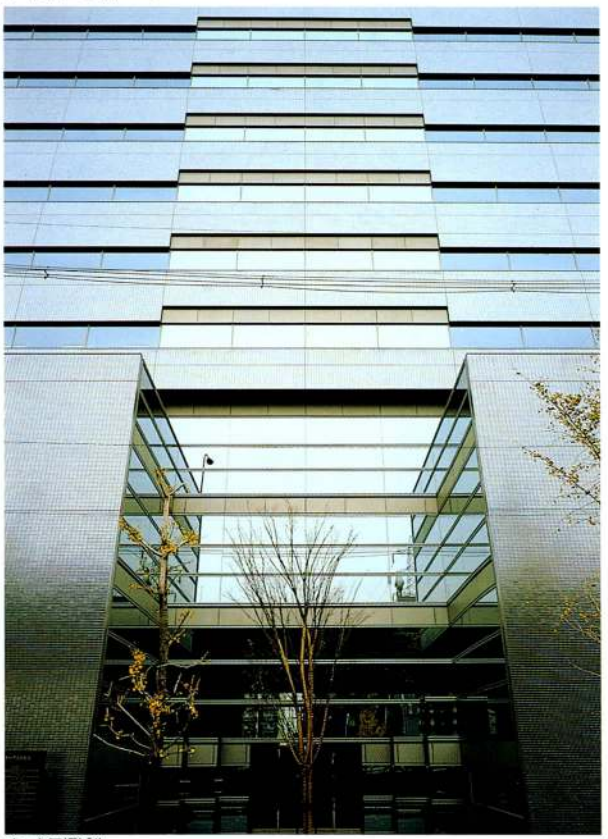
石と木とじゅらく壁がおりなす簡素な和の世界。喧噪を離れたやすらぎの時間が広がる。



銀水荘別館 兆楽

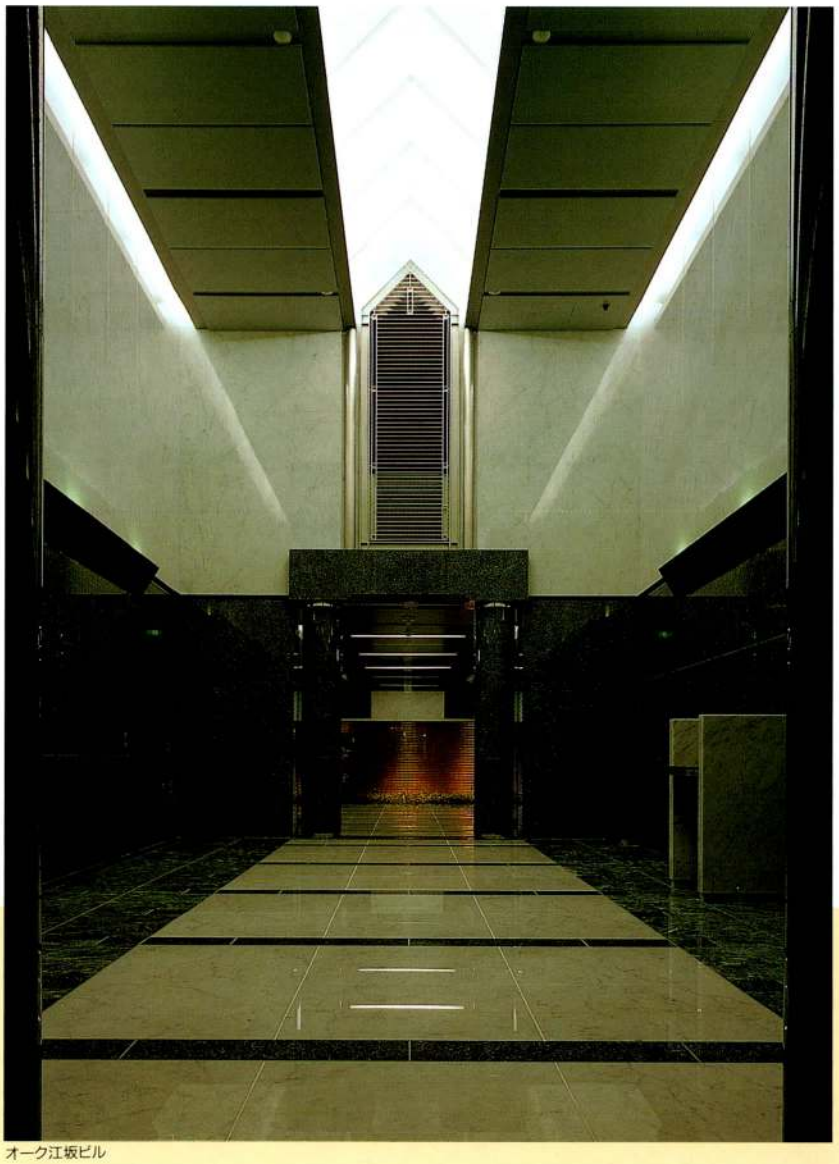

N E O
STANDARD

溢れる情報の中から、真に必要なものだけを選り、磨き、昇華させる——ミニマリズムの世界がここに。確かな空間は、いかなる装飾よりも力強く存在感を放つ。



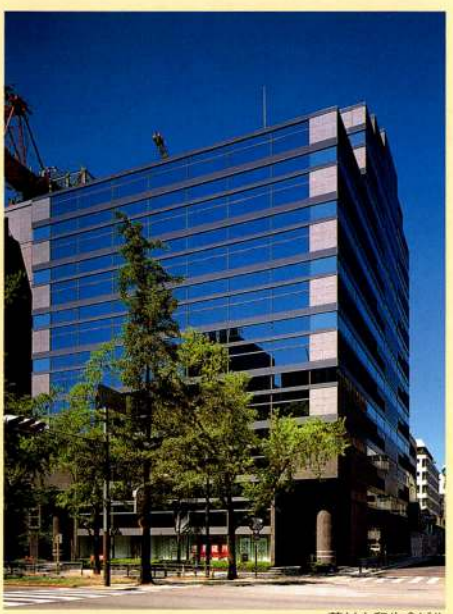
オーク江坂ビル

機能と美のバランス



街並に開かれたポケットプラザから、
吹き抜けのあるエントランスホールへ――、
アメニティスポットのシークェンス。

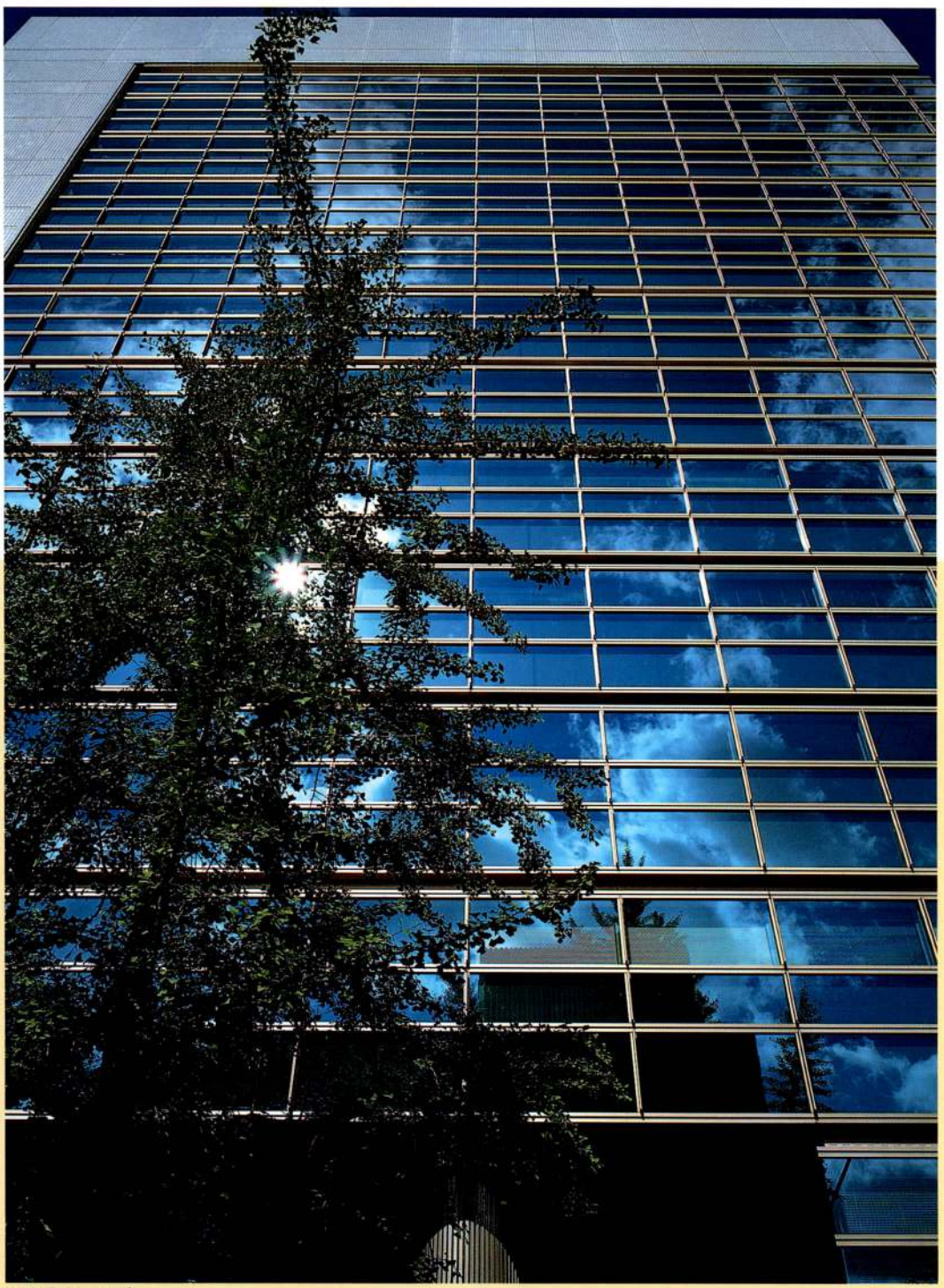
オーク江坂ビル



アルミパネルとガラスが
つくるシャープな壁面構成。
御堂筋のいちょう並木が美しく映える。

藤村大和生命ビル

インテリジェントビルとしてのシステマティックな構成。カーテンウォールに映る空の表情までもデザインしている。



第三松豊ビルディング



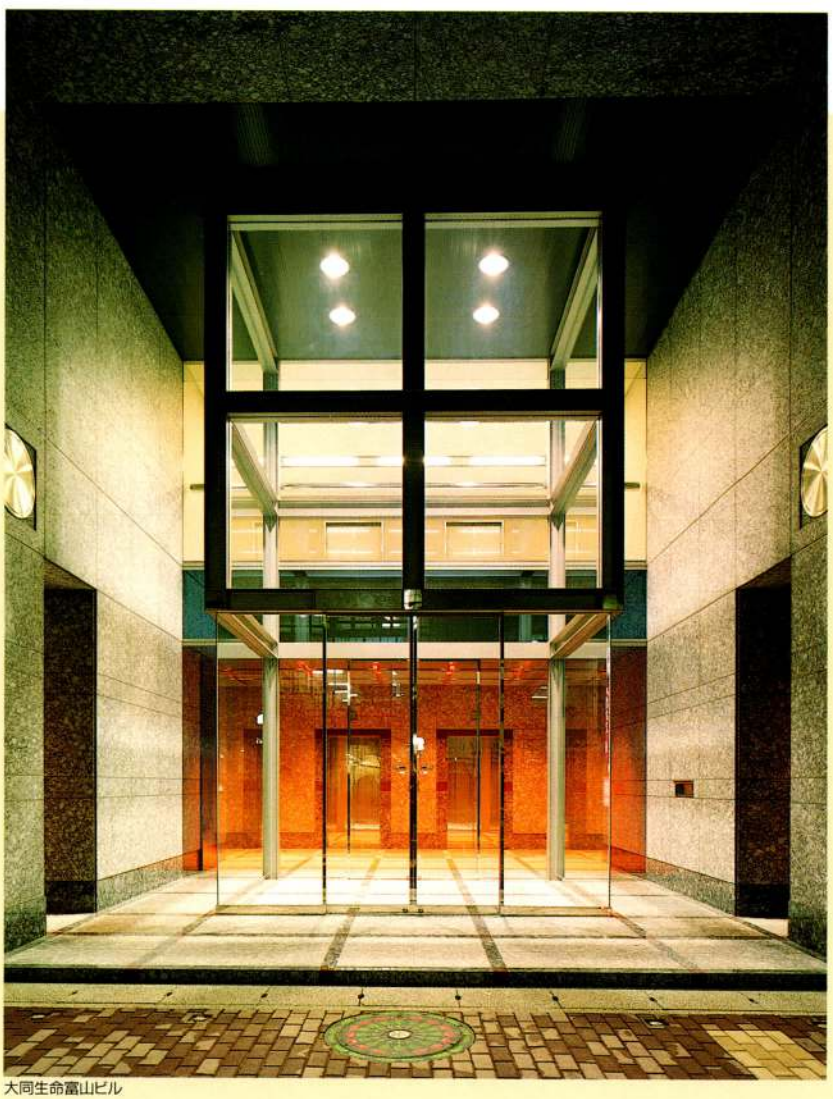
ニッセイ高知本町ビル

南国の青い空と緑豊かなクスノキを映すミラーガラス。ハイテクとアメニティの表現の結晶。



大同生命富山ビル

雪国の雁木を想わせるピロティ、雁行するカーテンウォール。石とガラスの緊張感。



大同生命富山ビル



武庫川女子大学薬学部

アプローチとともにシルエットを変化させる建築群。シックなタイル壁の連なりがアカデミックな空気を創る。



武庫川女子大学薬学部

リズミカルな窓とアクセントカラーが
アート感覚を演出するハイタッチ・ファクトリー。



アサヒビール西宮工場装製場



アルミパネルとガラスが交叉して織りなす
ハイテクイメージの世界。

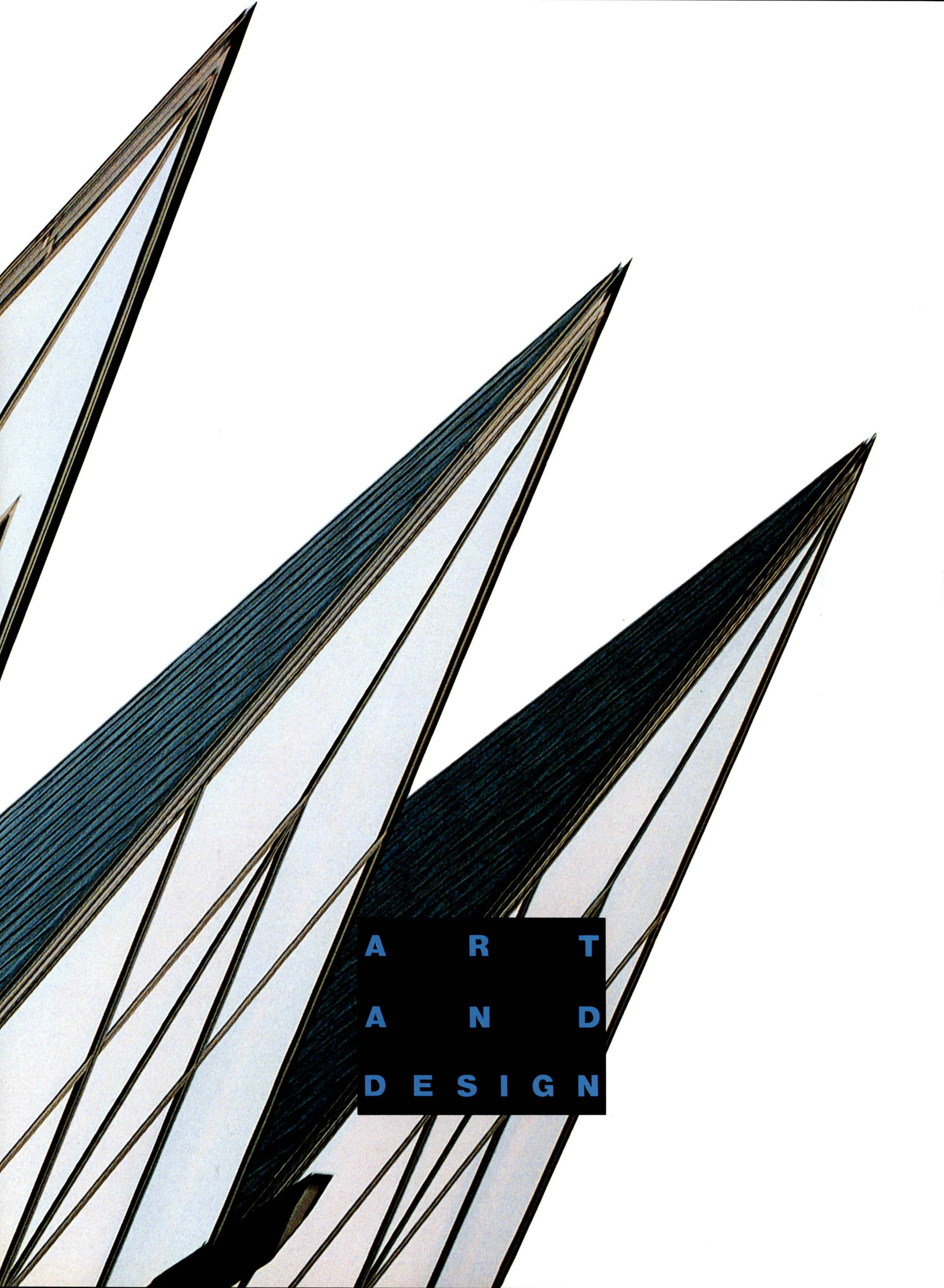
テクノセンター長岡

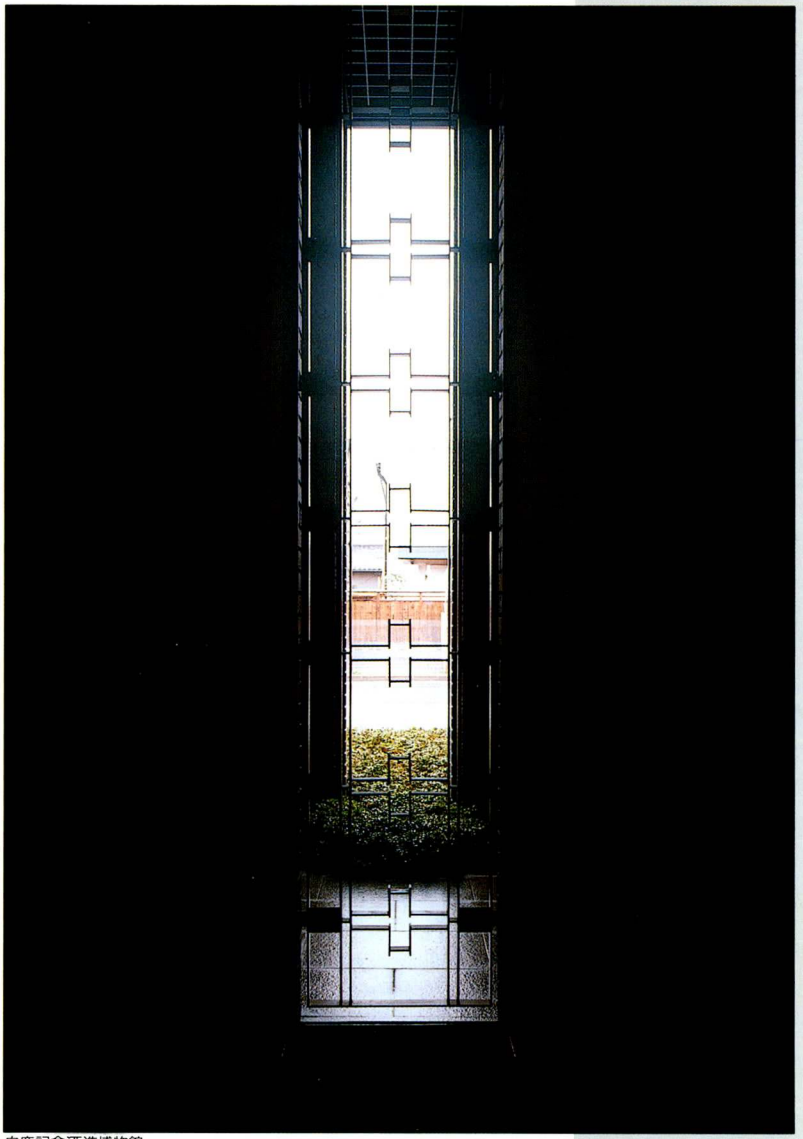
時代と呼吸するスタイル



トヨタカローラ南海第二阪和岸和田営業所

時代のコンセプトを映し出したカタチはイメージをかきたてメッセージを送る。豊饒な表現はランドマークとなり街のモニュメントとなる。


ART
AND
DESIGN

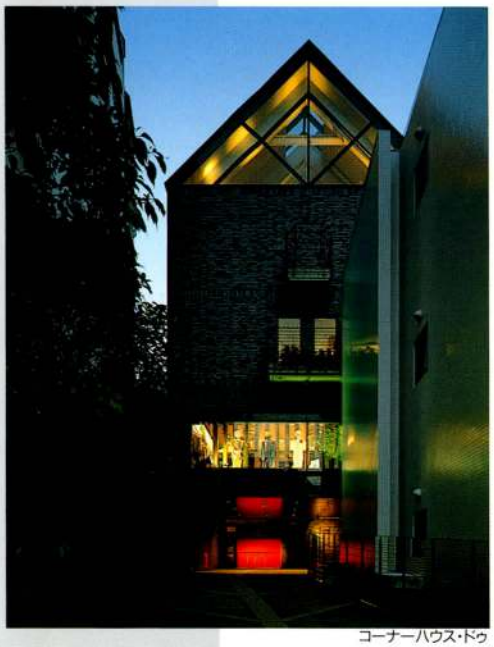


白鹿記念酒造博物館

積み重ねられた伝統を受け継ぎ伝える。スリットから差し込む光もアートとなる静寂のミュージアム。

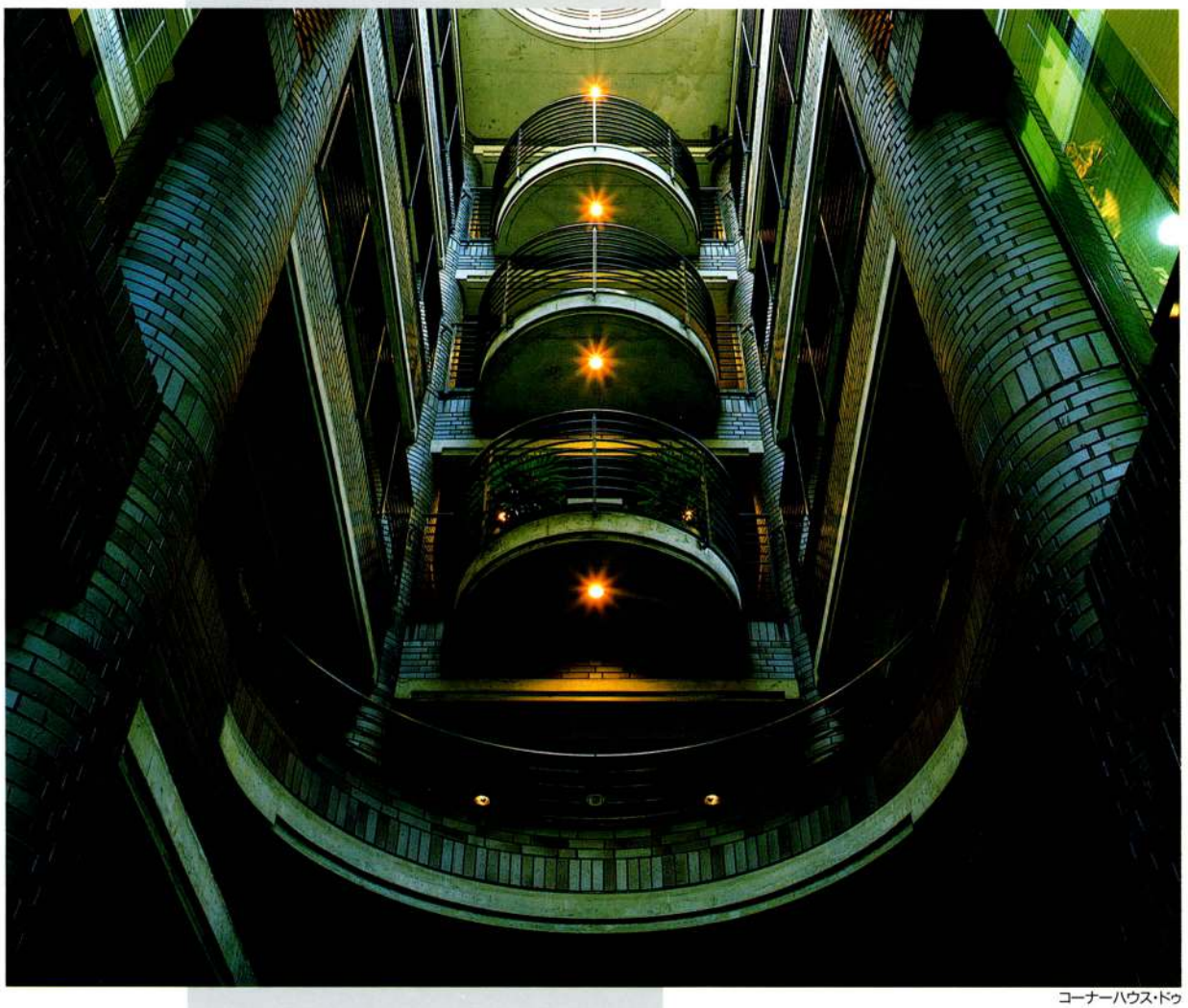


白鹿記念酒造博物館

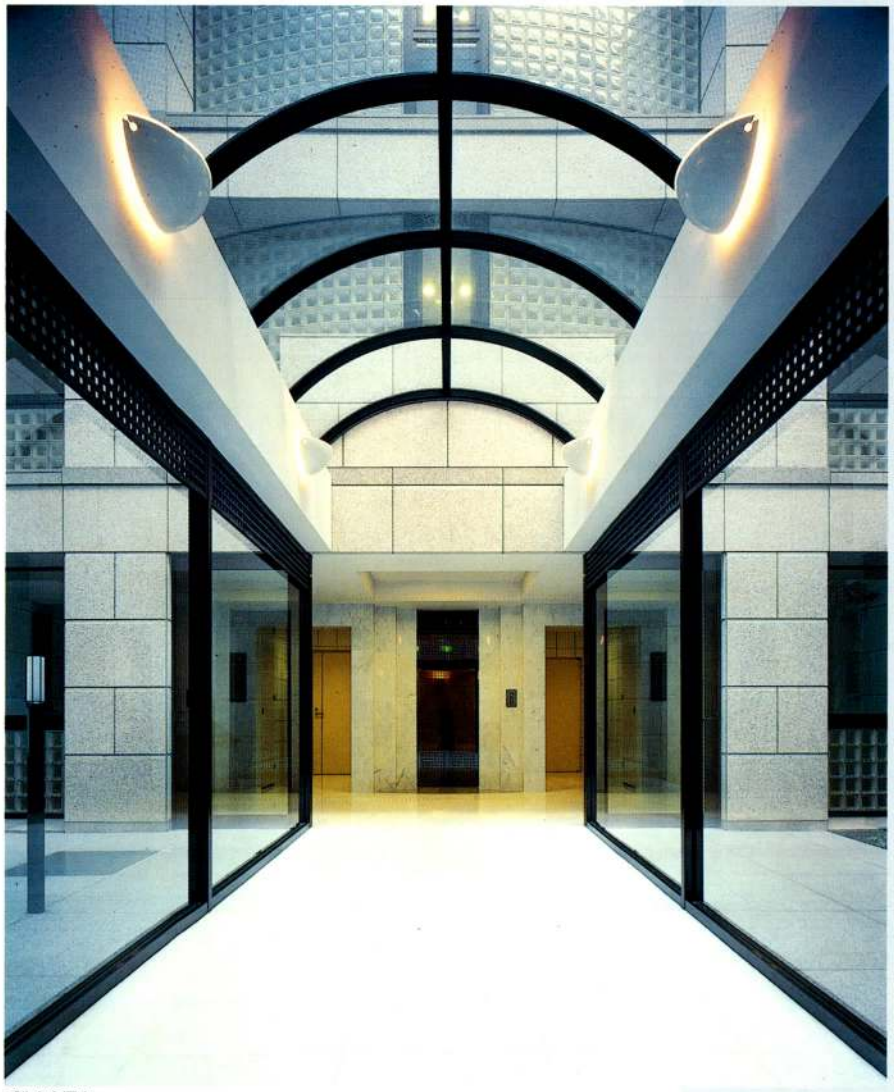


コーナーハウス・ドゥ

垂直に貫く光庭、周囲にめぐらした回廊。"光"・"風"・"緑"まで北野町の香り、洗練の技巧（ギミック）。

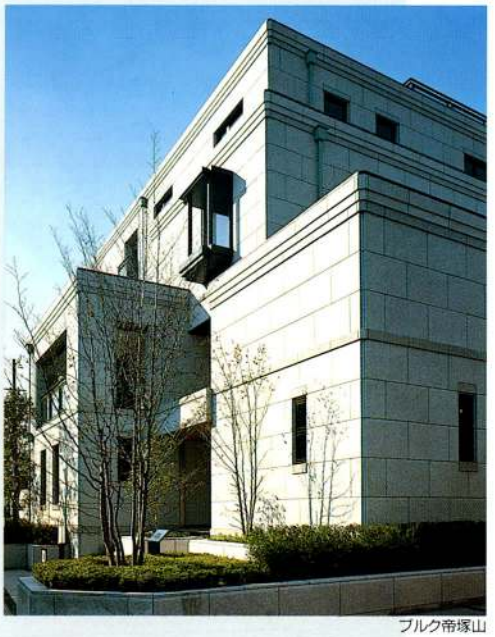


コーナーハウス・ドゥ



ブルク帝塚山

静謐で端正なたたずまい。石の素材感を生かしたディテールが時とともに深みを増す。



ブルク帝塚山



SHIRAKAWA RESIDENCE

異人館建ち並ぶ北野町。旧建物と調和した街並み風景にモダンデザインが生きる。

SHIRAKAWA RESIDENCE



古典芸能の裏に秘められた演出手法。
現代に甦る幽玄の世界。



財団法人大槻清蘭会能楽堂

道頓堀のレトロとモダンを共有する
アミューズメントスクエア。

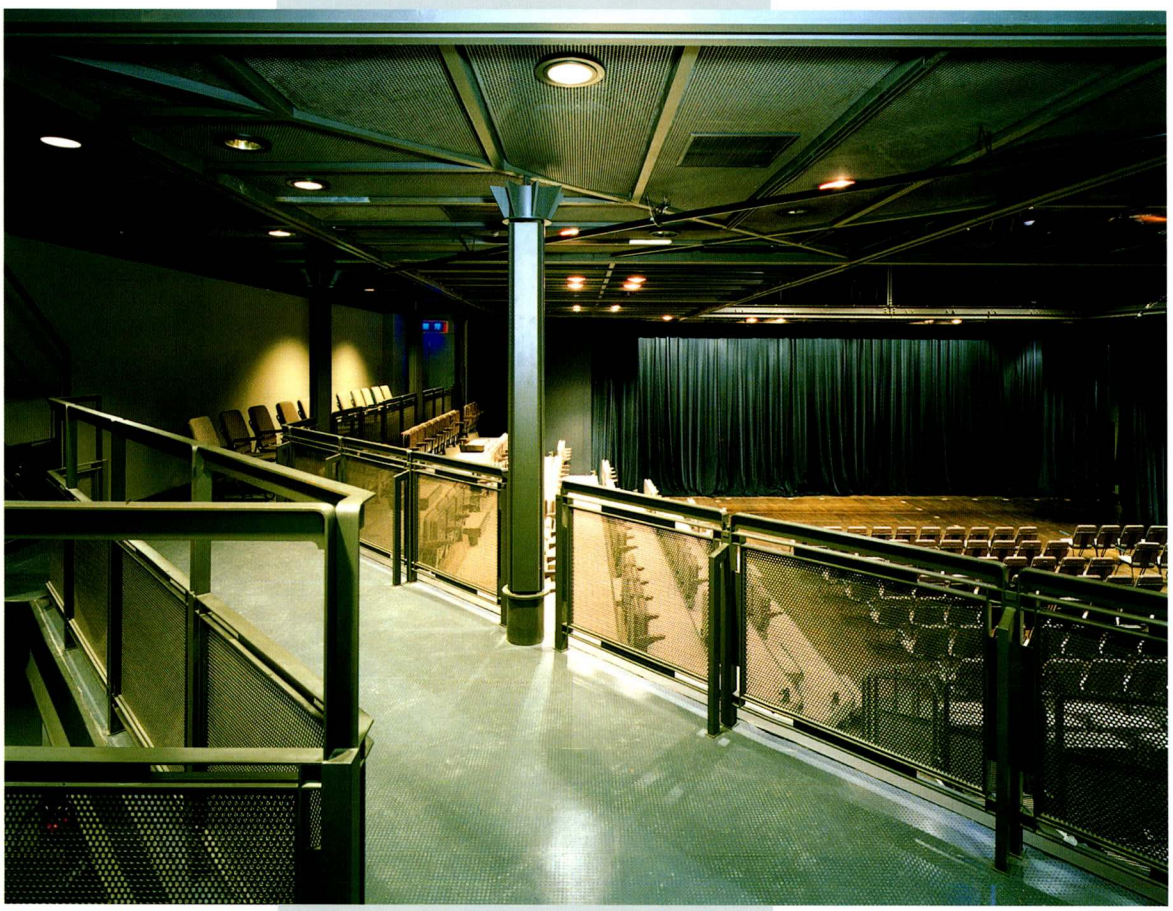


角座

使う、演じる、観る、全てを追求した
表現空間をプロデュース。
より美しく、より感動的に――――――。



近鉄劇場



時代のアート&パフォーマンス、
文化と情報を発信する
商業空間のマルチホール。

近鉄アート館

英国の気品と風格とダンディズムの香り。
しばし静寂の時を憩う。



キングスロードゴルフクラブ クラブハウス

石造りの壁と白いタイルの調和。
大正ロマンの面影が今に伝わる。

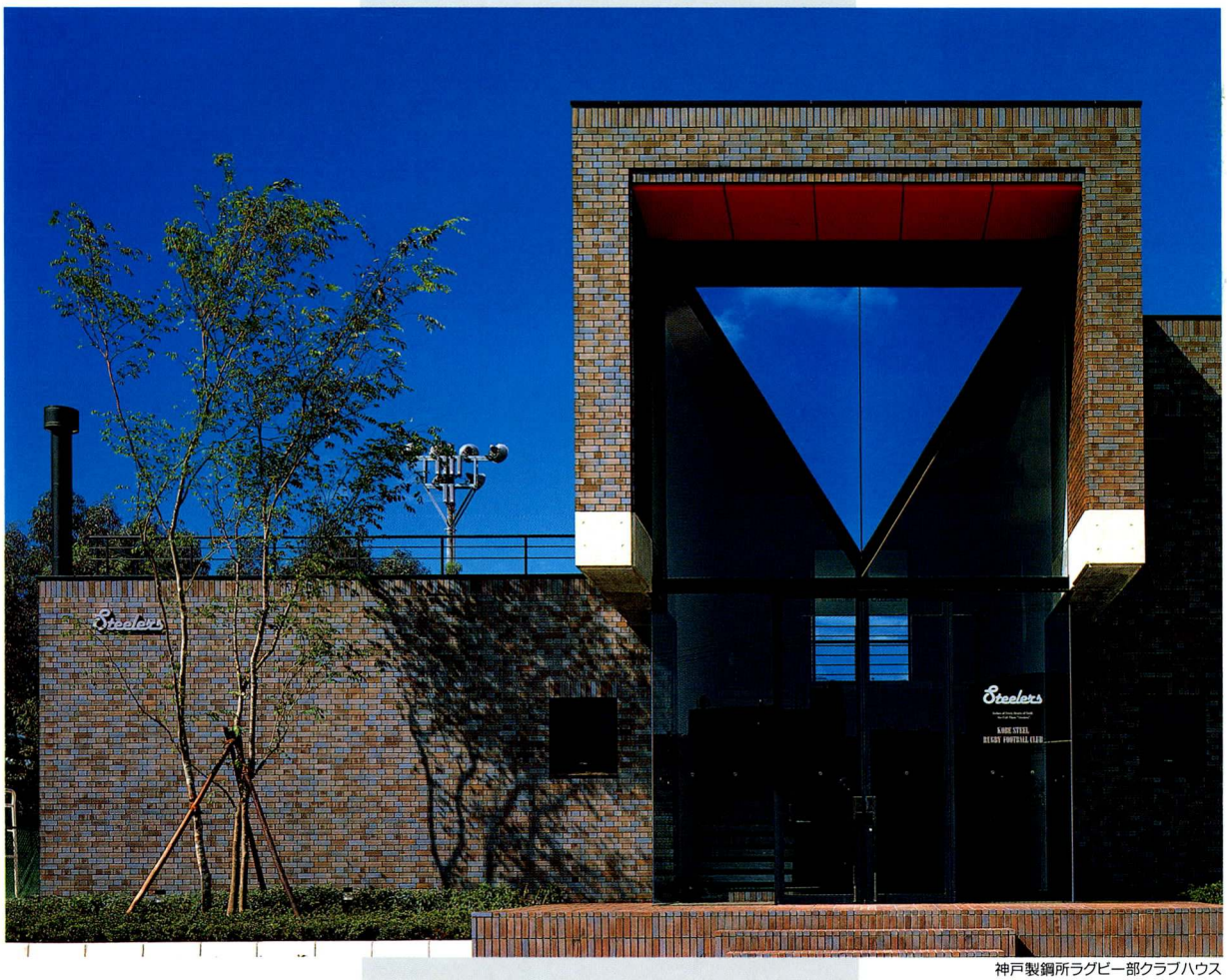


日本生命京都三条ビル

尖塔、切妻屋根、量感（マッス）の変化、
カラフルな色彩……
新しい街のランドマーク。



ポラール　一番館



神戸製鋼所ラグビー部クラブハウス

レンガ色の壁が伝統スポーツの風格を漂わせる。男達のロマンと栄光のシンボル。

OBAYASHI OFFICE GUIDE

“機能空間としてのオフィス”から
“意識空間としてのオフィス”へ、

REFRESH CORNER

雑誌を読んだり、談笑をしたり、ビデオをみたり……フル回転する頭脳をリフレッシュする、安らぎとくつろぎのスペース。

DESIGN OFFICE

設計部の核となる創造の場。アイデアをカタチにする作業は、孤独で、精神の緊張と集中が要求される。そんなあらゆる困難と、やり遂げたときの無上の喜びとが交錯するクリエイティブスペース。

COUNCIL ROOM

講演会、シンポジウム、勉強会など多様な用途に対応する大会議室。自己啓発の場、充電の場としても活用できる。

MEETING CORNER

インフォーマルな打ち合わせが行われる、生きた情報交換とコミュニケーションの場。

PRESENTATION ROOM

TV会議やクライアントへのプレゼンテーション……出席者ひとりひとりが主役となって、熱いドラマが繰り広げられる。

RECEPTION ROOM

それぞれの目的や、感性に合わせてデザインされた応接室。

CAD ROOM

Man-Machine Communicationによって、図面、パース、景観シミュレーションなどの膨大な業務がここで処理される。

R EFRESH CORNER



D ESIGN OFFICE



C OUNCIL ROOM



M EETING CORNER



PRESENTATION ROOM





WAITING ROOM

RECEPTION ROOM





CAD ROOM



STAFF

Editorial Planning
大林組
藤縄 正俊
田中 弘成
本間 利雄
宮治 長一
福本 早苗
林 浩二
大塚 慶子
奥山 弘一
梅津 豊
若林 敏幸

Creative Director
浅野 直美

Art Director
山本 浩幸

Copywriting
クリエイティブ フリービー

Design & Layout
ピカソヴィジュアル開発所

Super Creative Computer Photo
株東京インテリジェントカラー

Photographers（五十音順）
家田 哲
SS大阪
SS北陸
織田 努
川元 斉
古田 雅文
島 修一
田中 昌彦
名執 一雄
長谷川 正男
東出 清彦
山本 嘉實成

東洋ホテル㈱提供
松下精工㈱提供

WORKS LIST

福崎東洋ゴルフ倶楽部クラブハウス
所在地　兵庫県神崎郡
建築面積　2,715㎡
延床面積　5,343㎡
構造規模　RC、S・B1、2F
竣　工　1991年
用　途　ゴルフクラブハウス

オークヒルズ香里
所在地　大阪府寝屋川市
建築面積　10,304㎡
延床面積　81,420㎡
構造規模　SRC・B1、15F
竣　工　1990年
用　途　集合住宅

鷹尾山けやき坂
所在地　兵庫県川西市
敷地面積　1,310,000㎡
計画人口　10,000人(2,500戸)
分譲開始　1984年
用　途　住宅団地

日生ニュータウン　サウンズヒル
所在地　兵庫県川辺郡
建築面積　14,431㎡
延床面積　67,664㎡
構造規模　RC・B1、9F
竣　工　1991年
用　途　集合住宅

桜宮リバーシティ・ウォーター・タワー・プラザ
所在地　大阪市
建築面積　5,746㎡
延床面積　53,714㎡
構造規模　RC・B1、41F
竣　工　1992年
用　途　集合住宅

奈良スポーツ振興
カントリー倶楽部クラブハウス
所在地　奈良市
建築面積　4,450㎡
延床面積　6,540㎡
構造規模　RC、S・2F
竣　工　1988年
用　途　ゴルフクラブハウス

明治生命京都パストゥール研究所
所在地　京都市
建築面積　887㎡
延床面積　3,545㎡
構造規模　RC・B1、5F
竣　工　1988年
用　途　事務所、研究所

スタンフォード日本センター
所在地　京都市
建築面積　464㎡
延床面積　1,477㎡
構造規模　RC・B1、2F
竣　工　1989年
用　途　研究所

日本生命今橋ビル
所在地　大阪市
建築面積　1,054㎡
延床面積　16,810㎡
構造規模　S、SRC・B2、15F
竣　工　1985年
用　途　事務所

四天王寺国際仏教大学1号館・2号館
所在地　大阪府羽曳野市
建築面積　3,266㎡
延床面積　10,222㎡
構造規模　RC、S・B1、4F
竣　工　1990年
用　途　大学

PATIO DE ROBLE 大林組御影社宅
所在地　神戸市
建築面積　558㎡
延床面積　1,257㎡
構造規模　RC・3F
竣　工　1990年
用　途　社宅

東洋ホテル(リノベーション)
所在地　大阪市
建築面積　3,020㎡
延床面積　29,924㎡
構造規模　SRC・B3、16F
竣　工　1987年
用　途　シティホテル

島津メディカルプラザ
所在地　京都市
建築面積　1,588㎡
延床面積　5,758㎡
構造規模　SRC・5F
竣　工　1990年
用　途　診療所、事務所

ARCUS(アルカス)
所在地　兵庫県西宮市
建築面積　2,048㎡
延床面積　5,292㎡
構造規模　SRC、S・B1、2F
竣　工　1991年
用　途　フィットネスクラブ、店舗

銀水荘別館　兆楽
所在地　神戸市
建築面積　1,595㎡
延床面積　5,446㎡
構造規模　RC・6F
竣　工　1985年
用　途　旅館

オーク江坂ビル
所在地　大阪府吹田市
建築面積　1,024㎡
延床面積　8,637㎡
構造規模　S、SRC・10F
竣　工　1987年
用　途　事務所

藤村大和生命ビル
所在地　大阪市
建築面積　792㎡
延床面積　9,660㎡
構造規模　S、SRC・B2、11F
竣　工　1990年
用　途　事務所

第三松豊ビルディング
所在地　大阪市
建築面積　1,891㎡
延床面積　23,835㎡
構造規模　S・B2、14F
竣　工　1986年
用　途　事務所、美術館

ニッセイ高知本町ビル
所在地　高知市
建築面積　521㎡
延床面積　4,004㎡
構造規模　SRC・8F
竣　工　1990年
用　途　事務所

大同生命富山ビル
所在地　富山市
建築面積　750㎡
延床面積　6,960㎡
構造規模　SRC・9F
竣　工　1990年
用　途　事務所

武庫川女子大学薬学部
所在地　兵庫県西宮市
建築面積　5,126㎡
延床面積　22,427㎡
構造規模　RC・B1、5F
竣　工　1987年
用　途　大学

アサヒビール西宮工場装製場
所在地　兵庫県西宮市
建築面積　36,302㎡
延床面積　70,915㎡
構造規模　S、SRC・4F
竣　工　1990年
用　途　工場

テクノセンター長岡
所在地　京都府長岡京市
建築面積　5,398㎡
延床面積　38,814㎡
構造規模　S、RC・B1、7F
竣　工　1990年
用　途　研究所

トヨタカローラ南海第二阪和岸和田営業所
所在地　大阪府岸和田市
建築面積　559㎡
延床面積　505㎡
構造規模　S・1F
竣　工　1984年
用　途　ショールーム、営業所

白鹿記念酒造博物館
所在地　兵庫県西宮市
建築面積　1,235㎡
延床面積　2,056㎡
構造規模　RC・2F
竣　工　1982年
用　途　博物館

コーナーハウス・ドゥ
所在地　神戸市
建築面積　432㎡
延床面積　2,078㎡
構造規模　RC・B1、5F
竣　工　1987年
用　途　店舗

ブルク帝塚山
所在地　大阪市
建築面積　660㎡
延床面積　2,859㎡
構造規模　RC・B1、5F
竣　工　1989年
用　途　集合住宅

SHIRAKAWA RESIDENCE
所在地　神戸市
建築面積　956㎡
延床面積　5,183㎡
構造規模　RC・B2、4F
竣　工　1989年
用　途　集合住宅

角座
所在地　大阪市
建築面積　1,321㎡
延床面積　7,034㎡
構造規模　S、SRC・B1、5F
竣　工　1986年
用　途　映画館、店舗

財団法人大槻清韻会能楽堂
所在地　大阪市
建築面積　862㎡
延床面積　1,623㎡
構造規模　RC・B1、3F
竣　工　1983年
用　途　劇場

近鉄劇場
所在地　大阪市
建築面積　1,625㎡
延床面積　8,487㎡
構造規模　RC、S・B1、4F
竣　工　1985年
用　途　劇場

近鉄アート館
所在地　大阪市
延床面積　1,692㎡
構造規模　SRC
竣　工　1988年
用　途　劇場・展示場

日本生命京都三条ビル
所在地　京都市
建築面積　506㎡
延床面積　2,585㎡
構造規模　RC・6F
竣　工　1983年
用　途　事務所

キングスロードゴルフクラブ　クラブハウス
所在地　兵庫県美嚢郡
建築面積　2,722㎡
延床面積　4,946㎡
構造規模　RC、S・3F
竣　工　1991年
用　途　ゴルフクラブハウス

ポラール　一番館
所在地　神戸市
建築面積　2,825㎡
延床面積　9,287㎡
構造規模　RC・B1、4F
竣　工　1990年
用　途　店舗

神戸製鋼所ラグビー部クラブハウス
所在地　神戸市
建築面積　395㎡
延床面積　592㎡
構造規模　RC・2F
竣　工　1989年
用　途　クラブハウス

構造の頁

197 ノンウエルド鉄骨によるシステム建築

牧野　俊雄

SNビルディングは"Sumitomo Non-weldビルディング"の略称であり、外壁の工場生産比率を極力高め、建設現場における工程削減と工期短縮を可能にするとともに、外壁工事において外部足場を使用しないことによる敷地の有効利用等ビル建設の合理化に主眼を置いて開発されたシステム建築である。

この工法は中高層の事務所・店舗ビルを対象としており、トータルシステム建築として構造、外壁、設備、内装等のサブシステムからなっている。

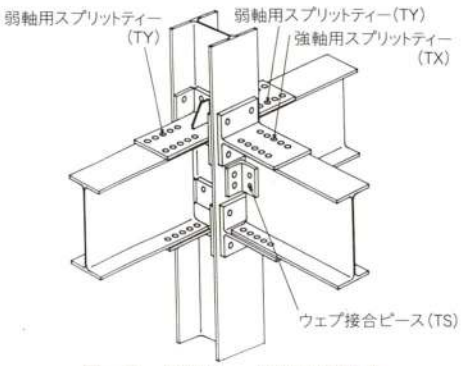
以下、この工法で使用している構造システムの特長について説明する。

構造サブシステム

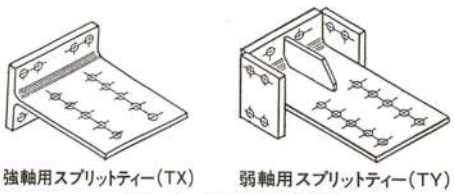
1）SNフレーム概要

SNビルディングの構造は、柱と梁の接合に溶接を使用しないNon-Weld工法によるSNフレームである。

図—1に、SNフレームの仕口部の構成を示すが、柱と梁にはH形鋼を使用し、H形鋼より製作した接合部品と高力ボルトにより組み立てられる両方向ラーメン構造を標準としている。構造としてはこのほかにも、一方向をブレース構造または耐震柱構造とすることが可能である。**図—2**に、接合部品の形状を示す。接合部品は柱・梁の組み合わせに対して保有耐力接合の規定等種々の検討を踏まえて標準化されており、主要部材断面が決定されると自動的に選択される。柱・梁接合部以外の小梁、柱脚等の接合部もすべて溶接を使用しないNon-Weld思想で標準化がなされている。



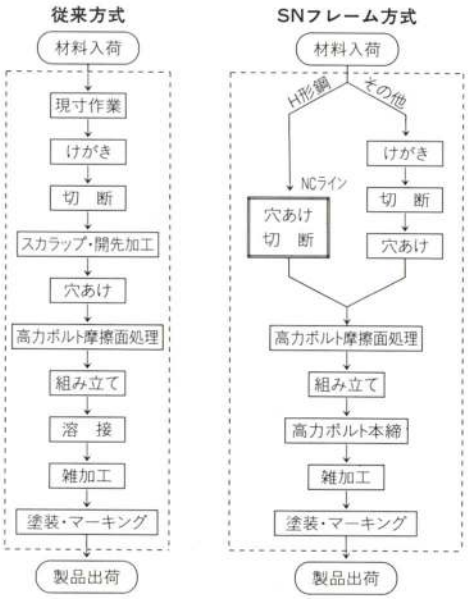
図—1　SNフレーム仕口部構成



図—2　接合部品形状

SNフレームの特長を以下にあげる。

①鉄骨製作費の低減



図—3　加工工程比較

部材の加工は切断・穴あけのみとなり、溶接と、それに伴う開先加工・ひずみ取り・超音波探傷検査等の工程が不要となるため、部材の加工工数が大幅に削減できる。従来工法との加工工程の比較を**図—3**に示す。

②工期の短縮

接合部の標準化により、工作図の作成から部材の加工まで、CAD－CAMが最大限に活用されるため、鉄骨の製作期間が短縮できる。

③品質の向上

構造上最も重要である柱・梁接合部にはH形鋼から製作された接合部品と高力ボルトを使用しているため、時として欠陥を生じる可能性のある溶接接合部と比較して、品質が安定している。

④輸送費の低減

柱の突出部長さが短く、輸送効率が高い。

2）SNフレームの設計

SNフレームの構造設計は、基本的には通常の設計と変わらないが、高力ボルトによる組み立てを行う関係から、以下の点に留意する必要がある。

①梁成の統一

仕口部に両方向から集まる接合部品の取り付けに、高力ボルトを共用しているため、柱のボルト穴位置を合わせる必要があり、X、Y両方向の梁の呼称成を統一する。

②ボルト穴欠損の考慮

柱・梁の断面算定において、ボルト穴の欠損部が最大応力部近傍にあるため、ボルト穴欠損を十分に考慮する必要がある。

SNフレームでは、一貫設計システムによる設計体制を取っているが、これらの留意点を設計システムに組み込み、検討忘れの防止を図っている。

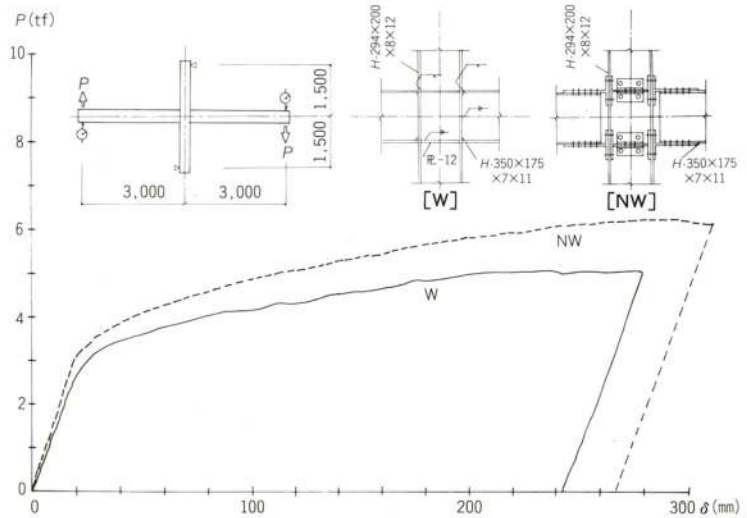
3）SNフレームの製作・施工

部材の製作は原則として切断・穴あけのみのため、H形鋼専用のNCボーリングマシンと切断機を使用して行われる。接合部品は鉄骨加工工場でのNC工作機械の集中使用を避けるため、専用の工場で集中生産されている。このようにして作られた部材と接合ピースは組立図に従って組み立てられ、高力ボルトで本締めされる。溶接による収縮がないため製品精度が高く、フレームの精度も向上している。

現場での建方は、施工図に基づき、通常の工法と同様に行われる。梁の下側フランジにつくスプリットティーが工場で柱に取り付けられているため、梁をその上に置いて仮ボルトを入れることにより円滑に建方を進めることができる。この工法の高力ボルトの本数は、一般の鉄骨と比べ約5割程度多くなっているが、工場でそのうち4割程度が本締めされるため、現場での本締め本数はほぼ同じとなっている。

4）SNフレームの性能

一般に、高力ボルト引張接合による接合部では、接合ピースから高力ボルトを介して柱フランジを面外に曲げる力が働くが、本工法では種々の実験によりフランジの補強も十分になされていることが確認されている。



図—4　水平加力実験結果

図—4に柱・梁接合部全体の水平加力実験結果を示すが、この工法の接合部は、一般の溶接接合部を上回る耐力と変形能力を有している。

おわりに

以上、SNビルディングで使用しているSNフレームの概要を説明した。本工法は、その適用範囲の拡大、外壁の品揃え等、現在も開発を継続しており、今後より一層トータルシステム建築としての完成度を高め、ビル建築の分野に寄与したいと考えている。

（まきの　としお　住友金属工業株式会社システム建築第二部東京システム建築技術室室長）

設備の頁

198

吊り金物

野瀬　誠治

はじめに

建築設備における吊り金物の主な用途として、電気設備、空調設備があるが、吊り重量に対して十分な強度を有する金物で、正しい使い方をしないと吊り金物の脱落、およびこれに伴う配管・ダクトなどの落下といった事態になる恐れがある。

吊り金物の紹介と、その正しい使い方について述べる。

吊り金物の種類

一般に使用されている代表的な金物を**図1～4**に示す。

使用場所の環境条件により、電気亜鉛めっき処理、溶融亜鉛めっき仕上げ、ステンレス製がある。

ほとんどの金物は押しネジで、ネジの締め付け力で支持する構造になっている。金物およびネジの種類、止めるものによって条件が違うので一概に言えないが、締め付けトクル60kg・cm～80kg・cmが適正と言える。

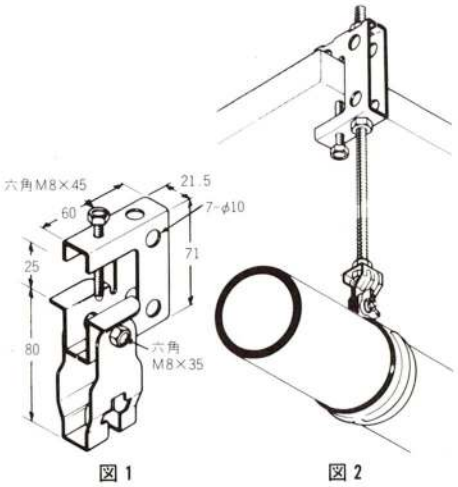


図1　図2

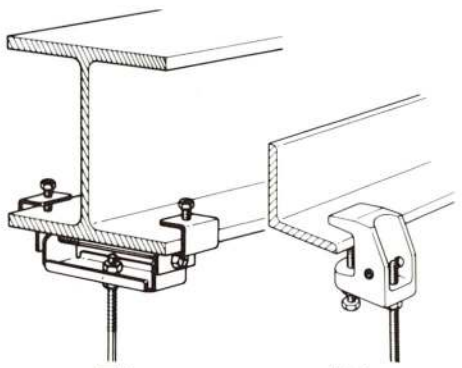


図3　図4

金物にはそれぞれ許容荷重が決められているが、同じ吊り金物でも吊り方法により許容荷重が違うので、メーカーのカタログなどを見て注意する必要がある。例を**図5**に示す。

使用禁止支持例を**図6**に示す。このような場合は、必ず補強金具を併用して、すべり止め対策を行う必要がある。

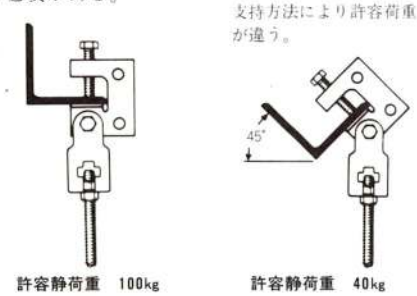


図5

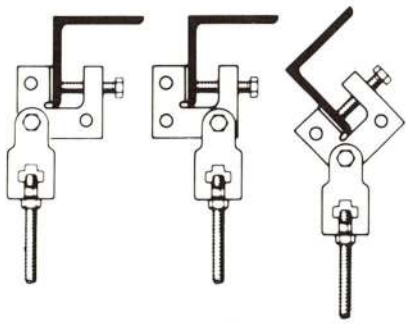


図6　使用禁止例

吊り金物の許容荷重

吊り金物の許容荷重の決め方の規準がないため、メーカーが独自に決めているが、心ずしも十分安全性を考慮して許容荷重を決めているとは限らない。またメーカーによっては許容荷重を表示してない場合もあり、使用に際しては注意する必要がある。

許容荷重とは、製品に、ある荷重が加わっても使用上安全であると保証された荷重であり、製品の最大荷重を安全係数で割った値である。安全係数の値は材料、荷重の種類によって違うが、一般に材料が鋼で静荷重の場合、安全係数は3としているが、吊り金物の場合、ネジの締め付けトルクのバラツキなどを考慮すると、4は必要である。

許容荷重については、メーカーで表示している荷重を鵜呑みにせず、安全係数を確認して、吊り重量に対して安全であるか検討すべきである。

振動対策

ネジは、原理がネジ面の摩擦力に頼っているので、ある範囲の振動が加わるとゆるむという欠点がある。空調の吐出口、コンプレッサーなど振動のある所では何らかの対策が必要である。

完全なゆるみ止め対策は、金物本体あるいはネジの先端を造営材に溶接すれば良いが、現実的には作業が困難な場合が多い。一般的な対策としては、ゆるみ止めに効果のあるネジを使用したり、ダブルナットにしたり、あるいはネジがゆるんでも金物の落下といったことのない構造の金物を使用するとよい。

金物を**図7～10**に示す。

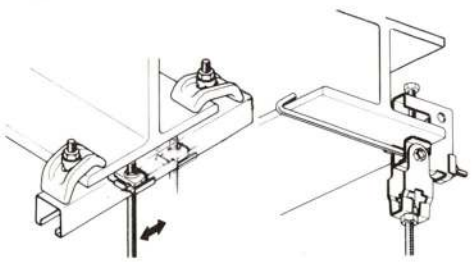


図7　図8

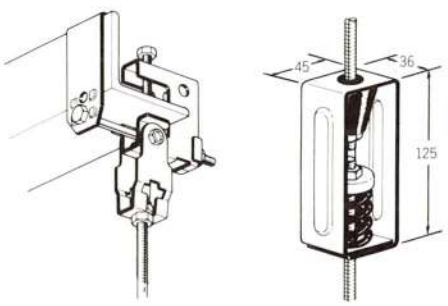


図9　図10

おわりに

配管・ダクトなどが何らかの外力により損傷、変形しても重大な事故になることは少ないと思うが、吊り金物が強度不足やネジのゆるみなどの原因により脱落すると、これに伴い配管・ダクトなどが落下し、二次災害を生じやすい。

吊り金物は造営材に孔明けなどの加工をせず簡単に支持できるので、安易に使いがちである。しかし間違った使い方をすると事故の恐れがあるので、金物の性能を知り、正しい使い方をすることが大事である。

（のせ　せいじ　ネグロス電工株式会社技術部部長）

日本建築協会

月間の動き

平成３年８月分

理　事　会

第４回定例理事会

28日　４時～４時40分　於本会会議室

出席者　佐野会長ほか34名

議事　(1)協賛の件

(2)入退会者承認の件

(3)報告事項

編　集　委　員　会

第２回計画分科会―建築系―

１日　７時～９時半　於本会会議室

出席者　佐藤幹事代行ほか５名

議事　次回本分科会特集の検討

第５回作品作風小委員会

１日　６時半～９時半　於本会会議室

出席者　宮下副委員長ほか４名

議事　(1)作品の掲載状況並びに掲載予定の報告

(2)作品の選定

(3)「Gallery」内容報告並びに掲載予定

(4)誌面の検討

第３回設備分科会

１日　午前10時～12時　於本会会議室

出席者　伊達幹事ほか２名

議事　(1)編集委員会の報告

(2)３月号「建築家のための設備知識―III―」特集の企画

第５回編集委員会

８日　４時～６時　於本会会議室

出席者　溝神委員長ほか２名

議事　(1)８月号「建築をめぐるトラブルとその解決」・「建設現場のイメージアップ作戦」特集経過報告

(2)９月号「空間のアイデンティティ」・「きんでん」・「大建設計」特集経過報告

(3)10月号「住宅政策への提言」・「大林組」特集経過報告

(4)11月号「第38回青年技術者」・「建築と土木（構造編）」特集経過報告

(5)12月号「施工材料」・「大阪府住宅シンポジウム」特集経過報告

(6)その他の検討事項

(7)収支状況報告

第４回施工材料分科会

９日　４時半～６時半　於本会会議室

出席者　村上幹事ほか２名

議事　平成３年度第２回特集（平成３年12月号予定）

12月号「21世紀の住まいを考えるシンポジウム」特集第１回会議

９日　10時～11時半　於本会会議室

出席者　志摩宣彦氏ほか４名

議事　「21世紀の住まいを考えるシンポジウム」特集内容検討

第５回会員企画小委員会

13日　６時半～８時　於本会会議室

出席者　高田副委員長ほか２名

議事　シリーズものの報告と掲載予定

第３回計画系―インテリア・住宅―分科会

22日　６時半～10時　於本会会議室

出席者　北浦幹事ほか８名

議事　平成４年２月号「本分科会」特集検討

第５回広告企画小委員会

27日　４時～５時半　於本会会議室

出席者　溝神委員長ほか６名

議事　(1)８月号「建築をめぐるトラブル」・「建設現場のイメージアップ作戦」特集広告経過報告

(2)９月号「空間のアイデンティティ」・「大建設計」・「きんでん」特集広告経過報告

(3)10月号「自治体住宅政策への提言」・「大林組」特集広告経過報告

(4)収支状況報告

第３回計画分科会―建築系―

28日　７時～９時半　於本会会議室

出席者　北村幹事ほか６名

議事　次回本分科会特集の検討

事　業　委　員　会

第４回大阪国際平和センター企画分科会

６日　７時～９時50分

ゲスト　小泉雅生／シーラカンス

出席者　松隈幹事ほか３名

議事　シーラカンス・大阪国際平和センター、作品展・講演会の企画について

第３回九州話題建築見学分科会

21日　４時～７時　於本会会議室

出席者　久保田幹事ほか７名

議事　九州見学会の企画について

教　育　委　員　会

第４回工高生教育小委員会

22日　６時～８時　於本会会議室

出席者　片倉教育委員長ほか７名

議事　(1)日本建築協会創立75周年記念事業「工高生デザインコンクール入選作品集」について

(2)「施工教育用ビデオ」について

建築工事実務講習会

施工計画編

28日　９時～５時　於建設交流館

科目・講師

施工計画Ⅰ　藤井孝晏氏（大林組建築工務部）

施工計画Ⅱ　高橋憲昭氏（松村組建築部）

受講者　120名

建　築　ク　ラ　ブ

第232回朝食会

６日　８時～９時半　於大阪グランドホテル

演　題　バルト三国を訪ね「ペレストロイカ」の実態を視る

講　師　扇　貞雄氏（共産圏動向研究所長）

出席者　55名

５月の入会者（敬称略）

〔団体会員１社〕

㈱大晃

〔個人会員21名〕

大江　義久（大江建築事務所）	大原　紀子（造景）	河原　慎治（鹿島建設）
黒田　政光（川崎重工業）	田中　健博（清水建設）	松岡　秀幸（川西市役所）
本谷　淳（大林組）	森岡　準一（赤松晋野建築設計㈱）	森田　隆司（大和ハウス工業）
尾崎　久純（東畑建築事務所）	崎田　典男（東畑建築事務所）	中川　敬二（東畑建築事務所）
中野　格（東畑建築事務所）	中村　文紀（東畑建築事務所）	渡辺　修（中部サーモグラフィー㈱）

・準会員より正会員へ転格者

池田　教子　　岩永　裕之　　奥平二三子

菊池　延江　　森下まゆみ　　吉積　俊二

◀会員の訃報

〔団体会員２名〕

佐藤　欣治　（82歳）　平成３年８月21日死亡
（佐藤工業会長）

奥田清佐衛門（63歳）　平成３年８月27日死亡
（浅沼組常務）

〔個人会員２名〕

浅野　清　（86歳）　平成３年８月19日死亡
（愛知工業大学）

川口喜代枝　（81歳）　平成３年９月３日死亡

玉岡　四郎　（57歳）　平成３年９月21日死亡

〔元評議員〕

森　隆雄　（67歳）　平成３年10月１日死亡
（間組副社長）

訂正とお詫び

1991年９月号「空間のアイデンティティ」特集中「ＣＩにみるアイデンティティ」頁の記事を下記のように訂正するとともに、関係の方々に謹んでお詫びします。（編集部）

飛島建設

■制定年
昭和23年

■制定理由
マークは、TOBISHIMAの「T」と、飛島土木（旧社名）の「D」にツルハシとスコップのフォルムをダブルイメージさせた。昭和52年ＣＩの導入により旧マークをリデザインした。
「進取性」「社会との調和」「高度な技術」を表現。

出雲建築展・シンポジウム
——出雲建築フォーラム

■出雲建築展
と　き　1991年11月3日(日)、4日(月)
AM10：00～PM5：00
ところ　島根県簸川郡大社町旧ＪＲ出雲大社駅舎
招待作家　菊竹清訓、高松　伸、新居千秋、渡辺豊和、相田武文、山下和正、毛綱毅曠、六角鬼丈、竹山　聖、宇野　求、山本理顕、山崎泰孝、出江　寛

■シンポジウム
と　き　1991年11月4日AM1：30～4：00
ところ　出雲大社社務所
パネラー　長谷川堯、高松　伸、布野修司、藤間　享

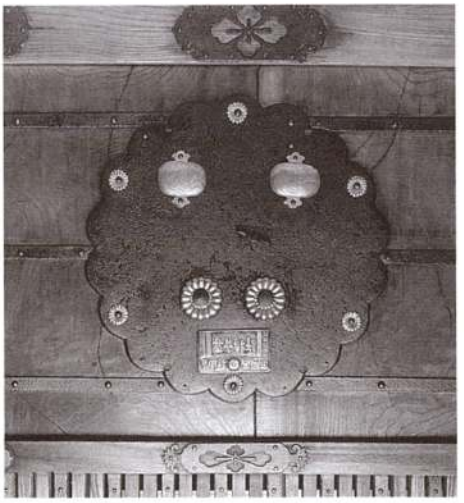
マンションリフォームの現状と課題
——住まいのリフォームセミナー

と　き　1991年11月19日(火)
PM1：20～PM4：00
ところ　大阪証券会館
（大阪市中央区北浜1－1－16）
テーマ　「リフォーム産業の展望とマンションリフォーム」
講師　小原二郎(千葉工業大学理事・教授)
「マンションリフォームの設計・施工の問題点とその対策」
講師　星川晃二郎(汎建築研究所設計室長)
受講料　5000円（テキスト代含む）
申込先　〒107 東京都港区赤坂2－10－8
信和ビル8Ｆ
㈱日本住宅リフォームセンター企画部
TEL 03－3585－7131
締切り　1991年11月8日
但し、定員（120名）になり次第、締切らせていただきます。

鍵のかたち・錠のふしぎ展
——ＩＮＡＸギャラリー大阪企画展

と　き　1991年11月12日(火)～12月20日(金)
AM10：00～PM6：00
ところ　ＩＮＡＸ大阪ショールーム2Ｆ
（大阪市西区新町1－7－1）
TEL 06－532－1956

■講演会
と　き　1991年11月12日(火)PM6：00～7：30
ところ　ＩＮＡＸ大阪支店8Ｆ会議室
講　師　稲田淳夫（錠前研究家）


からくり錠（二上外次郎作）

夢の封印（Sealing of Dreams）
——倉俣史朗展

と　き　1991年11月8日(金)～12月11日(水)
AM11：00～PM7：00
ところ　草月ホール
入場料　無料
問合せ　GALLERY・MA
ＴＥＬ03－3402－1010

製品情報

集成材接合金物
シマリス、エポキシ注入ボルト——セブン工業㈱

大断面構造用集成材構造では、集成材の応力緩和のため、例え高力ボルトを使用しても、鋼構造のような摩擦接合を施すことはできない。したがって切削孔の許容差を0とすることが望ましいが、技術的に困難であり、最低でも＋1～2㎜としているのが現状である。このため接合部の変形が構造体の応力分布に影響を及ぼす構造では、エポキシ樹脂等で、接合部の隙間を充填することが効果的である。

エポキシ樹脂等を注入する作業は従来困難であったが、このエポキシ注入ボルトを使用することにより、集成材を汚すことなく、しかも容易にボルトと孔の隙間にエポキシ樹脂等を充填することができるものである。

●特長
ボルトの一端に開口する中芯孔から、集成材とボルトの隙間に通じる孔を持ち、この孔から、エポキシ樹脂等を注入可能にしたものである。従来注入するために集成材に5㎜程度の孔を開けていたが、部材が大きくなると、注入が困難になり手間のかかる作業であった。このボルトを使用することにより、次のことが改善された。

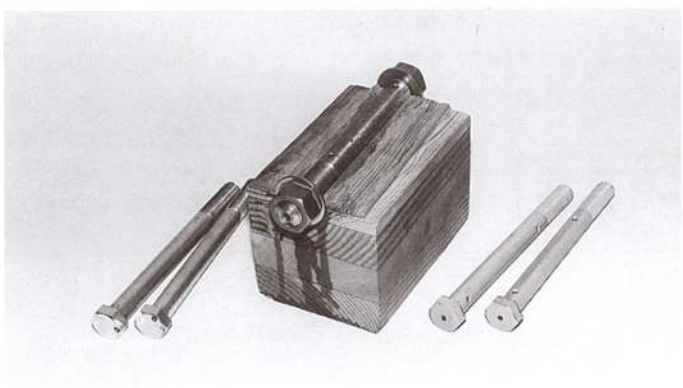
1．集成材とボルト孔のガタをなくすことができる。
2．ボルトから集成材に伝えられる集中力を、等分布化することができる。
3．注入作業が容易になり、集成材がエポキシ樹脂等で汚れない。

●材質
ステンレス鋼　SUS304
SS41

●規格
ボルト径 ϕ20㎜
長さ130㎜～240㎜

●仕様
中心孔径は、A側は ϕ 4㎜、長さ26㎜、B側は ϕ 5㎜、長さ65㎜である。ボルトを直交する孔は、ϕ 4㎜である。

●問い合わせ
セブン工業㈱ヘビーティンバー事業室
名古屋事務所　〒460 名古屋市中区丸の内3－6－4リバーパーク丸の内ビル3Ｆ
TEL　052－961－1477
FAX　052－961－6977


エポキシ注入ボルト

本社　〒509-04 岐阜県加茂郡七宗町中麻生1107
TEL　0574－48－2277
FAX　0574－48－1930
東京　〒160 東京都新宿区西新宿8－20－2
TEL　03－3363－3451
FAX　03－3363－5104

東海支部相談役

川口喜代枝氏逝く



明治43年９月11日生（名古屋市千種区稲舟通）

略歴

昭和６年３月　名古屋高等工業学校建築科（現名古屋工業大学）卒業
７年　万常紙店臨時建築係
10年10月　篠田建築事務所入所主任技術者となる
20年10月　同所解散と同時に篠田川口建築事務所創設所長となる
42年10月　㈱協同設備事務所開設所長となる
60年10月　㈱篠田川口建築事務所所長を退き会長となる
平成３年９月３日　逝去　享年80歳

叙勲

昭和55年11月　勲五等双光旭日賞　受賞

所属団体歴

㈳日本建築協会東海支部相談役
㈳日本建築学会名誉会員
㈳愛知建築士会相談役

追悼の辞

中島　一

謹んで、川口喜代枝の御霊前に、お訣れの言葉を申し上げます。

９月３日午前８時日本建築協会東海支部の事務局から、相談役の川口喜代枝氏が亡くなられたとの電話を受けました。

実は８月19日には浅野情氏の御逝去で永のお訣れをしたばかりの私は、建築学会と建築設計界の大恩人であり、学窓の大先輩のお二人を相前後してお別れする人生の運命に、私の心の中に大きな空洞ができた思いがいたします。

川口先生が身体の不調を訴えて、中田病院に入院されたと、仄かにお聞きしていたが、先生のいつもの「人様にご迷惑をおかけしないように」との心やさしいご配慮のことからでしょう。このことを承知していた方は、ほとんどなかったのではないでしょうか。

いま私は、名古屋に戻ってきて30年、この永きに及ぶ御指導御薫陶を思いますと心の衝撃も大きく忘れ去ることは、とてもできるものではありません。

名古屋へ戻って間もなく、私は日本建築学会東海支部の常議員に選ばれた翌年、支部長の選挙がありました。川口先生は対抗者を見事に打ち破り支部長に当選されました。

従来は、学会の支部長は、そのほとんどが、名古屋工業大学と名古屋大学の先生方が就任されていたものでした。建築設計界から選ばれたのは、川口先生が始まりとなりました。支部長就任間もなく、ごく少数の同窓の者が集まり、川口先生を囲む会をもった折、先生は、私どもに、「オイ！何か間違いではないのか」と、満面にはにかみの色を湛えられたお顔をいまでも想い出します。

この頃から建築界に対する御指導が深まってきました。

愛知建築士会の会長に就任され、私は常務理事にとご推挙いただきました。この４年間は、数多くの事業が待っており、企画担当をおおせつかった私は、先生の強力なリーダーシップに走りまわることが多く、建築行政に協力する意味と、建築士としての重要性を教えられ、又身をもって体験する機会を与えていただいたものです。

日本建築協会東海支部としては、東海地方の建築界の重鎮でもあり、当然会員でもあったことでもあり、一圓支部長のあとを襲って私が支部長をおおせつかったころから、支部役員会において、新設の相談役に御推戴を申し上げることになりました。当支部の役員会は、３か月に一回程度の頻度で開催されていますが、時折ふらりとお顔を出していただき、何かとご高説を拝聴できたことは、私ども支部役員の大きな励みとなり、また幅広い視野を示していただいたことにより、より適切な支部活動ができたことを感謝しています。

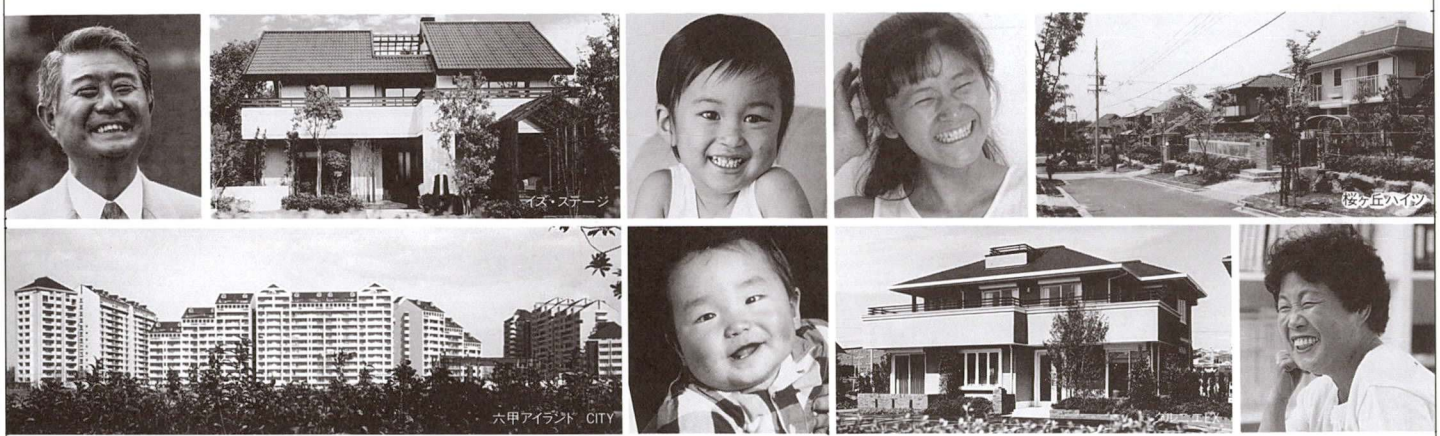
東海支部復活30周年にあたり、支部運営に弛まないご尽力をいただいたと佐野会長からの感謝状をお届けにいったときは、甚だお元気であったし、「まあ、よく来てくれたネ」と労らっていただいた。

川口先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。

（日本建築協会東海支部長）

10月は住宅月間

SEKISUI HOUSE



for the next stage

生涯を見つめた住まいと環境の創造

人にはいろんな明日・next stageがあります。その一人一人の明日をより豊かで実りあるものにしたい、そんな思いを込めて積水ハウスのスローガンは for the next stage。生涯の暮らしを見つめ、より人間性豊かな明日の住まいへと環境を最高の技術で今のあなたにお届けする。――私たちの変わらない基本姿勢がここにあり、積水ハウスは常にあなたのnext stageとともにあり続けます。

積水ハウス株式会社　本社／〒530　大阪市北区中之島6丁目2番27号 中之島センタービル内　TEL.06-446-3111　東京支社／〒160　東京都新宿区西新宿1丁目6番1号 新宿エルタワー内　TEL.03-3346-6500

10月は住宅月間

限りなく、本物志向

みんなの“我が間ま”かなう家。

新居の間取りを考えるとなると、ご家族おひとりおひとりが欲ばりになってしまうものです。でも、GOMASなら大丈夫。
みなさんの〝我が間ま〟を、きっとかなえてさしあげます。その例として2つの〝我が間ま〟をご紹介しましょう。

我が間ま 1

家族そろって、のんびりのびのび過ごしたい。

こころからリラックスできるファミリースペースがほしい。家族みんなで、ゆったりなごやかに団らんのひとときを楽しみたい。

YES



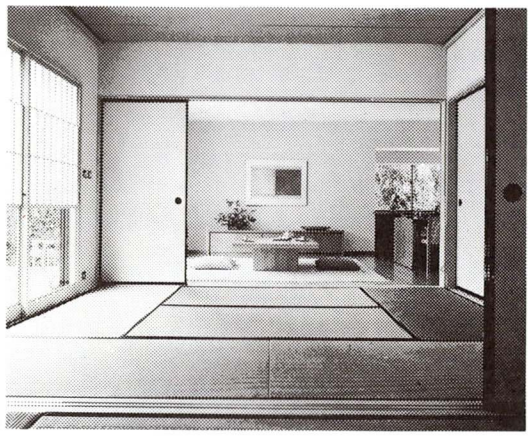
吹き抜けのあるリビングダイニングを設計してみました。開放感あふれるスペースが大きなくつろぎを演出します。キッチンも対面式ですから、料理しながらでもご家族との会話が楽しめます。

我が間ま 2

四季を愛し、伝統の暮らしを尊重したい。

花や月を愛し、雛祭りや端午の節句を祝い、雪見酒をたしなむ…。暮らしも住まいも、和風がいちばん。本格的な和室がほしい。

YES



本格的な和室の続き間を設けてみました。開け放つとリビングまで連続して使えます。四季の催しの場に客間にと大活躍します。また三世代同居の際には、ご両親さまの居室としても最適です。



※写真はGOMASの外観の一例です。

あなたにいい家つくります。
新しい住まいづくりのブランド、「ゴマス」。

YES, GOMAS

MISAWA
ミサワホーム
〒163 東京都新宿区西新宿2丁目4番1号
TEL.03(3345)1111

第2回 中小企業優秀新技術 新製品賞受賞

打放しコンクリートの高耐久性仕上げから

ヌレ ムラを完全追放

CREATIVE 吉田工法



素材の質感を活かした生地仕上げ

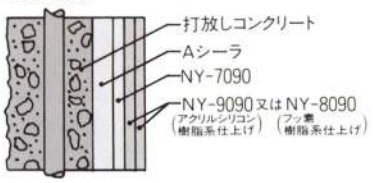
SEFシステムはアクリルシリコン樹脂系仕上げとフッ素樹脂系仕上げの2タイプからなります。

SEF（セフ）システムは浸透性防水材、塗膜形防水材と高耐久性樹脂を組み合わせることにより、各々の特長が相乗効果を発揮。在来工法では不可能だったヌレ・ムラを防止します。しかも打放しコンクリートの素材を活かした高耐久性仕上げシステムです。

●ヌレ・ムラが全くありません●高耐久性弾性樹脂仕上げ●弾性塗膜のため下地クラックに追従●完全な中性化防止機能●透明仕上げによる意匠性の確保●クリアー・艶消しの選択可能●エフロ・さび・汚れの完全除去 (PAT.P.)

責任施工で年限保証付

工程の概要



高耐久性打放しコンクリート仕上げ

打放しコンクリート SEF（セフ）システム

カタログをご請求ください。

ニチエー吉田株式会社

本　社 〒435 静岡県浜松市上西町1314番地 ☎(0534)64-2111 FAX(0534)64-2117
営業所 東京 ☎(03)3718-7695 大阪 ☎(06)399-7958

好評発売中　鋳汁特殊洗浄剤　ケミカルエースR

新刊 全国書店で好評発売中！

新・固定モーメント法による

らくらく水平応力解析

部材の水平応力の解析が簡単にできる新・固定モーメント法を、セットバックの建物や山形ラーメンの例を入れつつ詳解。

槇谷栄次 著　A5判　192頁　税込定価2,800円

はじめてシリーズ第2弾！

はじめてのコンクリート合成スラブ

コンクリート合成スラブのしくみから設計・施工の実務までを、図表や写真を数多く使ってやさしく解説。

槇谷栄次＋吉野次彦　共著　A5判　137頁　税込定価2,500円

建築技術8月増刊号

たかが目地、されど目地 目地と継目のディテール

建物の機能や外観上のポイントとなる「目地」を徹底解剖。

加賀秀治　監修　A4判　256頁　税込定価3,800円

株式会社　建築技術
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷1-1-2 福西ビル
TEL. 03-5371-3811 FAX. 03-5371-8282

建築技術者必携の専門誌 建築技術 11

10月18日 全国書店一斉発売 税込定価 1,240円

特集

屋根デザインの多様化とその技術

魅せる屋根を目指して

近年、わが国の気候風土を背景とした雨水の速やかな排出、被覆としての躯体の保護などによるレベルの高い建物性能の達成、町並みやスカイラインを意識した魅力的なデザインを実現する大きな要素として屋根が見直され、各種の建物に勾配屋根をかける例が多くなってきています。

今回の特集では、“屋根デザインの多様化とその技術”というテーマに基づき、材料と工法の現状と動向を紹介します。また、屋根を設計・施工する上で重要となる点についても克明に説明しています。

序・欧州屋根事情

総論・屋根デザインの多様化とその技術

1．屋根材料と工法の現状と新傾向

2．屋根構法の再点検

3．勾配屋根の防水

4．天窓（トップライト）の種類と性能

◉屋根のマテリアル
（金属・塗料・プラスチック用語解説）

連載

住まいのアメニティ⑤
～生理人類学からのメッセージ～
住文化からみたアメニティ

地下水のはなし⑥
地下室の漏水対策

限界状態設計法⑧
基礎構造の信頼性評価

室谷

内装不燃材

室谷商事株式会社

本社　神戸市中央区三宮町3−7−6(神戸フクトクビル5階)
電話　神戸(331) 0881〜3
支店　大阪市北区西天満2丁目6番8号(堂ビル5階)
電話　大阪(364) 2031〜4
倉庫　神戸市東灘区御影石町4丁目（電話811-3610)

OM

テトカッパー防水層

カッパー防水帯——コーパータイト／オクロン防水帯

資料をご請求下さい。

奥山化工業株式会社

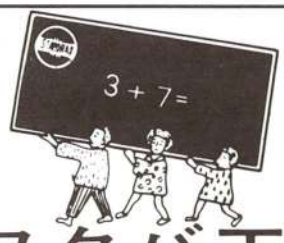
本　社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル　TEL03(3571)2703㈹ FAX03(3571)0264
大阪事務所TEL06(391)1081−2FAX 06(395)2109　名古屋出張所TEL052(811)3660
横浜営業所TEL045(320)4832　FAX045(320)4765　厚木出張所TEL0462(21)1761FAX0462(23)1341
埼玉営業所TEL048(774)2845　茨城出張所TEL0292(28)0878FAX0292(28)2614

新しい時代の、新しい扉をひらきたい。

T Y Shutter

東洋シヤッター株式会社

本　社　〒540 大阪市中央区常盤町1−3−8（日本生命谷町ビル）
TEL(06)943−6571(代)
■東京/横浜/盛岡/仙台/水戸/静岡/岡崎/名古屋/富山/大津/京都/神戸/広島/高松/福岡/他全国主要都市



Standard　Board&Slate

フタバ工業

〒547　大阪市平野区加美北3−4−5　TEL 大阪06(792)5858(代)

奉仕感謝の店

タイル工事施工

株式会社 川岸窯業商店

本　社　☎550 大阪市西区西本町1−13−33
電話　大阪 06(532)代0461　☎550
天理営業所　天理市丹波市新町50

情報処理・電算写植組版

日本写植印刷株式会社

代表取締役　神田都義

本　社　〒545 大阪市阿倍野区阪南町7-5-30　☎06(606)1111代
日本写植センター　〒892 鹿児島市名山町4-7 三宝ビル　☎0992 (26)4371
津山写植センター　〒708 津山市福田1372−1　☎0868 (28)4377



ナニワ瓦株式会社

あらゆる屋根工事の相談は、

〒556 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 五六一〜七四一六
ファックス 五六一〜七四五四

空気調和・給排水・衛生・防災設備　設計・施工

株式会社 朝日工業社

本　　社　東京都港区浜松町１-25-７　電話(3434)6171(大代)
大阪支社　大阪市淀川区加島１-58-59　電話（302)2271(代)
支　　店　北海道・東北・名古屋・中国・九州
営 業 所　釧路・函館・盛岡・横浜・静岡・京都・神戸

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社

大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－3344－1851(大代)　大阪本社☎06－448－3603(代)
大阪支社☎06－448－5851(代)　名古屋支店☎052－211－1535(代)　中国支店☎082－247－5541
九州支店☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒650 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒102 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営 業 所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出 張 所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空気調和
給排水衛生

搬送機設備
設計施工

人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530 大阪市北区西天満３丁目６番１４号
電話　０６－３６４－６６６１(代表)
本　　社　〒100 東京都千代田区丸の内３丁目３番１号
電話　０３-３２１１-８５１１(代表)

空気調和設備
給排水設備
電気設備

産業設備
水処理施設
環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　白谷清二
大阪支店長　三田村嘉也

大阪支店　大阪市中央区北浜2－2－21　電話06(202)3071(代表)
本　　店　東京都千代田区有楽町1-4-1　電話03(3502)6111(大代)
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市北区西天満５-11-12　電 06－313－1846
枚方営業所　枚方市甲斐田東町９－３　電0720－49－2128

空気調和設備
衛生設備設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町３番５号　電話（352）１１３１(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町２－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津６丁目８番４号　**電話大阪(458)3628番**
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話 06－949－1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03－3344－1911
大阪本店　大阪市北区西天満４丁目６番18号　電話 06－363－1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・神戸・広島・福岡
営 業 所　札幌・京都・松江
出 張 所　青森・秋田・盛岡・大宮・千葉・川崎・富山・福井・和歌山・鳥取・岡山・高松・下関・熊本・鹿児島・沖縄

空調・衛生・防災設備　設計並施工

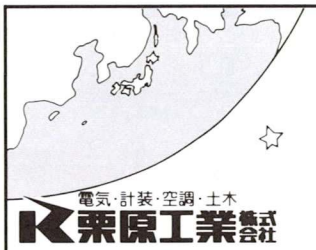
日本管工業株式会社

本社及京都支店　京都市南区西九条豊田町２０番地の１
電話(681)５１０１～５・夜間専用(691)1045
大阪支店　大阪市北区天満1-5-20　電話（06)352－3501(代)
三重支店　津市栄町２－１１１　電話(0592)26－3610(代)
四日市営業所　四日市市西末広町　電話(0593)53－7431(代)
滋賀営業所　大津市中央２丁目4-28　電話(0775)22－9738(代)

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町２丁目11番16号(オートセンタービル１．２階)
郵便番号542　電話 大阪（06）768－５０３１　代表
メンテナンス部　電　話　大阪（０６）７６８－１６５１　代表
東京支店　東京都文京区小石川１丁目12番14号（日本生命小石川ビル７階）
郵便番号112　電話（０３）５６８９－２３５１代表



自然環境を大切に
夢ある未来を
くりエイト！

電気・計装・空調・土木
栗原工業株式会社
本　社／〒530 大阪市北区角田町1番1号（東阪急ビル）
TEL 06(313)1101　FAX 06(315)0050

Carrier
冷暖房は
CARRIER
キャリア
東洋キャリア工業㈱デストビューター関西地区
日本冷熱工産株式会社
本社及大阪営業所　吹田市豊津町４０番３８号
電話 大阪（384）1201～7

電気工事設計施工
株式会社 三興社
代表取締役 土井敏裕
本　社　大阪市北区西天満２丁目６－８（堂ビル５階）
電　話　０６（３６１）３６７１（代）
支　店　東京都中央区日本橋茅場町２丁目１７番３号
電　話　０３（３６６６）１４７８（代）
営業所　堺・泉　州・泉　南・滋　賀

――誠実と技術でお応えする――
住友電設株式会社
取締役会長 代谷正元
取締役社長 相馬一男
本社／〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)537-3400(大代)　東京／〒105 東京都港区芝2丁目2-17 ☎(03)3454-7311(大代)
営業種目（設計・施工・監理）
●電力工事：配変電設備工事／架空送電線工事／地中送電線工事／土木工事
●設備工事：ビル電気設備工事／工場電気設備工事／防爆電気設備工事／計装工事／空調工事／給排水衛生工事／特殊配管工事／消防施設設備工事
●プラント工事
●情報システム工事：光伝送システム工事／CATVシステム工事／各種アンテナ装置工事

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
三宝電機株式会社
取締役社長 嘉納秀一
本　社　〒530 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル)　TEL 06(364)1471・FAX 06(364)5533
東京支社　〒105 東京都港区新橋2-16(ニュー新橋ビル)　TEL03(3504)0231・FAX 03(504)0268
名古屋支店　〒462 名古屋市北区金城3-12-14　TEL052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店　〒657 神戸市灘区岩屋中町1-2-9(エビスビル)　TEL078(881)5571・FAX078(871)6261
堺研究所　〒590 大阪府堺市三宝町七丁389　TEL0722(27)8408・FAX0722(27)1424

電気設備 設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本　社　大阪市北区中之島３－２－４　朝日ビル　TEL 大阪06（385）1361(代)
大阪営業所　TEL 大阪06(385)1361(代)　京都営業所　TEL 京都075(311)1185(代)
東京営業所　TEL 東京03(3574)０６６５　福岡出張所　TEL 福岡092(771)６１６８

特殊壁装材製造販売　和室に最適
●聚楽壁紙●ホクシノン（無機質壁紙）
(株)ホクシンクロス
〒583 大阪府羽曳野市島泉８－173－１
TEL(０７２９)３９－３６１０
工場　〒580　大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一　〒639-11奈良県大和郡山市小泉町２７４４
第二　〒597　大阪府貝塚市王子５０１

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
専務取締役支社長 横田幸一
大阪市中央区高麗橋４丁目3番7号　電話大阪（202）0325～９番
本　社　東京都千代田区西神田１丁目４番５号
支　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・中部・九州

営業種目
●防水工事　塗布防水・シート防水・モルタル防水
●樹脂注入接着工法　各種樹脂注入接着補修工事
●亀裂補修工事　各種樹脂注入・充填・コーキング
●シーリング工事　シリコン・チオコール・ウレタン・アクリル
●吹付工事　アクリル・リシン・弾性タイル・その他
◇建設業許可　大阪府知事許可（般－53）第51225号
◇日本シーリング工事業協会々員
大阪市北区末広町３－21
星和地所扇町ビル201S
TEL06(315)０７０１
㈱特殊技研

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
株式会社エヌエムビー
株式会社ポゾリス物産
Master Builders Technologies
本　社：東京都港区六本木３－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-202-3294

技術と信頼で人と企業に貢献する
青葉印刷株式会社
代表取締役社長 依藤孝行
〒534 大阪市都島区中野町2丁目10番11号　TEL(06)351—5428(代)
FAX(06)351—5299

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社　本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

特　許・耐酸被覆鋼板
耐久建築屋根・外壁材料

オリエンタルメタル

半世紀の実績が誇る技術とアフターケアー!

長尺物・色彩豊富・責任施工

品　種・オリエンタルカラースーパーメタル(CSPM)
・オリエンタルスチールライト(ＳＴＬ)
・オリエンタルメタル(ＯＰＭ)
・鋼板製オリエンタルフネンシングル
・オリエンタルオリセラム
・オリエンタルエターノコアー(ETC-F)

波板規格　S小波・S大波・V波・ボックス波・Wジャンボ波・Vデッキ
SVジャンボ波・ボルトレスルーフBL・其の他

用　途　平板・波板・棟包・雨押類・谷樋・竪樋・軒樋
各種換気装置〔モニター・ベンチレーター・ムーバー・エキゾスター(強制)〕
ボーロイド(断熱材)D.G.K.　※カタログをご請求下さい。



大和郡山市九条スポーツセンター屋根　エターノコアーF

オリエンタルメタル製造株式会社

大阪本社　〒660 尼崎市昭和南通り３―26　電話大阪(06)412―5131代
大阪支店及工場　大阪・九州・名古屋・広島・東条・姫路
東京本社及工場　〒335 蕨市塚越５丁目６番32号　電話 蕨(0484)42―3115代
支店及工場　東北・東京・関東・熊谷

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充塡モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート軀体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）443－6181

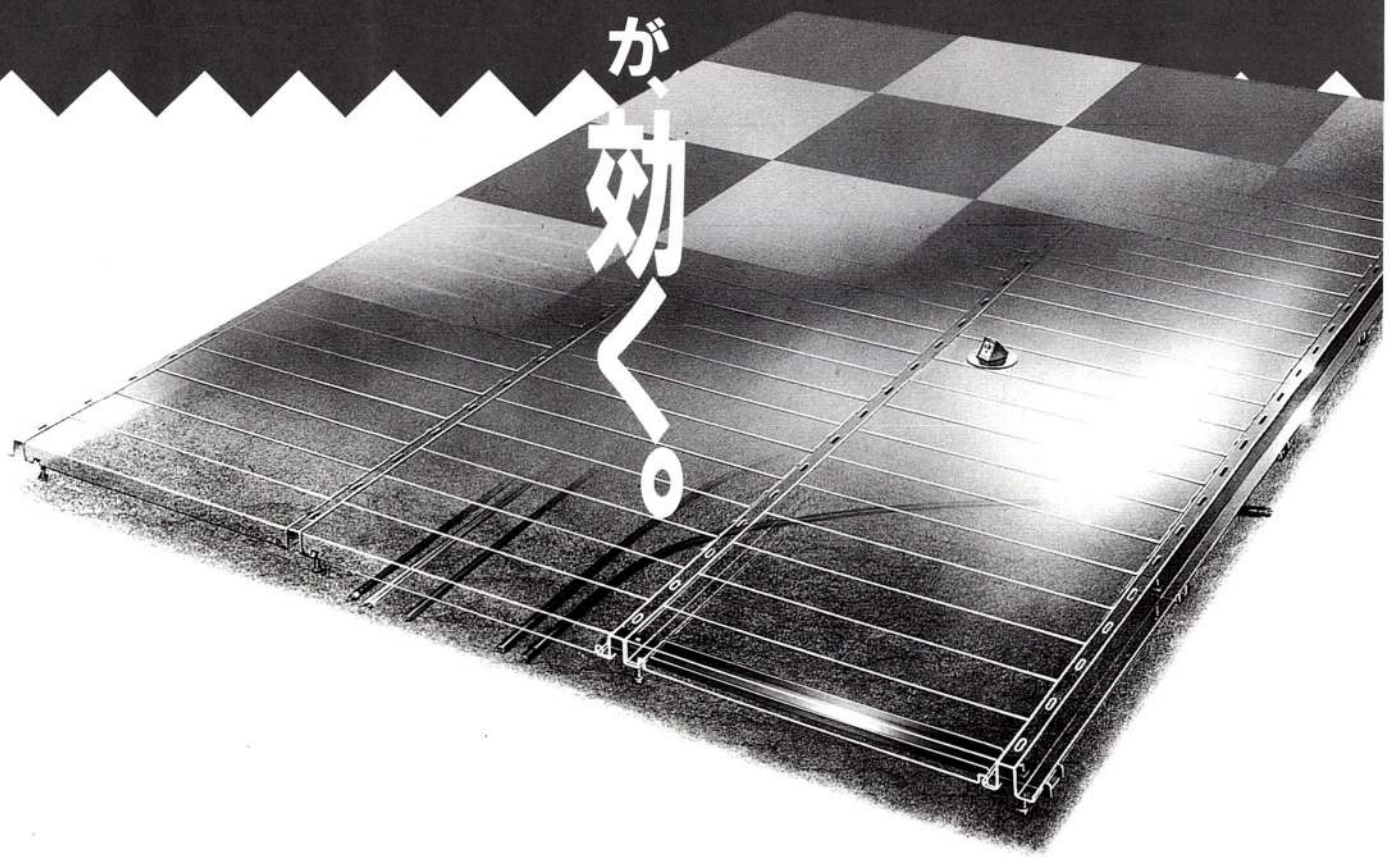
光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）252－6000

株式会社トーゴー
TEL 滋賀・守山(0775)83－2381

建築と社会
第72輯第10号

床を創る TAJIMA

浮き根太式が、効く。



ガタツキがなく、安全で丈夫な鋼製二重床システム

浮き根太式鋼製二重床

タジマ フロアベース



安全に効く、大容量配線に効く、荷重に効く、浮き根太式が効く。そのパワーが、現在の二重床におけるあらゆる問題を解決します。タジマ フロアベース。構造と部材、そして施工が一体となった、タジマならではの技術のシステム二重床。根太でガッチリ連結された床面が、確かな強度と安定性を実現します。さらに耐震性も標準装備。まさに"床"そのものの、安心と安全を提供できる二重床です。

※フロアベースは浮き根太式のため、支持脚の長さを個別に調節できます。したがって、下地の不陸や段差への自在な対応が可能です。

HUMAN WORKS
タジマは"床づくり"で人を語ります。

株式会社タジマ
営業本部■〒101東京都千代田区岩本町3-11-13 ☎03-3866-6101 FAX03-3862-5908
東京営業所■〒101東京都千代田区岩本町3-10-12山源ビル ☎03-3861-3101 FAX03-3861-3615
大阪営業所■〒550大阪市西区京町堀1-10-5 ☎06-441-5951 FAX06-444-2596

社団法人 日本建築協会 〒530 大阪市北区梅田1の1の3の2100 電話大阪06(348)0635 FAX06(348)0634

振替口座大阪一三九九七五番
正会員の購読料は会費に含めて徴収
定価九八〇円（本体九五一円 消費税九円 送料共）

雑誌 03379-10